
クレしん&ドラえもんズ～ホラー＆ファンタジー劇場～恐怖のカスカベ吸血鬼タウン

虹純晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレしん＆ドラえもんズ／ホラー＆ファンタジー劇場／恐怖の力

スカベ吸血鬼タウン

【Zコード】

N3734D

【作者名】

虹純晶

【あらすじ】

ドラえもんズが、21世紀の埼玉県春日部市に呼び寄せられてしまつた。そこでは恐るべき事態が進展していて、一人の子供が危機に…！ドラえもんズのダイヤモンドより堅い友情が、今輝きを放つ！！

1・タイムマシン暴走ー（前書き）

クレしんホラーの話がめちゃくちゃになつてきたので、パワーアップさせて（？）コーヒーハークです。どうもすいません（泣）。朝日さん、設定パクっていめんなさい。でも読んでくれると嬉しいです。ちなみにドライモンは登場しませんので、ファンの方は本当にすみません……。酷評でもじやんじやんお寄せくださいーー！

1・タイムマシン暴走！

どうして？

どうなつてゐるの？何でこんなふうに…。

分からぬ。何もかも分からぬ。分かつてゐるのはただ一つ。こ

こから逃げなければならぬといふことだけだつた。

逃げなければ…逃げなければ、殺される！

ほんの少し前まで、友達だつた人たちに……。

その頃。時は急激に進み、22世紀。

いつもの一人が、すさまじい口ゲンカを繰り広げていた。

「王ド^ラのせいだぞ！お前が『レテレ』してゐるから、セニヨリータたちが逃げちまつたじゃないか！」

「悪いのは自分ですよ、エル・マタドーラ！僕が女の子が苦手なの、知つてゐるくせに無理やりつれできたりして……」

「まあまあ二人共、落ち着くであーる。」

そして、またいつものように仲裁に入るドラメット三世。ナンパに失敗してご機嫌斜めなマタドーラを、王ド^ラから引き離す。

「そうだよ二人共、ケンカはいけないよ。」

拍子抜けするような口調で止めに入ったのは、サッカーボールを頭の上に乗せたド^ラリーー^ヨ。

「ガウツ、ガウウツ！」

ド^ラリーコフも、仲間にしか通じないガウガウ語で二人をなだめた。

「そーだぜ、今はケンカしてる場合じゃねーぞ。ド^ラえもんにコレを届けてやらなきゃ いけないんだからな…………。」

そう言つて、ド^ラ・ザ・キッドが彼の四次元ハットから取り出したのは、彼らド^ラえもんズの友情の証、『親友テレカ』だった。ド^ラえもんを含め7人が、一人一枚ずつ持つてゐるのだが…………。

「『ドーラ』もんたら忘れんぼだね～、こんな大事なもの、『ドーラ』がやんのところへ忘れてくんなて。あはははは！」

「『ドーラリー』も人のことは言えんと思うつがな。」

大笑いする『ドーラリー』に、『ドーラメット』がやんわりとつづけんだ。

「さあ、それより早く、タイムマシンに乗るぞ！」

キッドはタイムマシンを取り出し、みんなに乗るよつに促した。王ドラが、不安そうにそれを見る。

「大丈夫ですか？この人数で乗つて…」

「大丈夫大丈夫　さあ、早く乗ろうよ…」

『ドーラリー』が楽観的に言い、結局全員が何とか乗り込むことができた。

「う～ん、やっぱ思つたよりきついかな？…まあ、いいや、のび太んちへ向けて、発進！－！」

といひながら。

「うおつ！な、何だ！？」

マタドーラが驚きの声を上げる。虹色の光が、それぞれの身体から放たれ始めたのだ。

いや、正確に言つと、それぞれの四次元ポケットや、四次元ハット、四次元袖、四次元マフラーから……。

「な、なんですかあ、これは！？」

さすがの王ドラも金切り声を発する。キッドが慌てた声で叫んだ。

「や、やばい！タイムマシンが勝手に……！」

パシュンッ！

虹色の輝きに包まれながら、大騒ぎをするネコ型ロボットたちを乗せたまま、タイムマシンは消えた。キッドの制御を離れ、どこか、遠いところへ。

ドラえもんズの不滅の友情の助けを、求めている者との近く……
…。

1・タイムマシン暴走！（後書き）

ドラえもんズとカスカベ防衛隊のあのキャラがタッグを組みますが……私の他の小説を知ってる人は、ある程度誰か予想はついてると思います。頑張って書いていくので、間違いとかあつたらどんどん言つてください！ドラえもんズの方は未熟（？）なので……。

2・親友テレカの異変

「な……何ですか、こには一体……？」

王ドリは、周りに広がる光景に睡然としていた。

周囲は一面に夜の闇ばかり。はるか下方に、無数の小さな明かりが見える。

ドラえもんズを乗せたキッドのタイムマシンは、どうにうわけか空中で立ち往生していた。

「ねーねー、あのこっぽいある光はなんなの？」

「ふむ……どうやらあそこに、大きな街があるようであるな。」

ドラリーーーの質問に、ドラメットが答えていた。エル・マタドーラが文句を言い始めた。

「つーかよ、何でこんなとこにタイムマシンがあるんだ? のび太んちは?」

「知りませんよーでもこつまでもこんな状態でいるわけにはこきませんし……」

「だーいじょうぶだよ、キッドを起こして操縦してもらつたらいいんだ。これはキッドのタイムマシンなんだから。」

「おー、そうか。ドラリーーの言つ通りであーるな……ドラーーー、起こすであーる。」

「ガウツ。」

頭でも打つたのか、キッドは操縦席でのびていた。ドラリーーの声が一つうなずき、キッドを起こしにかかる。

「ガウー、ガウーッ!」

「うーん……何だ? ドラリーー、こには……」

ドラリーーの声で目を覚ましたキッドは、こにはビーだ? 的な顔で辺りを見回した。まだ頭が完全に回り始めていない様子だ。そんなキッドを眺めながら、マタドーラがふと思い出したように言った。

「あれ？」こいつ確か……

高所恐怖症じゃなかつたっけ？』

全員がハツとした時には、もう手遅れだつた。キッドはもう、まるか下の世界に目を向けてしまつてゐた。

その途端……。

「た、高い所、怖い！」

叫んだかと思つと、キッドは恐怖に駆られた勢いで、目の前の操縦席にしがみついた。

その拍子に、どこかのボタンを押してしまつたらしい。タイムマシンはバランスを失い、ぐらつと揺れたかと思つと……。

落下し始めた。

「ギヤーッ！何してんだキッドオー！」
「！」これはまずいです！何とかしないと、僕たちみんなペッシュんじですう――

「ワオー！」

何とかタケ「プターを出そうと頑張る王ジラとマタドーラ」だつたが、急速に下降していく中でやんないと成し遂げるのは至難の業だつた。

「あはは、楽しいね～！」

全く危機感のないドラリー＝ニアは、楽しそうに笑い声を上げている。「まったく仕方ないでーるな、ドラリー＝ニアは……マハラージヤ！ 魔法の絨毯じゆうたん特大サイズであーる……！」

ドラメットがどこからともなく、いつも使つのよつさうに巨大な絨毯を取り出した。みんながその上に、つまごりと着地する。

「おうひ、でかしたぜ、ドラメット！」

マタドーラが嬉しそうに叫び、彼に抱えられたキッドは、情けない声で叫んでいた。

「は、早く下ろしてくれ～！」

「もー、キッドたら本当に高い所が苦手なんだね～。」

「ドラリー＝ニアは本当に物忘れが激しいですね……」

まだ笑っているドラリー＝ニアに対して、王ジラは呆れ声で言つてやつた。

「いや～、『めん』めん。でもみんなだつて忘れてたんじゃない？」
それには誰も言い返せなかつた。

「キッド、安心するでーるよ。もう地面に着くであーる。」

みんなの氣まずい雰囲気を払うかのように、ドラメットが大声で言つた。キッドが一気に生氣を取り戻す。

「マジか？ やつた！…………はつ、俺のタイムマシンは？」

「それも大丈夫である。ちゃんと乗せておいたであーる。」

「おおひ、そうか…ふう、よかつたよかつた。」

言いながら、キッドはタイムマシンを四次元ハットにしまつた。それと同時に、空飛ぶ絨毯が地面の上に到着した。

「みんな、下りるであーる。」

「よっしゃ～！」

真っ先にキッドが飛び降り、それにマタドーラが続く。やがて全員が地面に降り立つて、ドラメットは巨大絨毯をしました。

「こしてもこには、一体どこなんでしょうかねえ……」

「22世紀じゃないな。そんなにビルが建つていない。」

王ドーラたちは、見知らぬ街の夜の路地で立ち尽くしていた。

「どいでもいいさ。もつかいタイムマシンを使おうぜ。」

マタドーラが面倒くさそうに言つて、キッドにタイムマシンを出すよつ促す。

「あー、ダメだ……俺シエスタしたくなってきた……」

「いつ、いけませんよ、こんな所でお昼寝なんて！」

「あれー？」

キッドが突然驚きの声を上げたので、みんなそちらの方に顔を向けた。

「どうしたんですか？ キッド。」

「ほり、見ろよ。

親友テレカが……」

タイムマシンを探して四次元ハットを『そじやつていたキッドが中から取り出したのは、一枚の親友テレカだった。一枚はキッド、もう一枚はドラえもんのものだ。

それらが淡い、虹色の光を放つていていたのだ。

「親友テレカがこんな光り方するの、見たことないよな？」

「確かに…あつ！ 私のも同じですよーーー！」

「俺もだ！」

「僕も！」

「我が輩のもであーるー。」

「ガウガウッ！」

それぞれの出した親友テレカも、同じような光り方をしていた。輝きはおさまることなく、といつてそれ以上強くなることもなかつた。今までこんなことはなかつたはずだ。

「そういえば、タイムマシンがここに来る前の虹色の光。あれは、親友テレカのものだつたのですねー。」

王ドラが納得したような表情で言つたが、マタドーラは不満そうに文句をこぼした。

「じゃあ親友テレカが、俺たちをここにつれてきたとでも言つのか？何のためだよ？」

「それは分からないな。」

キッドが親友テレカの絵を、調べながら言つた。

「でもどうやら俺たちが、ここに何かの力で呼び寄せられたってことは確からしい……」

ドゴオオオン！

突如としてすぐそばの轟音が、キッドの声を押しつぶした。

「！？」

仰天する一同の前に、何かが落ちる。ぼろぞうきんのようなものが……。

「なつ、何だ！？」

マタドーラが叫んだ瞬間だつた。

ぼうぶつさんがあくつと起き上がったかと思つて、キジたちが
けて鳴き声をあげた。

「アンジー。」

2・親友テレカの異変（後書き）

ぼろぞうきん（？）の正体、分かりますか？次回はいよいよあのキヤラの登場ですが……ちょっと、大変なことになつていています。お楽しみに！ 感想、何でもいいんでお願いします！！

3・美少女出現！？（前書き）

思つたほど書けなかつた…………でも楽しんで読んでくれたら嬉しいですっ！

3・美少女出現！？

ぼろぞうきんだと思い込んでいたものが、突如起き上がりて鳴き声をあげたので、王ドラたちはびっくりして飛び上がった。

「うわっ！これ、犬ですよ、犬！！」

「本当だ…でも、ずいぶん汚れたワンちゃんだね～。」

ドラリー一郎の言つ通り、その犬の外見は哀れなほどみすぼらしかった。身体は小さく、全身の毛が灰色っぽく汚れており、毛並みもひどいことになっている。多分元は白い毛だったのだらう。ぼろぞうきんに見えたのも、そのせいだ。

犬は見慣れない物体に怯えたのか、こちらへ向けて吠え続けている。

「あーっ、うるせえなーっ！おい、誰か何とかしろよ！！」

犬の吠え声のせいでいつまでもシェスター（昼寝）できないマタドーラが、怒りの声を上げた。それを冷たく見やる王ドラ。

「そんなこと言つてる間に、自分が何とかしたらどうなんですか？」でも、困りましたね。このままでは誰かに聞きつけられて、見つかってしまう……。誰か『桃太郎印のきびだん』、持つてませんか？

桃太郎印のきびだん」と言つのは、それを食べさせた動物を自分になつかせることができるのである。しかし全員、首を横に振つた。

「弱りましたね、何か使えるものは……ああーっ！」

「？どうしたんだ、王ドラ？」

尋ねるキッドに、王ドラが焦つた口調で答えた。

「ぼ、僕、大切なものを落としてしまつたみたいですね。多分さつき、落とした時に……」

「た、大切なものの何だ、ぬんちやくか！？」

カンフーの達人である王ドラは、武器として普段からぬんちやくを愛用しているのだ。

「いえ、違います。最近僕が独自で改良していました」

王ドーラが、なくしたものの正体を悟つより早く、甲高い悲鳴がすぐ近くで響き渡つた。

「……これは、女の子が助けを求める声……」
愛用のひらりーマントの上に寝転んでいたマタドーラが、ぱつと起き上がつた。彼は大変な女好きなのである。

ドラリーーヨも叫んだ。

「大変だ！早く助けに行かな……」

言つなり、もう駆け出していく。ドラメットが慌てて引き止めようとした。

「あ、待つであーる、ドラリーーヨ！」

……ついで、そこで転んだったか。」

おっちょこちょいのドラリーーヨは、みんなの足元で、地面にうつぶせに転び倒れていた。

「いきなり行動するのは危険ですよ。もう少し待ちましょ。」

「何だと、王ドーラー可愛いや二ヨリータが危険な目に合つてくるかも知れないっての、見捨てるとも思つのか？」

「僕、そんなつもつ……」

「ひやつ！」

ドラえもんズが集まっていた路地に、突然倒れ込んできた人影があった。みんなが一斉に身を固め、そちらを見やる。

小さな、せいぜい幼稚園ぐらいの人影だった。はあはあと肩で息をしつつ、地面から身を起こして顔を上げる。

当然ながら、路地の中でかたまっているキッドたちの姿が目に入り、人影は凍りついたように動きを止めた。

「…………」

お互に、息づまるような沈黙が続いた。それは永遠に続くのではないかと思われるくらい、長かった。

でも一人の声が、それを打ち破った。

「ねえ君、さつき転んだけど大丈夫？僕もよく転ぶんだ、サツカーの時以外はね、えへへ。」

「！」こら、ドラリーーーー！」

ドラメットが慌てて引き止めようとしたが、ドラリーーーーはもう走り出していた。残念ながら（？）、今回は転ばなかつた。

「もしかして、さつき悲鳴上げたのって君？何かあったの？」

「えーと……」

人影が、戸惑い気味の第一声を発した。

他の面々も、ドラリーーーーに引き続いて人影のそばに駆け寄る。その途端、全員が思わず息を呑んだ。

とつても可愛い女の子だった。

黒く大きな瞳に、鼻筋の通った端整な顔立ち。黒といつより藍色に近い髪はさらさらで、肩の辺りまで伸びている。

「あ、あの……そ、そのですね……」

こうなると、王ドラはもういけない。真っ赤になり、もじもじそわそわしていることしかできなくなってしまう。可愛い女の子の前だと、極度にあがってしまうのだ。

その点マタドーラは正反対である。今もすっと少女のそばに歩み寄り、

「これはこれは、小さなセーラーリータ。お怪我はありませんか？」「これはお近づきの印だ。」

と、いつのまにやら口こくわえていたバラの花を少女に渡す。そのまま王ドラはもじもじし、キックドンドラーロフはまたかよ……という表情で見ていた。

「さつきの悲鳴も酷かい？こんな可愛いに女の子を傷つけるなんて、ひどい奴もいたものだ。」

「あの……」

「でももう大丈夫。このヒル・マタドーラ様が来たからには、あなたには指一本触れさせな……」

「ちょっと、すみません！」

突然少女が大声を張り上げた。

思わず反応に、驚いて口をつぐむマタドーラ。地面でのたぐり始めていた王ドラも、とつさに動きを止めた。

「どうしたんですか、セーラーリータ？」

「あの、すみませんけど実は……」

少女の子じやありません、僕。」

「へっ？」

「男です。信じてもらえないかも知れないけど。」

確かに全員、とても信じられなかつた。田の前にいるこの子供は、どこからどう見ても女の子としか思えない。格好は半ズボンだが、しかし……。

「まさか、そんな……………」

マタドーラが突然と呟いた、その時。

ガウッ！ガウッ！！

一
ん? と
した。
ヒト
ヒト

ツドがそれに耳を傾け、やがて奇妙な表情になる。
キ
ずつと沈黙を守っていたドランコフが、突然何やら訴え始めた。

「うう、うん、うう」

いや、それがどうやら、アーニングのせいがある。

オトコンカといつのは、男を女らしく、女を男らしくするとこり、何だか危ない薬だ。ただし、実際に男を女に変えたりするわけではない。

「オトコンナあ？ でもそれはただ単に…………」

王ドラが絶叫したのはその時だつた。

3・美少女出現！？（後書き）

美少女の正体、しつこいですけどもう分かりますよね？次回から話が本格的に進んでいく予定です！お楽しみに！

4・王ドラの大失態（前書き）

美少女とほらわいわきん（ー）の正体がやつと明らかにーじらしてす
みませんでした（汗）。ではどうぞ、お楽しみくださいー！

4・王ジラの大失態

「本当に、申し訳ありませんでした…」
王ジラがいかにも面白いといった表情で、例の少女に頭を下げて
いる。
いや、正確に言えば、少女ではない。

少年である。

「またたくだぜ、王ジラー何でまたそんなことつぶつとしたんだ?

オトコンナを、心じゃなく身体を実際に変えてしまつ薬にしてしまつ
なんて…」

マタドーラが呆れ切つた口調で言った。

「しかもこの子の頭の上に落としちまつなんてよ…………やつこいつも
んは、ちゃんと簡単に出てこない所に入れておくべきだぜ。」

普段はすぐに対し王ジラに対する返す王ジラも、この時ばかり
は声が出ないようだつた。

「マタドーラの言つ通りだ。一体どうしてそんなものを作ろうと?」
「いえ、苦手な女の子を見た目だけでも男の子にしたり、少しあは
張しないで済むかと……」

「はあ? ……つたくお前、本当に女のはダメなんだな。」

キッズもやはり呆れています。

「ねえそれより、この子を元に戻してあげなきや。」

ドーリー二郎が、珍しく(?)的を射た意見を述べた。といふが王
ジラは、消え入りそうな感じで答えた。

「それが…まだ研究段階だから、元に戻す薬が……できなくて…

…

「ええー！？」

全員の叫び声がこだました。

「どーすんだよー。じゃあこの子は一生このままなのかー？」「いくらなんでも可哀そうであーる。」

「あつ、大変ーこの子泣いちゃうよ…」「

ドラリーーの言つ通り、少女ならぬ少年は、目に光るものを見たて王ドラを見つめている。今にも一斉にあふれ出してきそうな雰囲気だ。

王ドラが、慌てて大声を出した。

「だつ、大丈夫ですよ！解除薬ももうすぐできあがりますから。少し時間をくれれば……」

「もう少しつて…どれぐらいですか？」

少年が、半泣き寸前の少女の声で尋ねた。

「そ、そうですね。ざつと見積もつて一週間ほど……」

「何い！？そんなに待てるか、バカ！」

「バカって何ですか、バカって！…でもとにかく、こんな所じや解除薬を作ることはできませんね。どこか、ゆっくり腰を据えて研究ができるような所はありませんか？そしたら私、大至急で完成させますから。」

しかし、王ドラに返ってきた答えは、意外なものだった。少年は顔を曇らせ、低い声でいつの間にかだ。

「ないと…思います。ここにはもう、安全な所なんて。」「

「えつー？」

ネコ型ロボット6体は、一斉に少年の方を見た。

「何だつて？…そもそも、ここは一体どこなんだ？」

キッドが尋ねた。色々あって、大切なことを聞くのを忘れてしまつていたことに気づいたのだ。

「春日部です。埼玉県の春日部市。」

「そ、そうか、日本らしいな……で、今はいつだ?」

「は?」

「いいから答えてくれ。今は西暦何年だ?」

「2008年…です。」

何言つてんだこいつ、というよつた顔をしつつも、少年はちゃんと答えてくれた。キッドたちは、はつと顔を見合わせた。

「2008年といつたら…21世紀…ドラえもんとのび太のいる時代だ!!」

「偶然ですね。同じ国、同じ時代に飛ばされてしまふなんて。」

「でも何で春日部なんてここに来ちましたんだ?それにお前、ここが安全じゃないみたいなこと言つてたよな?そういうばさつきから嫌に周りが静かだが、ここ、何かあつたのか?」

「それが…」

少年が言いかけた時だった。

「キャンキャン!」

すぐ近くで犬の鳴き声がして、キッドたちは飛び上がった。見れば、いつの間にかぼろぞうきん…ならぬ犬が近くに来ていて、今度はどこか嬉しそうな様子で、少年に向かつてほえていたのだ。

少年は束の間目を見開いたが、犬の姿を認めるとな、ぱつと喜びの表情に変わった。

「シロ!」

「シロ?」

飛びついてくる犬をだつこする少年を眺めながら、マタドーラが首をかしげる。

「あなたの犬なんですか?」

「いいえ、違います。」

王ドラーの問いに、少年は首を振った。

「僕の友達の犬なんですが…」

と、ここまで言つたところでまた、少年の顔が暗くなってしまった。

どうやら、本当に深刻な事情があるようだ。

キッドは思い切って言つてみた。

「なあ、一体何があつたのか、言つてみてくれないか？俺たちなら、もしかしたら力になれるかも知れない。」

「え？」

少年は、とても驚いたような顔でキッドたちを見つめた。

「でも…そもそもあなたたち、何者なんですか？」

「それはまたあとで話すよ。結構ややこしい話だから。あ、そうだ、自己紹介だけでもしておこうか。俺はドラ・ザ・キッド。」

「私は王ドラといいます。」

「俺はエル・マタドーラだ。よひじくつ…」

「僕はドラリー二郎だよ…」

「我が輩はドラメット三世であーる。」

「ガウッ、ガウッ。」

「あ、こいつはドラー二郎。ガウガウしかしゃべれないんだ。」

「は、はあ…」

面食らつていた様子の少年だったが、気を取り直して背筋を正し、シロを抱いたまま、言つた。

「はじめまして。僕は風間トオルといいます。」

4・王ドラの大失態（後書き）

あらかじめ警告しておきたいと思いますが、次回は少し怖い話になると思います。ホラー系が苦手な人はお気をつけください。感想もお願いします！！

5・春日部の異変（前書き）

警告・今回はかなりホラーテイストな話です。怖いのが苦手な人は
ご注意を…。

5・春日部の異変

「この事件が始まったのは……そう……一ヶ月ぐらい前でした。」

風間トオルは、何か思い出す田つきをしながら言つた。シロは王ドラが出した道具のおかげですっかりきれいになり、白い犬に戻つてトオルのそばにうずくまっている。

「まず、僕の友達が死んだことから始まつたんです。」

「死んだ？」

キッドが思わず聞き返した。

「何ていう子だ？」

「桜田ネネという子でした。」

「僕はネネちゃんと、あと3人の友達と一緒に、カスカベ防衛隊というグループを組んでいました。」

「僕らのドラえもんズみたいなやつだねーーー！」

ドラリーーーーが口を挟む。

「五人ですっと、仲良くやつてたんですけど……ある日、ネネちゃんと僕たちが、大げんかをしてしまったんです。」

もともとネネは、気が強く自分勝手なところのある女の子で、『リアルおままごと』という何とも嫌な感じのおままごとにトオルたちは何度も強制的に参加させられたのだという。

「それで何と言うか、僕らも堪忍袋の緒が切れちゃって。ある田ネネちゃんに、もつやめてほしいうてみんなで言つてやつたんです。」

「へーえ、わがままなセニヨーリータに、びしつと言つてやつたわけだ。」

にやりとするマタドーラ。でも王ドラは首をかしげて言つた。

「でも、何か言い返されなかつたんですか？」

「そりゃあされましたよ。僕らも口じゃネネちゃんに勝てないことはよく分かつてたから……だから言つてやつたんです。それならもうネネちゃんは、カスカベ防衛隊から追放だつて……」

それを聞いた瞬間、ネネの顔からさつと表情が消えてしまった。

「何も言わなくなつちゃいましてね。言い過ぎたかなと思つたんですけど……ここで弱みを見せちゃダメだつて考えて、そのままネネちゃんを置いて、家に帰つたんです。……そして翌日から、ネネちゃんは幼稚園に来なくなりました。」

初めはただ単に、すねて登園してこないだけだと思つていた。前にも同じように不登園になつたことがあつたのだという。
でもネネは、本当に病氣で寝込んでしまつっていたのだ。

「いや、病氣つて言つていいのかな？僕らから絶交された次の日から、だるくて起きられなくなつたつて言われて。」

熱があるわけでもなく、どこか痛いわけでもないのに、徐々に衰弱していく。食事もあまり喉を通らず、やつれしていく一方だと噂だつた。

「お見舞いに行こうと……何度も思つたんですけどね……どうも

思い切れなくて。」

トオルがつらそうに目を伏せた。

「みんなも同じでした。それに大したことないってずっとと思い込んでましたから… ネネちゃんが死んだって聞いた時には、信じられませんでした。ネネちゃんのママが朝になつて見に行つたら、眠つたままみたいな感じで息絶えていたそうです。」

当然、お葬式には行くことにした。そしてネネに、みんなでちゃんと謝ろうと決めたのだそうだ。

「棺^{ひつぎ}にお花を入れる時、久しぶりにネネちゃんの顔を見たんですけどね…」

目を閉じたネネの顔はまるで眠っているかのように静かだったが、青白く、やつれきつて、今まで一緒に遊んでいたネネとは別人のようだつた。「その時は本当に後悔しました。で、みんなでお花を入れながら、謝ろうとしたんです。」

その時突然、カスカベ防衛隊の一人・マサオが大声で悲鳴をあげて倒れ、気を失つてしまい、大騒ぎになつた。マサオは救急車で運ばれ、まもなく意識を取り戻したが、それから妙なことを口にするようになつたという。

「見舞いに行つた僕らにね、こつ行つたんですよ。

『お花をあげよひしたら、ネネちゃんが目を開いて僕をこちらで
きた』って。

「ひつ！」

ドラリー！ が変な声を上げて、耳をふさげました。他の人々は、
何も言わなかった。

「もちろん僕らは信じなくて、見間違えたんだひつて言ひ聞かせ
たんですが……」

トオルの顔が、ますます暗くなつていぐ。

「マサオくんもそのひつ……ネネちゃんと回りまわになつてきたんで
す。」

「えつ！？」

「どんどん食欲がなくなつていつて、やつれてこつて。そしたらそ
れまで悪夢とかにうなされたのに、逆にそういうのがすっかりな
くなつちやこましつね。すゞく穏やかで……落ち着いた感じになつて
きて……でも眠ることはなくて。」

トオルの声は、今や聞き取れないほど小さくなつっていた。

「マサオくんが息絶える直前に…」

「な……その子も死んだのか…?」

キッドが驚愕の声で聞き返した。トオルがうなずく。

「…マサオくんは」いつ言いいました。『ネネちゃんが迎えに来てくれた』つて。」

「……」

沈黙。ドラリーー! はとうて、ドラメットの後ろへ避難していた。

「…んなバカな。そんなホラー映画みたいなことが、あつてたまるかよ。」

マタドーラが、わざとからかうような調子で言った。しかし…。

「ええ、僕らもそう思いましたよ。いや、自分にやつ言い聞かせました。これはただの偶然だつて……でもね。」

トオルは深く、息を吸った。

「マサオくんだけじゃ……終わらなかつたんです。」

「…?」

春日部中の人々が、ネネやマサオと同じようにして死んでいったのだという。短期間で、次々と。治療法もないし、原因も分からぬ。

それを治すはずの医者までその病に冒されていき、いくらお墓を作つても追いつけない事態になってしまった。

犠牲になつたのは、トオルの身近な人々も例外ではなかつた。幼稚園の先生、生徒、塾の友達、そして最後には母親も。

そして、ついに…。

「僕と、カスカベ防衛隊の最後のメンバー・しんのすけ、そしてその家族しか、僕の周辺にはいなくなつてしまひました。」

トオルの周りは、それこそ本当に死の町になつてしまつた。葬儀屋も開いていないので、母親のお葬式も出せない。仕方なく、緊急に作られた公共墓地に、しんのすけとその家族の手を借りて埋葬した。

「しんのすけとやらの家族は、全員無事だつたのか?変だな。」

「でしょ?僕も不思議でしたよ。でもママが死んでからは、あの人たちが家に住ませてくれました。」

幼稚園に行く必要も、買い物に行く必要もなくなり、することといえばテレビやゲームぐらいなもの。テレビも春日部チャンネルは、映らなくなつてしまつていた。

そんなわけで、トオルとしんのすけ一家だけの毎日が過ぎていつた。

しかし。

「ほんの一昨日のことですが…。」

「はあ……。」

トオルは真新しい墓石の前で、ため息をついていた。

「こんなことになっちゃうなんて……思いもしなかったなあ……」

「こんなど、といつのは……。」

もちろん、ネネから始まつた、春日部中で相次ぐ人々の死亡のことである。

トオルは今、佐藤マサオの墓にたむけられた花を、新しく替えて来ているところだつた。

マサオだけではない。ネネや、ボーちゃんや、先生たちはもちろん、よく知らない人たちの分まで替えてやつている。春日部の『生き残り』としては、そうせねばならないような気になつてしまつのだつた。

「マサオくん……春日部防衛隊も、もう僕としんのすけだけになっち

やつた。ボーちゃんもついこないだ、そっちに行ってしまったよ。」「

ボーちゃんが死んだのは、ほんの一週間ほど前のことだった。野原家で、しんのすけたちと一緒に、最後まで看取ったのだ。

「変だよね……ボーちゃんには悪いけど、涙も出てこなかつた……あんまり身近な人がいなくなり過ぎて……僕……もつ……。」

「風間くん！」

突然呼びかける声に驚いて振り向くと、しんのすけたち野原一家全員が、シロを引き連れてこっちへ近づいてきていた。今春田部中に死が蔓延していることなど嘘ではないかと思えるほど、彼らはいつも通りで元気に見えた。

「マサオくんとお話してたの？」

しんのすけが、トオルの隣に立つて墓石を見つめる。

「うん……」

「でもするよね、みんな。」

「え？」

「オラたち残して先に行っちゃうなんて。ひどいゾ、置いてくなんて。オラたちの気持ちも知らないで。」

「 shinちゃん…」

しんのすけの母・みさえが優しく息子の頭に手を置いた。しんのすけが心の奥に秘めている苦痛を、理解してやっているのだろう。

「一人じゃ花を替えるのも大変だ。俺たちも手伝つよ。」

しんのすけの父のひろしが、袋に入れておいた花の半分ほどを取り上げた。

「え、でも…。」

「いいのいいの。ね、ひまちゃん。」

「たやーー！」

ひまわりの元気な声が、みさえの呼びかけに応じた。

「それじゃ、お墓の出入口の所で集合な。早く終わるよ！」、「みんなばらばらな所からやろう。」

「じゃ、オラあっちから！」

早速走っていくしんのすけ。野原家の他のメンバーも、あちこちからへといなくなつた。

「…ほんとすげいな、しんのすけたちは。」

トオルは再び、独り言をもらしていた。マサオの墓石に向かって。「「ごく普通だけど…めちゃくちゃで、おバカで、でも強くて優しい…あんな一家、なかなかいないだろうね、マサオくん。何だからだ言つて、僕もお世話になつやつてるし。」

そこまで言つと、おもむろに立ち上がり頭を振る。

「よいしょ…」「めんねマサオくん、ずっとここにいるわけにもいかないや。他の人の分もやらなくちゃいけないから。じゃあな。花を手に歩み去ろうとして、トオルは突然何かに足を何かに引っかけられ、まともに転んでしまつた。

「あいたたた…。」

見られなくてよかつたと思いながら、身体を起す。

地面から生えた手が、足首をつかんでいた。

「…………！？」
とつたには、目の前の光景が理解できなかつた。
そして……。

「へへへ……」

「うめき声が、した。

地面から。

嘘……嘘だよね？

墓石の前の土を割つて、何かが地上へと這い上がってきた。うめき声をあげて、その白い手で、しつかりとトオルの足首をつかんだまま……。

それでもまだ、トオルの口から声は出でこなかつた。

地面から出でたものが、顔を上げて、トオルを真正面から見つめた。

「マ……サオ……くん……」

「やく声を発する」ことができたのと同時に、たった今地面の下から出現したマサオが、かすれた声で、しゃべった。

「か……風間……くん……」

足首を握る手に、力がこもる。

「僕たちの……仲間……にしてあげ……る……」

その時よしやく、ビビンが迷子になっていた理性が、頭の中に帰つてきた。

「うわああああああああーーー！」

悲鳴をあげると同時に、トオルは見た。

墓場の土の中から、次々と現れるものを……。

「…で、それからずっと逃げどおしだったのか？今まで。

キッドが目を見開いたまま、尋ねた。

「はい…勝手に人の家にお邪魔して、そこで隠れたり眠ったり食べ物を手に入れたり……」

「その間も、生き返ってきた死者とやらが追いかけてくるっていうのか？」

「はい。」

「信じられぬーな。」

「こっちだって信じたくないですよ。でも、これが現実なんです。その時、シロがクンクンと鼻を鳴らした。トオルの意見に賛同の意を示すかのように。それを見て、王ドラがふと思い出したように言った。

「そういえば…シロって、君がお世話になつていた野原さんたちの犬ですよね？その人たちはどうしたんですか？」

「それが、分からんのです。あのお墓から逃げ出するので手いっぱいで、それからしんのすけたちには会つてなくて……捕まつたと思つてたんですけど、シロがいるということは……」

「もしかしたらそいつらも、まだ無事かも知れないぜー。」

マタドーラが元氣づけるような口調で言つた。

「マタドーラー！もつと声を低く！…」

「あっ、悪い…」

「でも…うかつに動けば捕まりますよ。」

トオルは不安そうな表情を崩していない。キッドはその肩を叩きながら言つてやつた。

「大丈夫さ、オレたちがついてるから。世話になつた人たちなんだろ？希望を持とうぜ！…」

「そうだよ、早く捜しに行こ！…」

ドラリー一ヨが無邪気な声で、みんなを促した。

「…その必要はないわよ。」

「え？」

路地の入り口の方を振り返った一同の田中、そこに立ついくつかの
人影が見えた。

そのうちの一つを田中にした時、トオルの顔がこわばった。

『死神』

5・春日部の異変（後書き）

春日部を襲つた死…。そして、甦る死者たち…！突然一行の前に現れた風間くんのママの目的は？しんのすけたちは無事なのか！？どうぞ次回をお楽しみに！感想も待っています！！

6・母親たちの襲撃（前書き）

風間くんとドラえもんズに現れた、風間くんの母親……彼女の目的は、そして野原一家は今いすゞーへびいわむ楽しみトかー！

6・母親たちの襲撃

「何だお前らは！」

路地の入り口に立ちはだかる者たちへ向けて、キッドが威勢よく大声を張り上げた。腕には既に、愛用の空気砲をつけている。これをつけて『ドカーン！』と叫べば、強力な空気弾を発射できるのだ。彼の腕前は、世界一と称されるほどのものだった。

「何だとは失礼ね。そっちこそ何なのよ、このタヌキ！」

人影たちのうちの一人が、尖った声をあげた。

「タ、タヌキだと！？言つてくれたな、このおばさん！」
怒ったキッドが、空気砲を撃とうとする。ところが……。

「ダメですっ！」
「ぐわっ！！」

トオルに突き飛ばされ、止められた。

「な、何で邪魔すんだよ！」

「だつて、あの人たちは……」

僕とネネちゃんとマサオくんの、ママなんですよー。」「なにーつー？」

ドラえもんズの驚愕の叫び声が響き渡った。

「マジかよー!? でもお前の母ちゃんって死んだんじゃ……」

「死者が甦ってくるというのは、本当だったのですね……」

マタドーラと王ドラが、それでも信じられないといつ顔つきで母親たちを見る。

「…でもの人たち、別に普通だね。」「

ドラリー二郎が、ドラマットの後ろからひょっとだけ顔を覗かせたまま、言った。

「ふむ…確かに、あまりゾンビじくはないでーるな。」「

ドラマットが腕を組みながら言つ。ところがその言葉が、三人の女性のうちの一人をひどく怒らせてしまつたらしかつた。

「ゾンビですつて? 私たちはゾンビなんかじゃないわよ!」

茶髪のその女性は、そう言いながら前に進み出ると、いきなり右手を前に突き出した。

「何だ? 何する気だ?」「

マタドーラが、大して気にするふうでもなく見守っていたが…。

「……つわーー何だこれ！？」

ものすごい圧力が迫つてくるのを感じ、キッドたちは思わずあとずさった。シロがとつとこ、トオルのふといろくと飛び込む。（目に見えない…衝撃波みたいなもんか？あつ、こんなもの、オレの空気砲で……）

キッドは空気砲を構えた。目に見えない相手を撃つのは初めてだったが、自信はたっぷりあった。

「ドカーン！」

今度は誰にも邪魔されず、キッドの空気砲から弾が思い切り発射された。

「バゴオオオ！」

「うわあー！」

「一つの力がぶつかり合つた衝撃で生まれた風に髪をなぶられ、トオルは思わず叫び声を上げた。シロが服の中で、震えているのが分かる。

「よーし、相殺したか…」

キッドが満足げに言って、空気砲を下ろす。衝撃波を放つた女性は、驚きの表情を浮かべて後ずさりした。

「あんた…今、何したの？」

「ネネちゃんのおばさんこそ、何をしたんですか？」

トオルが口を挟んできた。みんなが一斉にそちらを見る。「何つ？ トオル、このおばさんがネネちゃんとやらの母むちゃんなのか！？」

「はい…」

「別に大したことじやないわよ、トオルちゃん。」

最初に話しかけてきた女性が、トオルにそう言つた。

「…………ママ、僕がトオルだつて…………！」

今のトオルは王ドラのミスのせいでの子化しているのだ。それなのに、なぜ自分が分かつたのだ？

しかし、キッドとマタデーラは別のことに驚いていた。

「トオルちゃんって…」

「「」こつやつぱ、女の子なんじやないの？」

「ち…違こますよーそーこうじじやなくて…」

「で、あなた方は一体どうなつてしまつたのですか。」

王ドリフが、脱線しかけた話を引き戻してやつた。

「お子さんから話は大体聞きましたが…わつきの攻撃といい、あなたたちは一体何者なんですか？」

「そうね…」

トオルの母親が答える。

「簡単に言えば……

吸血鬼つてやつよ。」

「吸血鬼！？」

ドラえもんズと、トオルの声が揃つた。

「嘘でしょ？そんなもの、いるわけないじゃないか、ママー…」

「でも、いたのよ。実際私がなつてしまつたんだもの。」

トオルはショックのあまり、すぐには言葉の出ない様子だった。

「それはやうとおせ、野原さんとやらを捜す必要はない」と言つて、
たであるな。『うこう』とであるか?」

ドリメットが尋ねると、ネネの母親が笑つて上空を指差した。みんな
が空を見上げると……。

「あつ！」

トオルが思わず声をあげた。空中に浮いた球状の檻の中に、何人か
の人間が閉じ込められている――

「風間くーん！」

しんのすけたちだった。

「つこしき捕まえたのよ。まつたくて」ぱりぱりぱりったわ。」

ネネのママが、相変わらず笑つたままで言つた。マサオのママが、そ
れに重ねるように言つた。

「風間くん、あなたが今おとなしく捕まつてくれなかつたら、
野原さんたちが、どうなるか分からなによ。」

「そんなん……！」

トオルは顔面蒼白だつた。

「風間くん、助けてー！ネネちゃんのママが、オラのことをじめ
にするつて……」

「するかー！」

ネネのママが、怒つた声でしんのすけに言つ返した。

「……なんか個性的な奴らしいが、助けてやらなきゃいかんようだな
……よし……」

キッドが空氣砲を、檻に向つけようとした。壊して出してやるつとこ

うのだ。

といひが。

ガゴッ！

鈍い音と共に、第一の衝撃波が吹きつけてきて、キッドの手から空氣砲を吹っ飛ばした。

「な、何つ！？」

キッドがあせつた声を上げる。空氣砲は衝撃波によつて壁に叩きつけられ、粉々になつてしまつた。

「オ、オレの空氣砲が…！」慌てるキッドは、ネネのママがバカにしたように言つた。

「ふん、よそ見なんかしてるからよ。とにかく、これで邪魔なもの

はなくなったわね…………あんたたひが何だか知りなこば、春田部
とは関係ない奴みたいだから……

くたばつてもひうせん。ー。ー。ー。

「待つて！」

再び衝撃波を放とつとするネネのママ、トオルのママが手を伸び
して止めた。

「今撃つたら、トオルちゃんがひきかえられてしまう。ー。ー。

「あ……めこと……」

ネネのママが、決まり悪げに手を引っこむ。トオルのママが向き
直った。

「あ、べつもの、トオルちゃん? 私たひの仲間で、なつたくな
なべくなつたわね。ー。ー。ー。

「仲間……？」

その時トオルは思ひ出しだした。墓場の中から這いついてきた、マ
サオが言つた言葉を。

『仲間…………』

「何だそりゃ、この子に吸血鬼になれて書つてんのか！？」
つて？」「

マタドーラが嘘だらといつよつな口調で尋ねる。

「簡単よ。同じ吸血鬼に血を吸わせるだけ。しばらくの間仮死状態
になるけど、田覚めたら立派な吸血鬼になってるわ。」

「…お気軽に言つね、おばさん。」

キッドが呆れた様子を隠さずともせず、「…」と言つた。

「さあ、トオルちゃん？」

「えー、僕やだー。噛まれるのって痛いし、吸血鬼になつたら血に
サツカーできないもーん。」

「吸血鬼だつて、氣をつければ毎晩でも活動できるわよ。」

…つて、あんたに言つてないしつ…」

ネネママが、ドリーネードにシックロードを入れた……。

「そもそも我々はロボットだから、血などないであーるよ。」

と、今度はドラメットが言つた。

「あ、そーか。あはははは…」

「…ロボット？」

トオルが呟いて、首をかしげた。

「トオルちゃん…どーするの…！」

母親の口調が、少しいライラク気味になってきた、その時。

「アチヨーツ！」

王ドラが、四次元袖から出したぬんちやくを投げつけた。トオルの母親たち曰がけて。

思わぬ攻撃に、彼女らもとつて顔をかばって後ずさりする。

「今です！ ドラメット！ ！」

「？ …… お、 おお、 そつか！ ！」

何かを察したドラメットが、空中に空飛ぶ絨毯を出現させた。先程出した、巨大バージョンである。

「みんな、乗るであーる！ 」

「さ、早く！ 」

「は、はあ …… ためらいつつも、トオルは絨毯に右足をかけた。次に、左足。う、浮いてるっ！

「全員乗ったな …… よし、上がれ！ 」

ドラメットのかけ声を合図に、絨毯が急上昇した。

「いけない！ 」

トオルの母親が叫ぶ。彼らの目的に気づいたからだ。

だが、もう遅かった。

「アチヨー！」

今度は、野原一家の閉じ込められた檻の鍵に向けて、エドリがぬんちゅくを投げる。

ガチャン！

呆気なく、鍵が崩壊して扉が開いた。

「わーい！空飛ぶじゅーたんだあ！！！」

「な、なんかよく分からぬいけど、助かつたわーー！」

「たやい！」

「よし、乗るぞ！」

こうじう時、あまり深く考えない野原一家は、たちまちのうちに絨毯の上に納まつた。

「それでは…ドッカーンー進めーーー！」

「ま、待ちなさーーー！」

叫ぶ声がしたが、当然誰も待つはずがなく…………。

絨毯は、危機を置いてけぼりにして、猛スピードの空の旅へと出発していたのだった。

6・母親たちの襲撃（後書き）

何とか逃げ出した、ドラえもんズとしんのすけたち。しかしぬくはさらなる危機が到来するかも！？そして王ドラの大活躍が見られる可能性も……！『うご期待！－』
感想もお願
いします！－

7・見参-王ニア式（前書き）

王ニアが…えらこじとにへ、実際の内容は」の後すぐ…

7・見参！王ドラ武

ドラメットの絨毯が空を滑るように飛び始めてから一〇分ほど経つた時には、しんのすけたちもトオルも、キッドたちの話に呆然としていた。

「それじゃ…あなたたちは22世紀に作られた、ネコ型ロボットだつていうのね？」

「22世紀には、こんなに表情豊かなロボットが作れるようになるんですね。」

トオルが王ドラたちを見回しながら、感心した声で言った。

「そうや。オレたちはみんな、心を持つロボットなんだ。22世紀じゃ、ほとんどの家庭でオレたちみたいなお世話ロボットが普及していく、人間たちと変わらずに笑ったり、怒ったり、悲しんだりすることが可能なんだ。」

得意そうに言うキッドに、21世紀に生きる面々はもはや返す言葉が見つかなくなってしまった。

「この絨毯も、本当は魔法ではなくて高度な科学技術により作られたものであるよ。我が輩たちの使う道具も、皆そつやつて発明されたものばかりである。」

「タイムマシンもあるの？」

しんのすけが、何を考えているのか目をきらきらせながら尋ねた。

「あるが…何で分かつた？」

「だって22世紀の人が21世紀に来る方法つていたら、タイムマシンしかないもん！」

「お前、案外賢いなあ。」

マタドーラが驚きを隠さず、言つた。

「ムツ！案外は余計だゾ！」

「へへへ。」

「ところで王ドリカさん。」

トオルが王ドーラの方を向いて言った。いきなり田を畠わせてしまつた王ドーラは、慌てて視線をそらした。顔が赤くなつてゐる。

「さつきはひとつも、ありがとう」せいました。」

「え？……い、いや、何でもありますよ！――トオルくんは私のせいで、こんなことになつてしまつたのだし……」

「おおおい王ドーラ、そんなに真つ赤にならないだひ。中身は男の子だぜ。…まあ、可愛いけどな。」

やはり王ドーラは、中身がどうだろひと見た田が美少女だとダメらしい。

「風間くんも災難だつたな、追われるばかりか、そんな田に畠わせやうなんて。」

「はあ……」

ひろしのなぐさめに、トオルは苦笑で応じた。

「風間くん、髪の毛サラッサラですな。」

そつと、しんのすけがトオルの髪をひょいとだけ触つた。その拍子に、手がトオルの耳をかすめてしまつたよひだ。

「あやんっ！」

シロではない。耳の弱いトオルが、思わず上げてしまつた声である。マタドーラがぎよつとして目を見開いた。

「お、お前、今…何気持ち悪い声出してんだよー。」

「マ、マタドーラさん、違うんですけど…これは…………」

トオルが慌てて弁明しようとしたが…………。

今度は耳に、しんのすけの息が、絶妙な角度で吹きつけられた。

「ああ……」

「うなるともういけない。恍惚状態に陥ってしまったトオルに、やがてしんのすけが団に乗つて、

「ほつほつ……じゃあ次一耳ハミハミ行ぐゾー！」

「ダ、ダメ……勘弁……して……」

「ふつふつふ、観念しなさい……。」

『ンッ！』

最強の握りこぶしの降臨によつて、トオルの更なる危機（？）は何か救われた。

「あんた何やつてんの！ ちょっと、風間くん大丈夫！？」

トオルは荒い息を吐いていて、みさえの問いかけに答えるどころではなかつた。女の子になつた影響かどうか分からないうが、前よりも耳の感度がさらに上がつてしまつたようだ。いや、反応のしが激しくなつたと言つべきか……。

「……お前ら一体、どんな関係？」

キッドが小声で呟いた……。

「ところで、どうして風間くんのお母さん、風間くんのことがちゃんと分かつたのかしら？」

みさえが、ふと思いついたように叫び。ひるしも首をかしげた。

「さあな……鼻がきくんじやねーの？」

「まさか、犬じやあるまいし。」

「でも吸血鬼になつたせいで、鼻がきくようになつてたりして。」

しんのすけが、もちろん冗談半分にそつ言つた。

「その通りよ、 shinちゃん 」

「えつ？」

絨毯の上の全員が、突然降ってきた声の方を振り返った。

「う、嘘…。」

みさえが半ば、呆然と呟く。

そこには、何の支えもなしに空中に浮かぶ、しんのすけたちの担任・よしながみどり先生の姿があつた！

「ぬおおっ、よしなが先生お空飛んでる～！かっこいい～！！」

「感心してると場合か！ていうか、誰あれ？」

「僕たちの通う幼稚園の、ひまわり組の担任をしてる、よしなが先生です！」

トオルが甲高い声で答える。

「ちょっと待て！よしなが先生がいるってことは、もしや…」「ひなしがさつと讀やめた。そこく…。

「ふう、やつと追いついたわ。」

「私もう疲れました…。」

またしても、しんのすけたちことってなじみのある声がしてきた。

「ま、まつざか先生！」

「上尾先生も！！」

幼稚園の先生三人組が、空中に勢ぞろいしてしまったのである。

「吸血鬼はね、嗅覚がそれこそ犬並みに鋭いのよ。だからあなたが風間くんだつてことも、すぐに分かるわけ。どうして女の子になつたのかは知らないけど……」

「ね、風間さん？」

「…。」

はつとして、キッドとドラメットが振り向いた時にはもう遅かった。

「さつきはよくもやつてくれたわね！」

ネネのママが、王ドラに向かつて叫ぶ。あの二人も、こっちへ近づいてくるところだつた。空を飛んで……。

「や、そんな、もつ……」

王ドーラが、明らかに動搖した声を出した。他のみんなも同様だった。全速力で、絨毯をここまで飛ばしてきたといつのこと、まさか相手に飛行能力まであつたとは……。

「さあ、觀念なさい！」

よしなが先生が叫んだ。

「誰がするか！」

キッドが威勢よく返すが、空氣砲がなくてはどうしようもない。折悪く、このような事態が起らるとは予想もしていなかつたこともあり、ドーラえもんズたちはほとんどの道具を持っていなかつた。マタドーラなどは、お菓子とヒラリマントしか持つてきていないので。

「ど、どうするのー?」

みさえが金切り声をあげて、ひろしこしがみついた。もはや万事休すだ。ほとんど誰もが（しんのすナビドーラコーネは除く）そう思つた。

「……仕方ないでーーるな。」

「！？……ドラメット、何かいいものがあるんですか？」

「ふむ……まあ、な……」

「じゃあそれを出してくれー早くーーー。」

キッドが怒鳴る。ドラメットがふとじりかり、「ルルルル」と取り出したのは……。

「…………何だこれ、薬？」

「つむ、我が輩が発明した薬でーーるよ。」

「どんな効果があるのですか？」

「簡単に言えば、飲んだ口ボットの力を急激に引き上げる薬でーーーる。そり、びりっと見積もつて……

「100万倍は上がるはずだあーるな。」

「ひや、100万倍いー? オレに、オレに飲ませてくれ!」

「オラが飲みたーい!...」

「あなたはダメ! 口ボットじゃなこでしょ!...」

「えーつ!」

しんのすけの不満そうな声。ドラメットの説明は続く。

「…しかし、その急激なパワーアップに耐えるため、飲んだロボットは一時的に人型ロボットになるのである。」

「ええ!? 何で?」

ドラえもんズの声が重なった。

「…で、でも、いやいや言つてゐる場合ぢゃありませんよー! これは唯一の頼みの綱なんです! …早く誰か、飲んでくれ!...」

「よっしゃー! じゃあオレが…」

ドラの舌びに心じ、マタドーリーが手を伸ばしかけたが……。

「何か知らないけど、させないわよー!」

よしなが先生の放った衝撃波が、ドラメットの手から薬のびんを吹き飛ばしてしまった。

「し、しまった! 誰かキヤッチするでーるー!」

びんは大きく弧を描いて飛んだが、ちょつと落着地点にいたドラ

が、何とかそれをキヤッチした。

口で。

「……むぐつ！」

「ああっ、こいつ飲みやがった！するいぞ！！」

「いや、ていうか人型になるって、一体どうなるんだ！？」

マタドーラとキッドがてんでに叫んだ。

その時。

「ドンッ！――

「つおあああ！」

突如王ドラの身体からほとばしったエネルギーと光に、キッドたちは思わず尻もちをついた。

「な、何だあ？何が起こるんだー!?」

「でも、このエネルギー…きつとすげーもんが出てくわーーー！」

「ぬおーっ、まぶしーっ！」

「し、しんのすけ、そこは父ちゃんの服だ！顔突っ込むなーー！」

それぞれが驚きと期待に胸を膨らませる中、最強の入型ロボットが、今、誕生しようとしていた……。

「ポシューンッ！」

「…え？えええええー!?」

全員の絶叫が、夜の空に響き渡った。

なぜなら、そこにいたのは……。

「だ、誰なんだ？」

マタドーラが上ずった声で、叫んだ。

「お前は誰なんだ！？」

黒髪に黒い瞳の、顔立ちの整った少年。ビリコウわけか手に、かばんを持つている。

何だか誰かに、似てこむような……。

「ほ、僕！？」

一呼吸おいて、やつぱりたのは

トオルだった。

「風間くんに、そっくり……」

さすがのしんのすけたちも、愕然としてつまづ言葉が出ない。じー。

「え？ トオル、これお前の男の子バージョンー？」

「僕は元から男の子ですけど。」

マタドーラの言葉に、トオルがやや不満げに言い返した。一方キッドは、元王ドラの少年に向かつて色々聞いている。

「なあお前、本当になんなの？ どうなつてんの！？」

「僕は王ドラ^に武。この姿でいられるのは十分だけなんです。」

「王ドラ武ー？ 時間制限あるんだ？ てか、お前ほんとにパワーアップしたのー？」

「さあ。」

「全然弱そうじゃねえか！ なんかトオルにそっくりみたいだしよ……必殺技とか持つてねーのー？」

「さあ。」

「てめー話聞いてんのかー！」

「あつはつめ、バカね！何やつてんのーー？」

かばんから出したらしいノートを見ながら生返事の王ドリットにキッ
ドが怒鳴ると同時に、ネネママの笑い声が降ってきた。

「そのまま殺つてやるわー・食らこなさいーー！」

ドオンーー

「うわああー！また衝撃波が来たーー！」

ひろしが叫ぶが、絨毯も取り囲まれていて動きようがない。

「くそつ、あんなでかいの、ヒラリマントではね返せるかどつか…

……

それでもマタドーラが、果敢にも衝撃波に対しヒラリマントを振りかざした。ドリメットも、逃げ出す隙はないかと必死で敵を見回している。

今度こそダメか……。ひろしほみをえとしんのすけと、ひまわりを抱き寄せた。トオルは知らないつむじ、シロをきつく抱きしめていた。ドリメットの発明品は、どうやら失敗だったようだ。

いや、それとも…。

「やれやれ、つるやくて勉強できやしない。」

「しなくていいんだよ！」

キッドはもうキレ氣味だった。

「見ろよ、あの衝撃波！あれが来たら終わりなんだよ……。」

「ああ、あれですか……。」

王ドリ弐は冷めた目つきでそちらを見やると、持っていたノートをひょいと投げた。

ポンッ！

「……え？」

その場にいる全員が、田の前に広がる光景に田を見開いた。王ドリ弐の投げたノートがとんでもなく巨大になり、衝撃波をあつさつと受け止めてしまったのだ。

いや、正確に言えば、吸い込んでしまったのだった。

「嘘！？」

ネネママが叫ぶのを冷淡に眺めつつ、王ドリ弐は言った。

「次は…………」いつの番ですね。」

ピカッ！

「お、おい、何だ？ノートが光りだしたぞ。何が起こるんだ、一体…………！？」

一同が見守る中……

ノートの中から、無数の文字や数式がなだれ出てきた！

「あやあああ！」

文字群の流れを食らって、母親と先生たちはひとたまりもなく吹っ飛ばされた。文字の一つ一つが、人間一人分ぐらいあるのだから、たまたまつたものではない。

「す、すげえ！めちゃくちゃ強いじゃねえか……でも何なんだ、この力は？」

「……僕は勉強の邪魔をする奴は許しません。今のはその制裁です。罰です。」

「いや、全然分かんねえから。」

「お前本当に王ドラ？」

思わずついついまづにはしゃがれてい、キッズヒマタドーラであった……。

7・見参一王ニア式（後書き）

パワーアップした(?)王ニアにつけた式は、2を一応中国風に書いてみたものです。色々不快な部分があつたと思います。すみません……。
感想もお寄せくださいっ!!

8・撃破（前書き）

王ジニア式が、やうやく意味不明の活躍ですー。どうやらお楽しみくださいー！

「な、何かよく分かんないけど…………」
みさえが、王ドリカのいた所に座つてこる者を、けりつと見やつて言った。

「ちょっと形勢が、じつちへ傾いてきたのは確かなよつだな。」「ひろしも、やや戸惑い氣味ながらそう応じる。

敵を吹つ飛ばした文字群は、やがて巨大ノートの中へと、吸い込まれるように戻つていつた。するとノートは元通りに小さくなり、王ドリカの手の中に戻つた。王ドリカ武は、それをこともなげにかばんの中にしまつ。

すげー、やるなー、ヒキッドたちが歓声を上げるのを聞きながら、トオルはドリメットに尋ねてみた。

「ドリメットさん、どうしても気になることがあるんですけど……なぜパワーアップした王ドリカさんが、僕とそっくりな姿をしてるんでしょ？顔や身体はともかく、服装まで似てるんです。」「うーむ……」

ドリメットは、何やら考え込みながら顎をなでていたが、「我が輩にもよくは分からぬのである。しかし、仮説を立てることはできるであーるよ。寒は、あの薬は環境に非常に敏感で、場所によつて効果が変わつてしまつのである。恐らく春日部で飲んだことから……それに王ドリカの心も関係してこるのであるな。」「心？」

「王ドリカは、お主を女の子にしてしまつたことについて、非常な責任を感じてこらはずである。やうした気持ちが薬に影響して、お主と同じ姿になつてしまつたのではないかと……我が輩は思つである。」「…………」

分かつたよつた分からぬよつなやじしき説明を理解しようと、

トオルは長くなつた髪をかき上げた。ああもう、この髪うつとおしい。どうにかならないかな…………。

「…………ガウガウ！！」

「アーティスト」

トテ――ノが突然叫え出した。

「…………あ！」
「…………みさえが突然叫び出したので、みんなが反射的に顔を上げた。
みさえが叫ぶ。下の方からふわりと、浮かび上がってきたものがあ
つたのだ。

先生と、母親たちだった。

「くそつ、また来やがったか。」

キッドが舌打ちして呟く。空氣砲があれば、と心から思った。

「残念だつたわね…… 吸血鬼は怪我や負傷からの回復能力が、とても早いの。これぐらいじやくたばらないわよ……。」

のに、じつと注がれている。

「驚いたわ、トオルちゃんの姿になるなんて…とにかく消えてもらつわよー！」

その言葉とともに、絨毯を取り囲む女性たち全員が、一斉に衝撃波を放った。かばんの中を相変わらず「ごそ」「ごそ」やっている、王ドラゴに向けて……。

「うわ、また来たぞ！」

マタドーラがヒラリマントを振り回して叫んだ。

「…まつたく、「つるせ」ですね。」

ボシュンッ！

「！？」

またしても、一同睡然となつた。

今度は絨毯の周りを囲むようにして、巨大な盾がいくつも、空中に出現したからだ。

いや、それはよく見ると……

消しゴムだった。

「う、嘘だろ?」

マタドーラは田の前の光景に田を凝つた。どうかいいくつもの消しゴムが、放たれた衝撃波を全て打ち消してしまったのだから…。

「や、そんな…」

風間ママも、さすがに呆然としている。

「…お前、ほんとにすげえな。すげえけど…………何で武器が、勉強道具?」

キッドの的確な質問であったが、王ジラ式なる少年の返答は実にやつけないものであった。

「僕が秀才だからです。」

「それだけの理由で? ていうかねんちやくは使わないのが、ねんちやくは。お前のトレーデマークだるーがよ。」

「さあ。」

「また生返事かてめーー!」

「くわ、こうなつたら仕方ないわ。肉弾戦よー!」

まつざか先生の命懸と共に、敵が一斉に襲いかかつてきた。

しかしその瞬間に生まれた隙を、ドリメッシュは見逃さなかつた。

「それっー!」

絨毯が風のようごに動き（シロは危つて転げ落ちるところだった）、先生たちの間をすり抜けて包囲網を突破し、逃避行ならぬ逃飛行を

開始した。

「しつかり捕まつているであーるよー。」

ドーラメットの声がする。トオルは長い髪が邪魔をして視界を遮られ、色々と悪戦苦闘していた。

「ああもひ、これ…………やだ！」

「逃がさないわよー待ちなさいーーー！」

風間親子の声が重なった。

「そんなスピード、すぐに追いつけるわーーー！」

確かに、彼女らの飛ぶスピードは予想以上に速かつた。ドーラメットが精一杯頑張つていてるのにもかかわらず、もうネネママの手が絨毯にかかりそうだ。

それを見た王ドーラボが立ち上がり、かばんに手を突っ込んで何かを引っ張り出した。

「… ものをし?」

30センチのものを感じた。「なんの手で、じひじょひひひつかうのか?

「… 必殺。」

王ドーラボが呟いた、次の瞬間。

ヒュンッ、バキッ！

「がつ…………！」

風間ママは、激痛にうめいた。ものを感じて、胸元を叩かれただけだと思つたのに……何なのこれは!?

バキッ！バキッ！！

他の女性たちも、次々とものせし攻撃の餌食になつてひるんだ。

「…痛い。何をしたの？」

「…僕の『やのせしソード』に触れた者は、ただでは済みませんよ。」

「 ものせしソード…？」

真面目な顔で言つ王ドリボを前に、キツズはもう笑こ出しやうになつていた。なんてふざけた奴だ、勉強道具を全て武器にしてしまうとはー。

まあ、強いからいいのだが…………。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「んん？何だ！？」

王ドリボの身体のどこから、警報みたいな音が響いてきた。

「…どうやら、もうすぐ時間切れのようです。そろそろどどめをしますか。」

それを聞いて、トオルが慌てて王ドリボにしがみついた。

「王ドリボさん（ですよね？）、ママたちを殺したりしないで下を二…お願こしまく…」

「いや、王ドーラ君は、オリジナルと違つて女の子アレルギー（？）ではないらしい。トオルに対してもくりとうなずいただけで、ひょいと絨毯の上から、先生たち田がけて飛びかかった。

「く……」

先生たちが身構えようとするが、王ドーラ君の動きの方が速い。かばんから、もう何かを取り出しかけている。

「何が出るんだ？ シヤーペンか！？」

「いや、多分分度器だ！！」

「どうちこしてもしょぼいですね。」

大騒ぎをして、王ドーラ君が取り出したのは……

…。

「アチコーシー！」

「最後にねんぢやく出たー……（やつぱり）こいつ王ドーラだつたんだ……」

バシバシバシッ！

「わやああー！」

王ドーラ得意のねんぢやく攻撃を食らい、ネネママたちは飛行能力を失つて落下し始めた。

「あ、いけない！」

みさえが叫んだが……。

心配は無用だつた。

「くそ…これを使うことになるなんて……！」
よしなが先生が舌打ちし、ポケットから取り出した何かを空中に投げた。

ポンッ！

「何つ！？」

キッドが目を見開いたのも無理はない。何かが爆発した所に、巨大な円盤みたいなものが浮かんでいたからだ。たちまちのうちに、先生と母親たちの身体がそこへ着地する。

よしなが先生が、悔しげに言った。

「覚えてらっしゃい！このままじゃ済まさないわよ！…もちろん風間くんや、 shinちゃんたちもね！！」

「先生、本当にどうしちゃったんですか？元に戻つて下さい！」
トオルが必死に呼びかけたが、よしなが先生の表情は変わらなかつた。

「ふん、私たちを戻したいのなら、あそこを潰してみなさい。」「！」

よしなが先生の指差す方向を見て、トオルと野原一家は仰天した。
春日部の中心に、つい最近まではなかつたはずのものがそびえていたからだ。

巨大な塔。

一言で表せばそつなるが、何だか嫌に金属質の輝きを放つていて、ほつそりした流麗な形で、現代にそぐわない感じの建物だ。未来的な建物のような印象を与える。

「何あれ？」

ドラリー一ヨが素つ頓狂な声を上げる。

「あそこには、吸血鬼四天王の方々がいらっしゃるわ。私たちに捕まるのが嫌なら、彼らを倒すことね。……が、無理でしょうけど。

「な、何だとお？」

「じゃあ、また今度ね」

そう言つて、どう操縦しているのか、よしなが先生は氣絶した仲間をつれ、円盤を飛ばして塔のある方向へと消えてしまつた。

「…なんかよく、分からねえが。」

しばしの沈黙の後、キッドがやや低い声で言つた。

「要は助かりたかつたら、あのでつかい塔に殴り込みにいけつてことか。」

「そのようであーるな。」

ドラメットがそう答えた時、

ボシュツ！

とこう音と共に、王ドーラ武の周りから煙が上がつた。

いや、もう王ドーラ武ではない。

「うへん…何があつたんですかあ？」

オレンジ色の身体に中国服のネコ型ロボットに戻つた王ドーラが、緘毯から身を起こしてぼんやりした声を出した。

「どうしたんですかつて…………お前ドーラコーネー！『じゃあるまじー、わつものこと覚えてねーの？』

「せつしき？私、何かしたんですか？」

「…………」

どうやら変身中の「ひと」とは、当人の記憶に残らな「ようつだ。

さつきまでの一連の出来事を聞かされて、王ドラは心底驚いた。

「そうですか…まさか私が、そんな力を……」

「でもカツコよかつたゾ！」

「たやーいー！」

しんのすけとひまわりにおだてられ、王ドラは顔を赤くした。照れ屋さんなのである。

「四天王って言つてたけど……かなり強いんでしょうね。大丈夫かしら？」

不安げなみさえに、ドラメットが励ますように言つた。

「まあまあ、そんなに心配しない方がいいでーるよ。…おお、そうだ、この薬を皆に渡しておくでーる。こざとこづ時に飲むでーるよ。」

「まじで？」

「わーいー！」

こつして王ドラを除く、ドラえもんズのメンバー全員が、ドラメットの薬を四次元ポケットや四次元ハット、四次元マフラーにしまつことになつた。マタドーラはすぐにでも試してみたそつだつたが、王ドラににらまれてやめておくことにした。

「あー、オレなんか眠くなつてきたぜ。ショスタショスタ……。」「オラもー…………ところでショスタつて何？」

お寝坊なこの一人、誰も何も言わないうちに、絨毯の上でさつさと眠りについてしまつた。それを呆れて見つめる一同だったが、「まったく幸せな奴らじゃな……でももう我々も、眠つた方がよれそうである。」

「そうですね、でもここにじゅう敵的ですよ。どこか安全な場所へ、移動しましょ。」

とこりわけで、みんながやつて来たのは春田部山であった。
安全かどうかは微妙だが、少なくとも町中よりは敵の目も少ないだ
ろうというわけだ。色々と疲れていたトオルたちは、驚くほどあつ
とこり間に眠りの中へと引き込まれていった。

明日から、命をかけた戦いが始まることを、つまづく予感しながら
.....。

8・撃破（後書き）

次回からこよいよ、本格的な戦いが…？今度は誰がどんなふうにパワーアップするのかも楽しみに！感想も待っています！

9・殴り込み（前書き）

敵が待つ塔へ向かうことを決意した、しんのすけたちとゾウ^{えもん}ズの行く末は！？」の後すぐつ！

9・殴り込み

「どうかの暗い部屋の中。

数人の話し声が、静かに響いていた。

「逃げられちゃつたみたいだね。」

「結構しぶとい……」

「ええ、でも予想はしてたわ。それにしても一緒にいたタヌキみたいな奴らは何なのかしら。ロボットらしいっていう話だけど。」

「さあ……でもまあ、そんなことはどうでもいいじゃない。それよりあたしは、明日みんながここへ乗り込んでくるかの方が気になるわ。どう思つ?..」

一拍おいて、くすくす笑う声。

「乗り込んでくるよ。絶対にね。」

「僕も、そう思つ。」

「じゃあ、こっちもそれなりに歓迎してあげなくちゃいけないわよね……」

部屋の中に、再びくすくす笑いが広がった。

「……」、「ーん……」

王ドーラの意識は、もう田覚める一步手前まで来ていた。田が覚めそうだけども少し眠つていい、そんな感覚の中だ。

「うう……」

それでもやはり、覚めるものは覚めてしまう。

王ドーラは田をぼんやりと開いたが、いまいち何も見えてこない。無意識に、寝返りしていた。

その途端、心臓が止まるかと思つた。

田の前に、可愛い女の子の顔があつたのである……。

「…………」

何とか顔の向きを変え、危機から回避した王ドーラだったが、まだドキドキ感はおさまらなかつた。

(まつたく情けない……彼は男の子なんですよ!)

何とか自分にそう言い聞かせようとしながら、王ドーラはもう一度寝返りを打とうとした。すると、その瞬間。

四次元袖の中から、じろんと何かが転げ落ちた。虹色に光るもののが

。

(……あ……親友テレカ!)

そういうえばここへ来てしまつたのも、親友テレカが突如光り出したのが原因だったはずだ。それが今でも、それほど強くはないが輝き続けている。

どういふことだろ? 親友テレカがこんなに長い間、じろじろ光り方をするところなど、見たことがない。この親友テレカはドラえもんズの間でだけ通用するよくなつていいはずなのだが……。

「うへん……」

キッドの「めぐ声を聞いて、王ドラはハツと我に返った。
そうだ、ぐずぐずしてはいられない。みんなを起さなければ。

「あー、オレ腹減つちまつたなー…………」

キッドが腹をなでながら、眠気混じりの声で言つた。ドリえもんズ
一の食いしん坊である彼は、空腹だとダメダメなのだ。
それを聞いたしんのすけも、愚痴るよつな口調で呟いた。

「オラもお腹空いたゾ。何かない？」

「僕も…………昨日は何も、食べてないんです。」

トオルもやや、控えめに言つた。

すると王ドラが、少し得意げな笑みを浮かべた。

「こんなこともあろうかと、私の発明品の一つを持つてきましたよ。
これがあれば、少なくとも食生活の面では困らないはずですーー！」

「お前の発明品？」

マタドーラは半信半疑の様子だった。視線がそれとなく、トオルの方へ注がれている。

「食つたら女になつたりしねーだらうな？」

キッドもかなり心配そうだ。

「だ、大丈夫ですよー！」これはれつきとした完成品ですから、安全
なのは間違いないです。ほらっ！ーー！」

と、王ドーラが四次元袖から出したのは、小さな茶色のパンみたいなやつだった。みんながしげしげと、物珍しげにそれを眺める。

「別に特別おいしくはないさそりだな。」

「ええ、これ 자체に味はないんですけど、このパンは食べた者の気持ちに応じて味を自由自在に変えるんです。例えばステーキを食べたい人ならステーキの味がするし、カレーを食べたい人はカレーの味がする、といつぱり。」

「へえ……」

聞いているしんのすけたちの目に、輝きが増してきた。

「それに栄養バランスは抜群。便利でしょ？・身体に悪いとか、そういうことを気にせずに好きな味を楽しめるんですから。」

「……じゃあさ、ビールとかでもいけるわけ？」

これはひろしの言葉だ。

「味は再現できますけど……アルコールがないから、酔つることはできませんよ。」

「オラほしーっ！ちようだい！……」

たちまちしんのすけを皮切りに、キッズ、マタドーラ、ドリーリー、ヨーデルリー、ソフやドーラメントまでが王ドーラの発明したパンをねだりに来る有様。王ドーラは慌てた。

「ちょ…………押さないで下さい！」

それを遠巻きに眺めているトオルに、野原夫婦とひまわり……。

とにかくまあ、朝食の時間はにぎやかに過ぎていった。

「着いたであーるよ。」

ドラメットがみんなに声をかけた。

朝食を終えた一同は、絨毯に乗つて一直線にあの塔へと飛んできたのである。

そしてこぞ、中へ入る所としたのだが……。

「あれ？ これ出入口ねーじやん。」 キッドが首をかしげだ。彼の言う通り、巨大な塔の根元に当たる部分に、当然出入りできる所があるはずなのだが、それがないのだ。

つるんとした金属質の壁が、ぐるりと繋がつているばかり。かと言つてこれをぶち破るのは、相当骨が折れそうだ。

「何だよ、来いって言つておいて入れねえつてビーリングだよ。マタドーラが腹を立てて、頭の角で壁を何度も引っ搔いたが、傷一つつかなかつた。

「もしかしたら逆に、上にあつたつして。」

「上え！？ そんな、まさか…………」

そのままかだった。

「おこおこ、ドラリー！ ピの言つたことが当たつたまつたぜ……」

キッドが、下を見ないよう気をつけながら、ため息をついて言った。

塔のてっぺんの部分に、大きな穴がぽっかりと口を開いていた。

「こゝから入っちゃうの？」

「だつて他に入れるところだろ。」

「でもピンポンって押すところがないゾ。」

「あるか、そんなもん！」

ともかく絨毯は、その穴の中へと吸い込まれるように入っていった。

「来たぞ！」

いくらも進まないうちに、突然声が響いて辺りが真っ暗になつた。

頭上の穴が、閉じてしまつたのだ。

そして室内に、パツと明かりが灯つた。

「！？」

何といつてだらけ。

そこは百数人もの人間で　　いや、吸血鬼たちで、埋め尽くされていたのである。「四天王様のところへ行かすな！捕まえろ！…」たちまち吸血鬼たちが、わざとこちら田がけて押し寄せてきた。絨毯を操り、ドラメットが大慌てで逃げ出す。衝撃波が、幾度もすぐそばをかすめた。

「や、やべえぞ！あの薬を使うか！？」

「ダメですよ、エル・マタドーラ！あればござとこいつ時に…」

「今つていざといつ時じやないのかよ…」

一方トオルたちは、吸血鬼たちが襲いくる中身を縮めて寄り合っていた。

「…………！」

しんのすけがあることを思いついたのは、その時だった。

「父ちゃん！ちよつと『めん…』

「え？」

突然呼びかけられ、きょとんとするひろしの足から、しんのすけは靴下を抜き取った。

もちろん鼻をつまんでいる。ひろしの足は、最強レベルに臭いのだ！

「えい、えい！」

その靴下を、しんのすけは押し寄せてくる吸血鬼たちに向かつてぶんぶん振り回した。

「しんのすけ、何やつてんだ！？」

キッドが怒鳴りつける。

が、しかし…。

「……」

「うわー何だこの匂い……」

「げっ、くさつ……」

吸血鬼たちが、慌てて鼻を押さえて退散していく。近づき過ぎて、匂いをまともに嗅いでしまった者たちなどは、氣を失って倒れてしまつた。

「そ、そつかー奴らは鼻がきくから、逆に臭いものとかに弱いんだ……」

「つーか本当にすげえな、その匂い。」

ドラえもんズの面々も、思わず鼻をつまんでいた。

「今なら父ちゃん、春日部乗つ取れるゾ…………」

「はあ……」

予想外の効果に、しんのすけたちも呆れてしまつたのだった。

「……ん? 見ろよ、あそこにも穴があるぜ。」

マタドーラが真下を指差した。

「あそこもどつかに通じてるかも知れないぞ。行ってみようぜ……」

「よーしー。」

ドラメットは軽快な飛ばしつぶりで敵を振り切ると、あつといつ間に床の穴の中へと下りていった。そこに何が待っているかも知らずに……。

一言で言えば、ド派手、だつた。

「何だよこの部屋は……？」

どこもかしこもピンク色ばかり。床には柔らかい、豪華そうなピンクのクッションが敷きつめられて、天井には大きなシャンデリアがある。女の子の子供部屋の、規模と派手さを倍にしたような感じだ。

「ねえ見て見て！あそこに何か書いてあるよー！」

ドラリーニョが天井の辺りに、何だか看板らしいものを見つけた。ドラメットがそれを読み上げる。

『第一四天王の間』

「何…………四天王つて、昨日あの女が言つてた四天王か！？」「まさか、四天王がこんなとこに住んでるわけねーだろ。」「マタドーラがまるで信じていない様子で言った。

「いえ、本当よ」

「！」

突然部屋の隅から声がして、全員が反射的にそちらを振り返った。

そしてトオルは、束の間言葉を失つた。

「き、君は……！」

9・殴り込み（後書き）

第一四天王の正体は、なんと……！？次回から激闘必須！

……なんて盛り上げといて悪いんですが、これからはクレしん＆銀魂の小説更新に移らせていただきます。かなり待たせることになると思いますが、応援よろしくお願ひします m(—)m
感想もくれたら嬉しいです！！

10・第一四天王（前書き）

第一四天王の正体は.....?そして今回も、ドラえもんズの誰かが
パワーアップ!?.?.?.お楽しみ下さい!!

10・第一四天王

あまりの驚きに、トオルは言葉を失っていた。

「き、君は……」

そしてそれは、野原一家も同じであった。

「う、嘘！？」

「君は……」

あいちやんー！」

「お久しぶりですわ、皆様。」

丁寧に会釈する美少女をにらみつつ、キッドが尋ねた。

「こいつも知り合いなのか、しんのすけ、トオル？」

「うん……」

短く答えるしんのすけ。トオルは首をかしげていた。

「僕らの友達の、酢乙女あいちゃんですけど……どうしてここに

……ハツ！まさか……！」

「そのまさかですわ。」

あいが、にやりと笑つてみせる。

「あいは吸血鬼四天王の一人……第一四天王でござりますわ。」

「な、何い！？こんな小さなセニヨーリータが……！」

マタドーラが信じられないというような声を上げて、あいを見ている。ドラえもんズの他のメンバーも、一様に戸惑いと驚きの表情を浮かべていた。

「そんな……あいちゃんが四天王の一人だつたなんて……」

「（心配なく、風間くん。あなたとしん様たちは、ひどい目に合わせるつもりはありませんから。でもそこにいらつしゃる、ロボットの方々には……）

消えていただきますわよ！

あいが叫んだ瞬間、驚くべきことが起きた。

今まで何もなかつた部屋の中の空間に、突如無数の何かが出現し、ふわふわ漂い始めたのだ。よく見れば、それは……

宝石だつた。

「な、何じやこりや！」

キッドがぽかんとして空中に漂う宝石たちを見回した。それぞれが天井のシャンデリアの光を跳ね返してきらきら輝き、実に美しい眺めだ。

「皆さんー！」の宝石には何か、危険な力がこめられてる気がします！決して触らないで下さい！」

王ドラがぬんちやくを振り回しながら叫んだ。

「ぶ、らじゅーー！」

「分かつたわー！」

「たやーい！」

「…口だけじやねーか、お前ら！」

マタドーラの言つ通り、威勢よく返事を返しながらも、野原一家は既に漂う宝石をいっぱい手元に集めていた。特に宝石好きなひまわりの執念はものすごい、キッドが何度も取り上げようとしても、決し

て離そうとしなかった。

「ちよ…何やつてるの！？」

トオルも慌てて宝石としんのすけを引き離そうとしている。

その時だった。

突然、しんのすけの背後にあつたダイヤモンドが、2メートルはありそうなサイズに巨大化したのだ。

「おー！」

後ろの異変を感じ取つたしんのすけが振り返つた時には、巨大ダイヤモンドが既に強い光を放とうとしているところだった。

「まずい！何か来る…………！」

しんのすけのもとへ走る王ドラ。しかし間に合ひそうにもなく……

…。

「危ない！」

「おわっ！－！」

トオルがしんのすけを蹴飛ばし、しんのすけは叫び声を上げて地面に倒れた。しかしおかげで、謎の光の襲撃からは逃れた。

代わりに、トオルがそれをまともに浴びる」とになった。

「風間くん！」

「トオル！」

キッドたちが叫んだが…。

光があさまつた時、地面にころん、と何かが転げ落ちた。

吸い込まれそうなほど青い色をした、一個のサファイアだった。さつきのダイヤモンドは、もう元の大きさに戻っている。

「な、何だ!? トオルが宝石になつちましたぞ!」

「風間くん…」

自分をかばつて犠牲になつたトオルのことを思い、しんのすけは safaria を抱えたままその場に座り込んでしまつた。

「てめえ…」いつらには手を出さないつて、わざと黙つてたじやねーか!—

キッドが怒りの声を上げたが、あいは平然としている。

「危害はもちろん加えていませんわよ。ただお仲間になつていただく時、抵抗されないように、少しの間宝石になつていただくだけですわ。」

「宝石にじゅうなんて…… 吸血鬼って、そんなこともできるの？」

みさえが震え声で言つた。もちろん、集めていた宝石は全て放り出してしまつてゐる。

「あいたち四天王は、他の吸血鬼にはない特異な力が与えられておりますの。あいの場合は、こいつやつて宝石を操り、生き物を宝石に変える術ですわ。」安心下せり、風間くんはすぐに元に戻しますから……こいつらを、片づけてからね

あいがドラえもんズの方へ向き直る。と、やる気満々の声が響いてきた。

「片づけるだと、言つてくれるじゃないか、セーラーリーター…… そうとなつたらこのオレが相手だ！」

「エル・マタドーラ！」

王ドラが驚いて叫ぶが、マタドーラはヒラココマンドを手に、もうついの前へ進み出でいた。

「トルを元に戻してもらうぜ、セーラーリーター！」

（フツ…… どうせこの宝石どもで攻撃するんだろ。こんな小さいもの、オレのヒラココマンドで余裕で跳ね返せるぜ！）
あいがくすくす笑つた。

「まあ、自分から来て下さるなんてありがたいですわ。
それじゃ…… 参りますわよっ！」

そう言つて、あいが何かを床から取り上げた。

鎖つきの鉄球……いや、巨大なダイヤモンド球である。

（全然違う！）

あてが外れたマタドーラは、振り下ろされるダイヤモンドハンマー攻撃に、慌てふためいて逃げ出した。一体彼女の細い腕のどこに、あんな力があるんだ？ ドラえもんズ一番の力持ちとの定評があるマ

タードーラでさえ、あのよつな巨大ダイヤモンドを軽々とは振り回せない。

「あー、どうしましたの、わざ今までの威勢は？」「ひ、ひ、ひ、ひ

！」

ダイヤモンドが床に穴を開ける。

「くつ…」

ヒラコマントでそれを微妙に避けつつ、何とかかわしてしまタドーラ。しかし彼は、明らかに劣勢に立たされていた。

「ぐわつ！」

かわしきれず、吹っ飛ばされたマタドーラは、痛みをじりだて床を転がり、続く攻撃をよけた。

「まずい、このままじゃ……やられると…」

「ちょっと……マタドーラさん、やっぱこんじゃないのー？」

みさえがひやひやした表情で呟ぶ。その時王ドラが、何かを思い出した。

「そうだ、HUL・マタドーラーあの薬です！あれを使ってパワーアップするんです！」

「……ああ、あれか！！」

マタドーラも、つい今の今まで忘れていたようだ。四次元ポケットから、あの大切な薬を取り出した。

「よししゃ、行くぜー！」

といねがタイミング悪く、ダイヤモンド球がマタドーラの腕をかすつて、薬が跳ね飛ばされてしまった。

「ああつー！」

マタドーラが慌てて薬の後を追いかけるが、とても間に合ひそう

ない。薬のジンは、床に当たって粉々に砕けてしまつたと思われた。

その時、王ドーラが叫んだ。

「マタドーラーあの薬をドーラ焼きだと思つんですか...」

(.....)

マタドーラは束の間田を細め、ジンをこらんだ。

その瞬間、彼の頭の中で何かが切り替わつたらしく。動きがぐんと速くなつたのだ！

「速つ.....！」

と、ひるじが言つた言わなこかのうちには、マタドーラせ薬の落下地点に追いつき、キャッチした。

王ドーラと同じように、口で。

「ジンシ！」

「...きやあつ、何ですの、この膨大なエネルギーは？何が始まるところの...？」

あいのダイヤモンド球を振り回す手が止まる。爆風が吹き荒れ、スカートを押さえるのに必死になつっていたからだ。

「来ます.....来ますよーマタドーラーが...！」

「マタドーラBだろー！」

「ううん、マタドーラスペシャルだよー」

「どうだつていいでしょー！」

シロカウチ…。

煙が晴れた向こうに見えた、その姿。それは……。

「パワーアップ、完了」

「…え？え、ええーっ！…」

「な、何ですの、これは…」

……あいになつた！？

そり、わざわざまでマタドーラがいた所に出現したのは、酔乙女あい

にやつくな、女の子だったのだ！

女の子（？）がきやぴきやぴと言つた。

「あたしさエム・マタドーラー！」

「エム！？」

「！」の状態でいられるのは18分23秒だけな

」

「わつわと違ひがちやん…てこいつか向でせんに微妙な時間なんだよ

…。」

みさえが慌ててマタドーラに駆け寄る。

「ちよ、ちよっと、あなた本当にマタドーラさんなの…？」

と、腕をつかむとした途端、

「あ…！」

悲鳴が上がった。

「…？」どうしたの？

「…い…痛い…」

あいそつくりの少女が、弱々しい声で言つた。なんと、涙に涙まで浮かべてゐる。

う、嘘でしょ？これじゃパワーアップビリカルか…。

「おこ、お前…」

「え？」

「え？じやねえよ…パワーアップしたんだろ…わつわとあこつと闘

えよ…！」

「あこつ？」

「あいつだよ、あいつ…」

キッドは荒々しくあいを指し示して、振り返り……呆氣ことひられ

た。

マタドーラが…女の子になつたとはいえ、あのマタドーラが、震えながらボロボロ涙をこぼして泣いてゐるではないか…。
女の子の涙に弱いキッドは、大いに慌てた。

「いや、ちょつ…どうしたんだよ、こきなりー…」

「…がないわ。」

「はは？」

「できない！あたし人を傷つけるなんてできない！…」

「…………」
「どうやら、とんでもない事態になってしまったようだ。キッドたち
は、一様に頭を抱えてしまった。

ビュッ…。

部屋の中に、あいの笑い声が響いた。

「何をしていらっしゃるの、あなた？まあいいですわ、これで終わり
にして差し上げます！…！」

ビュッ！

特大ダイヤモンド球が、ものすごい勢いで振り上げられた。エム・マタドーラめがけて…。

「うわ！やべえ、逃げろーー！」

ところがエム・マタドーラは逃げようとしない。その場に座り込んだまま、涙声で叫んだ。

「お願い、あたし争いが嫌いなの！無意味な闘いはやめて、話し合いで解決しましょう！」

「何言つてんだこの人…………」

さすがのしんのすけも、呆れるより他にならなかった。

「あー、いいですわよ…

これを受け止められたらねー！」

ダイヤモンド球が、超スピードで振り下ろされた。

「エル…じゃない、エム・マタドーラー何してるんですかー？早く逃げて下さいーー！」

「さつさと動け！潰されたいのかこのポンコツがーー！」

しかしへンダリードラとキッドが叫んだ時には、もうダイヤモンド球は避けきれない所まで来ていた。マタドーリの頭の真上に。

「マタドーリー！」

もはや全員が、マタドーリの死を覚悟した。

ドン。

「…………え？」

酔乙女あいは、自分の見ているものが信じられなかつた。

「ひっく……ひっく……うう……

これで……いいでしょ？」

まだ泣いているHム・マタドーラ。しかし、その高く上げられた右手には……

ダイヤモンド球が、乗つかつていた！

「嘘だろーー受け止めやがったぜーー！」

キッドたちが驚愕の声を上げる。しんのすけも思わず、

「おおーっ、カッコいいーっ！」

と、歓声を上げていた。

「ね？だから、話し合いで解決しましょうよ。」

「……」

あいは黙つて、思考をめぐらしていた。

（何ですのこいつは…………弱いのか強いのか、さりぱり分からない。
…………でもこにはうまくとりなして、油断を誘つとしましちゃうか。）

「分かりましたわ。それじゃお話を承りましちゃう……。」

ガツ！

「……？」

自分そつくりな少女が、突然ダイヤモンド球を両腕で抱え込んだの
を見て、あいは当惑した。
何をするつもりなの？

「こやあああ……！」

「えーっ……？」

なんとかダイヤモンド球を、一矢仇めがけて投げ返してきたのだ！

ドグシャツ！

「きやああああ！」

あいの悲鳴は、ダイヤモンドの下で潰されてしまった。それを呆然と見るデラえもんズと、野原一家。

「すげえ…明らかに力が増してる……」

「一応パワーアップはしたよつですね……」

エム・マタドーラはまだぐすぐす言っていた。

「ううつ…この分からずや……」

「えー？今分かってたじやん！分かってたよあいちゃん……」

すかさずつつこむひろし。その時ダイヤモンドが押しのけられ、下

からボロボロになつたあいが、愕然とした表情で現れた。

「何！？何ものでの、あなたは！」

「あたしはエム・マタドーラ。人を傷つけるのが大嫌いなの。
嘘つけ！」

10・第一四天王（後書き）

弱いよつで強い（？）、Hム・マタドーラが大活躍…？「え？」期待！

「ああ、次回はあ
たしが平和な一時をお送りしちゃうぞ
「『ていうかあんたマタド
ーラでしょ！？気持ち悪いですよー。』

11・心に平和を！？（前書き）

！ エム・マタドーラの不可解な力が炸裂！？ 第11部、始まり始まり

11・心に平和を！？

(「……」こいつ、本当にパワーアップした！？)

酢乙女あいは、痛みをこらえて立ち上がった。吸血鬼の回復能力のおかげで、身体の痛みはそう長く続かなかつたものの、心の動搖はなかなか取り去ることができなかつた。油断していたとはいえ、あの攻撃をまとめて食らってしまうとは…………。

それでも、こいつらを倒さなければならぬ。それが命令なのだから。
それに……。

「……フフフ。」

「！」

あいの笑い声が、しんのすけたちの歓声をぴたつと止めた。

「なかなかやるじゃありませんの…………でも残念でしたわね。

「こつちは、一人じゃないんですから」

「何!?」

「ドンッ！」

キッドが聞き返すのとほぼ同時に、後ろの天井辺りから飛んできた衝撃波が、ドラーーハフを直撃した。

「ギヤウッ！」

「あー、ドラーーハフ！！」

苦しげに叫んで床に倒れたドラーーハフを、ドリコーー三が慌てて抱き起こす。

「てめえ、何しゃがるー。」

キッドが怒りの声を上げて、衝撃波の飛んできた方向に「じぶしを振り上げた。

天井近くに浮いている男が一人いた。そして彼もまた、野原一家にとつて見覚えのある人物であった。

「黒磯さん！」

「んん？こいつも知り合いなのか。」

「ええ、あいちゃんのボディーガードをやつてる人なんだけど…」「ボディーガードですか…なるほどね。」

王ドラが、鋭い目つきで黒磯をにらむ。

「よくも私たちの仲間を！しかも背後から不意打ちなどといつ卑怯な手を使うとは、許せませんよ！アチョー！」

王ドラの手からぬんちゅくが飛んだ。しかし黒磯はするつとかわしぬんちゅくは壁に傷をつけただけであった。

「ちつ…」

「卑怯でも結構です。我々はどのような方法を使つても、野原さんたちを仲間にせねばならないのですから。」

無表情な声で、平坦にしゃべる黒磯。

「…そしてそれを邪魔するあなたたちは、たとえ卑怯な手を使つてでも消えてもらわなきゃいけないってわけですわ。」

あいの声も、同じくらい無機質だった。聞いていて、みさみとひろしは思わず寒気がしたくらいだ。

「…そんなの、ひどいわ。」

「え？」

あいと黒磯は、声のした方へ顔を向けた。

エム・マタドーラが立ち上がりつていた。

「どうして無駄に争おうとするの？どうして無駄に誰かを傷つける

の？分からぬ…あたしには、あたしには理解できない！」

エム・マタドーラの声は、さつきのあいの冷たい声と同じものだと
は思えないほど、悲しみに満ちていた。キッドたちも思わず、胸が
ずきんとしたほどだ。

しかしあいの心までは、届かなかつたらし。

「つるさいですわね、さつきから「いや」「いや」と…これでくたぱり
なさい…」

あいがさつと手を上げる。すると空中をふわふわ漂つていた宝石たちがぴたりと動きを止めたかと思つと……キッドたちめがけて、一斉に襲いかかってきた！

「うおわ！いて！これいてえ！」

「アチヨーツ、アチヨーツ！…あだ！やつぱりダメです！」

ぬんちやくを振り回していた王ドラは、宝石を打ち碎いたものの、その飛び散つた破片に腕を傷つけられてしまった。これではキリがない。

「危ないっ！」

ドラリー一三が突然叫び、しんのすけを突き飛ばした。

「おわ！…あ！ドラリー一三、耳が……！」

起き上がつたしんのすけが思わず大声をあげた。宝石の破片にかすられ、ドラリー一三の耳のてっぺんが、少し欠けてしまつている。ドラリー一三はちょっと耳に触つてみたが、すぐに笑顔になつた。

「大丈夫大丈夫、これぐらい。全然痛くないもん！」

「ドラリー一三、しゃべっている場合ではないであーるよ…」

ドラメットが叫ぶ。彼は一人、小型の絨毯に乗つて、部屋の中をあっちこっちと猛スピードで飛び回つていた。

そのすぐ後ろには、同じくすごいスピードで追いかける宝石の大群が！

どうやら宝石たちは、キッドたちだけを攻撃しているらしい。しんのすけたちを傷つけるつもりはないのだ。

「あードラメットが大変だ…！」

と叫ぶと、ドライバーのまはふといろから取り出したボールを、力をこめて蹴った。

「デショーンッ！」

ボールは勢いよく飛んでいき、宝石の大群の中へと突っ込んだ。素早くかわされてしまつたので破壊することはできなかつたが、少なぐともドラメットから引き離すのには成功した。

「ガウー！ ガウー！」

ドラニコフは「サック風」の動きで、意外と素早く宝石の動きを回避していた。できるならば丸いものを見て狼に変身し、火を吹いてこの宝石たちを一掃したいところだが、四次元マフラーから何か出そうとしている間に、攻撃の餌食になつてしまつだらう。

あいはなかなか相手をしとめることができないので、イライラしてきていた。

「しぶといですわね…………そうだわ、あのエム・何とかって奴はどうかしら？」

いくら力が強いとはいっても、この無数の宝石たちのスピードについていけるとは限らないはずだ。

あいは期待の目を、エム・マタドーラのいた辺りに向けた。きっと今頃は、ずたずたになつて倒れて……

いなかつた。

「ええ！？嘘！」

エム・マタドーラは無傷のまま、そこには立っていた。左手に持った赤い布みたいなのが振り回している。なぜかそれが近づくと、宝石たちは皆方向を変えていつてしまふのだった。

そしてなぜか、右手には絵本を持って読みふけっているのである。

「お……お前、やつぱヒリコマントは持つてたんだな……でも何その絵本？」

「まあマタドーラといえば、ヒリコマントですからね……」

息を切らしながら、キッドヒドーラが苦笑した。

しかし、そこに隙が生まれた。

ガシュウシ！

「がつ！」

宝石数個の直撃を背中や腹に受け、キッドヒドーラは痛みにびっくり返った。

「二人とも！」

ドラリー二ヨが助けに向かおうとするが、自分がよけるので精一杯だった。ドライミットも再び宝石たちの追跡を受け、ドラリーロフは：もうコサック風を放棄して全力疾走している。野原一家も、宝石たちに囲まれたまま動けずにいた。うかつに動いたら、やつさのトオ

ルみたいに宝石化されてしまつだらう。

「まず二人……」

あいの不気味な笑いと共に、宝石が地面に倒れた一人に向かつて降り注ごうとしていた。

「キッド……」

「王ドラ……」

二人の名前を呼ぶ声が、室内にむなしく響き渡つた……。

「ボン！」

「…………え？」

あいと黒磯は、わけが分からずにぽかんと立ち尽くした。

部屋の中が……変わった？

いや、そこはもう、部屋ですらなかつた。地面には青々と草が生え、花が咲き、周囲にはいくつもの木々。爽やかな香りのする風がそよぎ、そして空は、きれいな青色をしている。

森。一言で表せば、ここはまさに森の中であった。

それはいいとして、なぜいきなりこんな所へ来てしまつたのだ？まさかバトル中に夢を見るわけもあるまい。

「何なの、ここは一体？」

「まあ……」

「…！」は、絵本の世界。あなたたちをあたしの絵本の中へ、招待したのよ。」

「！？」

声のした方向を振り返ると、エム・マタードーラが立っていた。

そしてその後ろには、野原一家にドラえもんズの姿。キッドと王ドラは、ドラメットたちに助け起こしてもらっていた。

「え、絵本の世界ですって？ そんなはず…」

「本当のことよ。そして悪いけど、ここじゃあなたたちの力は無同等しい。この世界は、あたしの意のままなの。」

「何を言つてゐるの？ そんなはずないわー！」

あいは鼻で笑つて信じよつともしない。そんな彼女に、エム・マタードーラが静かに言つた。

「信じられないって言つたなら…

証明してあげましょつか？」

「え？」

あいは目を見開いた。

いつのまにか、マタドーラの手に一つの宝石が握られている。きれ
いな青色の、サファイアだ。

そう、トオルが宝石に変えられた姿だった。

「何をす…」

あいが言いかけた、次の瞬間。

ボンッ！

煙が突如、立ち昇ったかと思うと、

「うーん……あれ？ 何ここ…？」

中から、地面に座り込んだ体勢のトオルが現れていた。きょとんと
した表情で、同じくらいびっくりして固まっているあいと黒磯、そ
れにキッドたちを見回し、最後にすぐそばに立っている人物に気が
ついて、びくっと後ずさった。

「え？ あ、あいちゃんが、ふ…ふた…！？」

「おおーっ、風間くんが戻ったゾ！」

「そんなバカな…」

しんのすけの歓声に、あいの呆然とした咳きが重なる。酔乙女あい
にそつくりな少女は、トオルをなだめるような口調で言った。

「ご安心を。あたしはエム・マタドーラ、あなたを助けてあげただ
けよ。」

「エム…………つてこの人、マタドーラさんなの！？」

やはりトオルも、キッドたちの負けず劣らずびっくりしたらしく。
呆気に取られてその少女を眺めているばかりだ。

このままではマタドーラと一緒に、敵の攻撃を受けかねないとでも
思つたのだろう、王ドラが呼びかけた。

「トオルくんーあとの闘こはマタドーラに任せて、早くレッカへー！」

「え…あ、は、はー…」

王ジラの言葉の言わんとしているところを察知し、トオルは転がるようにしてしんのすけたちの元へ駆け寄った。たまらシロが、嬉しげに吠えて飛びつく。

「黒磯！何をぼやつとしているの！？早く衝撃波を…！」
あいがお嬢様らしくもない金切り声を出した。しかし黒磯は青白い顔をさらに青くして、震える声で答えた。

「も、申し訳ありません、お嬢様…しかし、出ないのです、衝撃波が。」

「嘘でしょ、うーー？」

嘘ではなかつた。あいも衝撃波を放とうとしたが、手の平からは何も出でこない。それどころか、身体が思うように動かないようだ。息苦しく感じられる。

そんな…。レッカは本当に、奴の意のままなのか？

「…でも何だかんだ言つて、すげーですよ、あのマタドーラは…」「もしかしたら、このまま勝てるかも知れないでーる…。」
王ジラとジラメットの表情にも、明るいものが蘇ってきた。

「さあ、現状が理解できたかしら？」

「な、何をするつもりよ…」

あいは自分の声に怯えた調子が混じるのを、どうしても止められなかつた。

「別に手荒な」とはしないから、大丈夫よ。…あなたたちのすさんだ心に、平和を送つてあげるだけだから

「…………！」

最初、わけが分からぬといつ表情をしていたあいと黒磯の顔が、驚愕の色に染まつた。なんだ、これは？

熱い。

ちょうど心臓の辺りが、異常なほどに熱くなつてきていた。それに呼応するかのように、鼓動も激しくなつていぐ。

ズギュン！

次の瞬間、胸にものすごい衝撃が来た。外からではない。体内からのものだ。まるで弾丸で心臓を打ち抜かれたかのような衝撃に、あいは身悶えした。

「う…苦…し…」

ズギュン！

もう一度来た。

今度はこらえきれず、あいは地面に倒れた。視界がだんだん、霧に覆われるよう薄れていく。

それと同時にものすごい熱さが身体中に広がり、あいの意識は闇の中へと落ちていった…………。

「…である。」

キッドが少し、ためらいがちな口調で切り出した。

もうあのメルヘンチックな森の中ではない。あいと鬪つていた部屋に戻っている。

ただし、空中を漂つていたあれだけの宝石は、全て消えてなくなつていた。

「ここの一人に、何をしたわけ？」

「心に平和を送ったのよ。」

「だからそんな説明じゃ全然分かんねえってば。」

さつきからずつとこの調子だ。

「で、でも、やつつけたのは確かにようですね。」

そう言つてドラの足元には、あいと黒磯が同じような姿勢で倒れていた。二人とも、胸を押さえている。

用心深く触れてみたところ、気絶しているだけで命に別状はないようだつた。

そして、それはともかく……

「わーい！僕たち勝つんだーーー！」

「やつたゾ！わーいわーい！！！」

ドラリーニョとしんのすけの二人は、もう既に緊張感から解放されたらしく、喜んで大騒ぎしている。

「こら！あいちゃんたちがまた田え覚ましたら、どうするのーーー！」

みさえが慌てて怒鳴る。すると、その時、

ピーンー・ピーンー！

ボシュツー！

「あー戻りましたよ！」

ちょうど18分23秒たつたらしい。少女の姿が煙にまぎれて消え、それが晴れた後には赤い身体の、角を生やしたエル・マタドーラが

.....

ぐーすか眠つていた。

「なんだこいつ… ショスターしながら鬪つてたのかよ……」

「まったく幸せ者であーるな…」

呆れるキッドヒドリメット。ヒドリガマタドーラに歩み寄り、向う

よに他のメンバーを見やつた。

「どうします？起こしますか？」

「おう、頼む。こいつ持つて移動するのはメンドくせえもんな。」

そこでヒドリは、いつものようにマタドーラを起こしにかかった。
ぬんちやくを使う覚悟をしていたのだが、幸い目覚める一歩手前だ
つたらしい。一回搖すっただけで目を開いた。

ぼんやりとした声が、それに続く。

「んー？…俺、何してたんだっけ？」

ヒドリたちは束の間顔を見合わせたが、やがてヒドリが、ため息混じりに告げた。

「色々ありましたよ、ホル・マタードーラ。とにかくこの敵は撃破しました。さつさとそのよだれをふいちやつてください。」

11・心に平和を！？（後書き）

うーん、今回の話、なんかおかしくなかつたかなあ…納得のいかない私（汗）。ご指摘でもいいので、どんどん感想をお寄せ下さい。変なら変と正直に…最近あまり感想が来ないので。次回は第一四天王の登場ですが、今回よりはシリアスな感じになる予定ですので、お楽しみに！！

12・落ひた先には（前書き）

ドリュー＝网投が暴走します。不快に感じた方は叱つて下さりて結構です…。

12・落ちた先には

酔乙女あいは敗北の屈辱を味わいながら、床に横たわっていた。

もう意識は戻つていい。黒磯もあと少しすれば、目を覚ますだろう。野原一家とトオル、そしてあのいまいましいタヌキロボットたち（あいはいまだに彼らがタヌキだと信じていた）は、既に下への階段を下りていった。

でも、今度はそう簡単にはいかないわよ。

あいは思わず、にやりとなつた。

次の階で待つてるのは、あい以上の力を持つ四天王たちばかりなのだから。

しかもあの『地獄』の戦場で、彼らが生き残れるとは、到底思えなかつた。

その頃、キッドたち一行は階段を降りきって、部屋に通じてゐるらしい大きな扉の前に立っていた。

「！」

「ここに、一人目の四天王が待つてゐるんだな……よし、みんな行くぞ！」

ところが、返事が返つてこない。どうしたのかとキッドが振り向く

と、みんな何だか妙な顔をしている。

「おこおこどうしたんだ？まさか『』まで来て、怖氣づいたって言うんじゃないだろうな？」

励ますように声をかけると、エドラが少し心配そうな声で、キッドに囁いた。

「実は……マタドーラがまだ……」

振り返ったキッドの視線の先に、がつくことつなぎでのうのうしていくる、Hル・マタドーラの姿が目に入った。その傍らでドラッグトが、どう声をかけたらいいのか分からず困った顔をし

ている。

なるほどな。キッドは一人うなずいた。マタドーラは可愛い女の子が大好きだが、その分自分が男らしくあることを意識する。『男の美学』と言い張つて、なぜかドラ焼きを剣に串刺しにして食べたりするほどだ（それを見るたびに、キッドはいつも食べにくそうだなと思つ）。

だからこそというか、彼は女装した男が大の苦手だ。それなのに自分のパワーアップした姿が女の子だったと聞いて、まだショックから立ち直れないでいるのだった。

「マタドーラ！ そう落ち込むな！ すぐに次の敵との闘いが始まるんだぜ！ 沈んでる暇はないんだ！！」
わざと叱りつけるように叫ぶと、キッドはドアを押し開けた。どんな光景が待っているのかと、内心ハラハラしながら

しかし、その心配は無用だった。

なぜと、彼はその扉の向こうを見ることができたからだ。足元の床が、一瞬で消滅したため。

「ー?」

ドライメットが絨毯を出す間もない。ぽつかりと開いた穴に、一同は呑み込まれるようにして落ちていった。

「た、高い所、怖い!」

叫んで王ドライにしがみつく、高所恐怖症のキッド。

「わっ!ちよ離して下さいキッド!...」

背は低いものの、様々な高度な部品とオイルが体内につまっているために、ネコ型ロボットの体重はかなり重いものだ。

そんな重たいキッドにしがみつかれ、自分のも合わせて重さがダブルになつたのだから、たまたまではない。王ドライはキッドと一緒に、超スピードで落ち始めた。

「うわああああああああ.....」

王ドライとキッドの悲鳴は、あつとこう間に遠ざかっていってしまった。

ドライバーⅢは相変わらず能天気なもので、

「ばいばい、王ドライ、キッドおー!」

「まったくドライバーⅢは...それ、空飛ぶ絨毯であーる!」

「よっしゃ、みんな乗れえ!」

「おー!」

さすがに活気を取り戻したマタドーラの大声に応じ、みんなまさに火事場のバカぢからとでもいうべきものを發揮した。どうやつて空中を動いたのか、全員が無事に絨毯の上に転がり込んだのである。

といひが。

「あれえ？ ドラメット、『れさつ めよつけちやくない？』
ドラリーー！ に言わね、ドラメットははつとしました。
しまつた！ 間違えて、通常サイズを出してしまつたのだ！！

そして、当然の「じとく……」。

「定員オーバーであるー！」
「ギヤーーー！」

絨毯はしんのすけたちの重みに耐えられず、ぐにやりとなり、放り
出されたみんなは再び落下することになった。
みさえは思った。も、もしかして、私たちこのまま死ぬの…？ 嫌よ
！ 「こんな若さ（…）で死ぬのは…！
せめてひまわりとしんのすけだけは……」。

バシャーン！

「ぶわっ！水！？」

一同は突然、ひんやりした水面に叩きつけられた。

一瞬息がつまるほどの衝撃が来たが、幸いそう深くない。大人なら、足が余裕でつくぐらいの水深だ。すぐみんな、水面から顔を出した。

ちなみにネコ型ロボットは、重いながらもちゃんと水には浮けるようになつている。

「な、何でいきなり水が…？」

「さあな。でもおかげで助かつたぜ。」

そう言つてふつと水を吐き出したマタドーラの口から、一緒に入れてしまつたらしい小さな魚も飛び出してきた。

「そうね、よかつたわ。下が水だったなんて…」

みさえがほつとしたように言つ。

ところが、一人、助かつてない者がいた。

「水怖い水怖い水怖い！」

「うおー！ドラメットのこと忘れてたー！」いつ水嫌いなんだよ。」

「そうなの？」

それにもしてもこの怖がりようは、しんのすけたちの田から見て尋常ではなかつた。この何の変哲もない水に、ネコ型ロボットたちの中でも最も落ち着いていると言えるドラメットを取り乱させる、どんな要素があるというのだろう。

水中でわたわたしているドラメットを助けようと、マタドーラとドラニーロフが近寄りかけたが、それより早く、ドラメットの身体が下からぐつと持ち上げられた。

「んもー、ドラメットったら本当に水が怖いんだねー。」

「ド、ドラニー…助かったであーる……」

ドラニーは無邪気な表情で、息もたえだえのドラメットを頭に乗せていた。

するとその時、

「おーい、お前らー！」

「大丈夫ですか？」

振り返ると、岸辺に王ドラとキッドがいて、みんなを手招きしていた。

「やれやれ、何とかまた集まれてよかつたぜ。」

マタドーラがため息をつきながら言った。

「まつたくだ。でもよ、」といつて…

遊園地じゃねえかあ！」

キッドの言つ通り、彼らが今いるのは広大な遊園地の中だった。あの塔の中に、こんな所があつたのかと驚いてしまつような広さだ。

みんなが落ちたのは、園内にある大きな池の中。キッドと王ドラもここに落ち、這い出て自分たちのいる場所にびっくりしているところへ、しんのすけたちが落ちてきたというわけであった。

「でも何でドア開けたら、床に穴開いたんだろ?」

「多分そういう仕掛けだつたんだよ。罠なんだ。僕たちをここへ、おびき寄せるための。」

首をかしげているしんのすけに、トオルが説明している。

「恐らくトオルくんの言つ通りでしょうね…敵は我々をハメて、ここへ連れてきたのです。でも、何のために?」

王ドラの顔もまた、疑問符でいっぱいという感じになつてゐる。他

のメンバーは考え込み、黙り込んでしまった。こんな所へ連れてきて、一体何を考えているのだ？かえつて不気味に感じられてくる。

「あー、分かつた！」

「…ドーラリー＝ヨ？何は分かつたであーるか？」

ドーラリー＝ヨは常に変わらぬ二コ二コ顔で、みんなに自分の考えを述べた。

「あのね、あんまりマタドーラが落ち込んでるから、敵の人気が心配になっちゃったんだ。それできつと、ここで遊んで元気出せるようにな……」

「絶対違う。」

ドーラリー＝ヨの究極に楽観的な考察に、ドリエもんズのみならず、野原一家とトオルとシロまでもが断固否定の意志を表明した。

「そんなお氣楽に考えないで下さい、ドーラリー＝ヨ。」

「そうだぞ。敵は十中八九、俺たちを破壊するつもりだ。そんな親切心を見せてくれるわけないだろ。きっとここにも何か、危険な罠が…」

『よく分かつたね。』

突然空から降ってきた声に、一同は仰天して振り仰いだ。

ちょうど真上、地上3メートルぐらの高さで、マイクみたいなのがふわふわ浮いていた。

「何だありや、マイクか！？」

マタドーラの声に答えるかのように、再びそのマイクみたいの中から声が響いてきた。遊園地中に響き渡るような、大きく増幅された声だった。

『ここには吸血鬼四天王と、その仲間の人たちがいっぱいいるよ。それに遊具の一つ一つには、恐ろしい仕掛けが施してある……命が惜しかったら、乗らないことだね。でもまあ、乗らなくたって僕たちが始末しちゃうけど』

「んだとお、てめえ！」

いきり立つたキッドが怒鳴った。もし空気砲があれば、ためらわず撃つていただろう。マイクからの声には、明らかに軽蔑の感情が含まれていた。

一方王ドラは、全然別のことを考えていた。この声、本物の声じゃないな。妙に電子チックだ。すると、やはり野原さんたちやトオルくんの、よく知っている人物なんだろ？

『じゃ、そろそろお話を終わりにしよう。せいぜい頑張ってね』

最後にバカにするような笑い声を残し、マイクは空を飛んであつといつ間に消えてしまった。

「畜生！バカにしやがって……」

「まったくだぜ！――」

怒りっぽいキッドとマタドーラが、顔を真っ赤にしている。ドラー
コフも珍しく腹を立てたのか、さつきからマフラーの下でうなり声
を上げている。一方、王ドーラとドラメットは冷静だった。

「これは遊んでいる場合などではありませんね。宣戦布告を受けた
以上は……」

「命がけで闘うしかないであーるな。」

「そーだそーだ！闘おうぜ！」

「田にもの見せてやる！－！」

「ワウー！－！」

「わ、私たちも協力するわ！－！」

「おう！できる限りでな！－！」

「オラもおケツを貸すゾ！－！」

「それを言つなら『手を貸す』－！」

「お？いつからそーなつたの？」

全員が来たるべき闘いに、それぞれの闘志を激しく燃やし始めてい
た。その様子を、くすくす笑いながら眺めていたトオルだが……。

ふと、おかしなことに気がついた。

「あれ？」

「ドーラリーーー！」だけが、みんなの輪に加わらず、ぼーっと遊園地の方を眺めているのだ。

「ドーラリーーー！さん？どうしたしたんですか。」

近寄り話しかけると、ドーラリーーー！はゆっくりとトオルの方へ顔を向けた。あ、この人瞳孔開いてるとトオルが思った瞬間…。

「いやああああああああああああああー！」
「わあわわわわーー！」

ドリニーー|弐の爆発するような絶叫。トオルもつられて叫んだ。
何?何があったの!?

「ドリニーー弐?」

ドリメシットたちも、怪訝そうにけらを見た。するとトオルが固まつている周囲で、ドリニーー弐がぐるぐる走り回り始めた。そのスピードときたら……チーターもびっくりして降参するだろうといつぱいものだったのである。トオルは自分の周りを回っていた。黄緑色の帯しか視認できなかつた。

「おこつ、ドリニーー弐、どうしたんだ!」

キッドが叫ぶが、ドリニーー弐が余りにも速過ぎて近寄れない。そして走り続けるドリニーー弐は、ずりつと同じことを叫び続けていた。

「やだやだやだやだやだやだやだ……」

「?やだ?何が?」

みんなの言葉が聞こえてこないのか、ドリニーー弐はさらに予想外の行動に出た。

ガシッ!

「へ?」

トオルはきよとなつた。いきなり身体をつかまれ、持ち上げられたのだ。

ドリニーー弐だった。

「え…あ、え、えーっ！…？」

もがく暇すらない。トオルを頭上に持ち上げたドラリー＝弣は、今度はぐるぐると円状ではなく、お尻に火でもついたのかと思えるような勢いで、一直線に爆走を開始した。

「うわあ！」

「どうしたであーるか、ドラリー＝弣…！」

爆走の勢いで生まれた風にあおられ、ひっくり返りそうになつたドラメットたちが叫ぶ。それへドラリー＝弣もまた、叫び返して答えた。

「遊園地に来たのに遊ばないなんて、僕やだーっ…！」

「はああ！？」

それつきりだつた。

ドラリー＝弣の姿はあつといつ間に、ジンギス・コースターのある辺りへと、消えてしまつたのである…。

「…よつぽじ遊びたかつたんだな。」

「ああ。」

ドラリー＝弣が水面を走つた時に（ドラえもんズ一の運動神経を誇る彼には、そんな芸当も可能なのだ）巻き上げられた水しぶきを浴び、びしょびしょになつたキッドとマタドーラが言つた。

「風間くん…連れてかれちやつた……」

しんのすけもまた、ほつりと咳いた。

デラリーの思わず暴走に、闘いのことなど、全員の頭の中から吹っ飛んでしまっていたのだつた……。

12・落ちた先には（後書き）

暴走したドライバーヨに、連れて行かれちゃった風間くん。心配するみんなをよそに、次回はいよいよ一人目の四天王が出現！それは誰か、そして今度パワーアップするのは誰か？風間くんたちの運命やいかに！？お楽しみに！…………あと、感想お願ひします。最近全然来ないので、下手くそで読まれてないのかと思えて悲しいです。どんな内容でもいいので。

13・第一四天王（前書き）

風間くんとドーラリー一ヨと離れ離れになってしまったキッズたちの前に、第一四天王が姿を現す！そして嫌われ者のあのキャラも…。最近感想が来ません。寂しいです。読んだら感想、何でもいいのでお願いします！！

「大丈夫でしょうか……」

「まあ平気だる。あいつドーラえもんズ一番の俊足だし、逃げ足は速いだらうからや。」

まだ心配そうな王ドーラを、キッドがなだめている。エル・マタドーラは油断なく、辺りを見回しているところだった。

「敵…来ないな。」

「ガウー。」

「きつとビリかに隠れ潜んでいるであーる。そして我々が入つてきたら、一拳に飛びかかつてくるつもりであーるよ。」

ドーラー口ワヒドラメットが、マタドーラの眩きに答へる。一方みさえは、嫌な感じをぬぐい切れないようだつた。

「なんて不気味な…静か過ぎるわ。」

「…でもそれでいて、何もないってわけじゃないんだよな。」

ひろしが続けて言つ。しんのすけはトオルの行方が気になるらしく、さつきからドーラリー一回の走つていった方向を振り返つてばかりだ。「確かにオレも、この感じはなんかやだな。どうせ鬪うんならさしさと鬪いたいぜ。」

「オレも……あー、でもなんか、腹減つてきた。」

「あ……オレもだ。ちきしょー、ドラ焼き食いてーぜ。」

「ダメですよー。ドラ焼きなんか呑気に食べててる場合じやないでしょうーー！」

王ドーラが厳しい口調で、キッドとマタドーラをたしなめる。

「ドーラ焼き? ドラ焼き食べるの?」

しんのすけの興味が、少しばかりこっちへ傾いてきたようであつた。「ネ」型ロボットだから、魚とかじゃないの? ていうか、ロボットなのに食べたりするのね。」

みさえも不思議な様子だ。

「そりゃそっさ。オレたちが笑つたり泣いたり、眠つたりできるのと一緒だよ。なんでドラ焼きが好きかは知らねえけど、ネコ型ロボット全般的にそうなつてんだからしじうがねーだろ。」

「ふーん…」

「それより、早く敵のいる所を探そつぜ。ジーもこの雰囲気は気にくわね…………ん？」

ふと、キッドが何かに気づいて立ち止まつた。マタドーラも同じであつた。

そして一人で顔を見合せると、申し合せたように走り出した。

「ここが怪しい気がするぜ！」

二人が向かう先には……。

『レストラン』の看板がついた店があつた。

「こ、こら！ 一人ともご飯食べたいだけじょーうがーー！」

王ドーラが叫び、取り残された一同も後に続く。キッドたちに遅れるひと一拍おいて、みんなは店の中に足を踏み入れた。

そして、びっくりした。

「よく、分かつたね。」

中には本当に、誰かがいたのである。
しかもしんのすけたちを驚かしたのは、それだけではなかつた。そこで待つっていたのが、よく知つている人物だつたからだ。そ

「ボーちゃん！」

鼻水を垂らし、無表情の顔でこちらを見つめている少年に、しんの

すけが叫んだ。返事はなかつたが、ボーチャンの視線が少しだけ動き、しんのすけを真正面から見た。

しかしこのことは、キッドとマタドーラにひとつ予想外のことだつたらしい。

「本当にいたよ……」

がつくりしている一人に、

「よかったです、一人とも。」

冷たく言った王ドーラであつた……。

「わーい！ボート楽しいねえ！！」

「うん…」

トオルは曖昧にうなずいた。

もちろん一緒にボートに乗っているのは、ドラリー一彌だ。
彼はさつきから、幼い子供のように大はしゃぎで、手を伸ばして水面に触れたりしている。落ちやしないかと内心ひやひるものだったが、さつき水の上を走つたりしていたし、まあ大丈夫かも知れない。それより心配なのは、さつきマイクがしゃべった言葉の内容だった。ここに遊具には、何か恐ろしい仕掛けが施されている。

今のところは、このボートに異常はない。時々大きく揺れるが、それはドラリー一彌が狭い船内を、あちこち動き回るからだろう。ドラリー一彌の楽しそうな様子を眺めていると、その姿にしんのすけの面影が突然重なり、トオルは驚いた。

でも考えてみれば、二人は結構似ているかも知れない。両方色々な意味で幼稚だし、いつでも元気で呑氣で樂觀的だし、次に何をするのか、まるで予想がつかないという点でも同じだ。

(王ドラさんたちも大変なんだろうな……特にドラメットさんは、お父さんみたいに世話を焼いてるし。)

そう考へると、トオルは思わずくすつと笑つた。僕たちがしんのすけに振り回されているよつなもんじゃないか…。

「あー見て見てトオル、魚がいるよ…！」

ドラリー一彌がまた歎声を上げた。敵や闘いのことなど、完全に忘れ切っている口調だった。

白鳥型のボートがまた、がくんと大きく揺れた。

「お前もしんのすけたちの友達なのか……それにしても変な名前だな、ボーつて。まあぴたりだけどよ。」

キッドがボーちゃんの姿を上から下まで眺めながら、言った。マタドーラが続ける。

「もしかして、お前が四天王なのか？」

今度は反応があった。ボーちゃんが相変わらず無言のままで、ゆつくりとうなずいてみせたのだ。

ドラえもんズの五人は、すぐに野原一家をかばうつな位置に移動した。

「また子供か…………まあ仕方がねえ。さつきのやつみたいに、お前にも手下か何かがいるのか？」

ボーちゃんが何かするより早く、店の奥から人影が一つ、ゆうりと現れた。両方大人の大きさだ。

「その通り」

人影の片方が、若い男の声で言った。キッドたちが思わず身構える。

「僕たちは、ボー様の忠実な部下…

「ね、ミッキー」「
「そうよ、よしりーん」

「な、なにい！？よしりん&ミッキー？」

ひろしが驚愕の声を上げた。まさかこんな所で、こいつらに出てくるとは……。

二人は新婚カップル……それもいわゆるバカップルで、いつもその過剰なラブラブぶりに、迷惑がられている。特に野原一家はその近所なので、たまにずうずうしく上がり込んでくることすらあるこの夫婦を、相当うざったく思っていた。

キッドも熱烈に抱き合っている一人を見て、同じ印象を抱いたらし
い。

「な、なんだこいつら、うつとおしい……」

呆れ返つた声で、咳く。

「うつとおしいとは何よ！私たちは百年に一度、いえ、千年に一度現れるか現れないかのベストカップルよつ！！」

「そうさ！そして、僕たちのラブラブパワーのために、野原さん、あなたたちは敗れるんですよ！…」

「私たちの愛の力の前に！」

「適うものはないっ！」

「ね、よしつん」

「ねーつ、ミツチー」

「……」

しらーっとした空気が、その場に流れた。

「なんだこいつら、バカか。」

「ええ、バカなのよ。」

マタドーラの言葉に、呆れ顔でうなづくみやえ。
こうじつラブリープリズーンに弱い王ドーラは、困った顔で皿をそらして
いる。

「……」

さつきからずつと黙っていたボーカちゃんが、ふとこのをじやじや
り出したのはその時であった。

「一何か来るであーるぞーーー！」

一番先に気づいたドラメットが叫ぶと同時に、ボーカちゃんが手榴弾
を取り出し、ピンを抜いた。

「何い、手榴弾！？ そんなのありかよーーー！」

マタドーラが慌ててヒラリマントを構えようとしたが、もつ遅かつ
た。ボーカちゃんの手から、手榴弾が投げつけられる。

ドカアーン！

「…へ？」

キッズたちは、一様にぽかんとなつた。

なぜなら手榴弾を投げつけられたのが、自分たちではなかつたから

だ。

「ギャーッ！」

爆破されたよしりん＆ニッキーは、5メートルぐらい吹っ飛んで壁に穴を開け、瓦礫に埋もれたまま気絶してしまった。

「……お前、何で味方を？ 手下じゃなかつたのか？」

マタドーラの問いに、ボーちゃんは一人が倒れている方を見ようとせず、いつもゆづくらした口調で言つた。

「この二人、僕の、部下じゃない。僕には、部下とかは、いない。勝手についてきた、だけ。」

やつぱりそうだったのか……ひるひとみさえは納得した。

「うつとおしいから、ちょっと、黙つてもらつた。」

「いや、黙つてもらつたつて……これはやり過ぎじゃないですか？」

「いいのよ。」

「いいの！？」

野原一家まで冷めた調子なので、ドラえもんズはびっくりした。よっぽど嫌われているようだ。 確かにうざかつたけど。

「ま、まあとにかく、お前も四天王の一人なんだな？」

「ボー……僕は、第一四天王。今から、君たち口ボットを、破壊してあげる。」

ボーちゃんはそう言つと、今までにない鋭い目でこちらを見た。急に彼が別人になつたような気がして、しんのすけたちは一歩後ずさりした。

「第一つてことは……多分さつきのあいよりは強いんだよな？」

「そうですね……で、次は誰が行きます？」

「我が輩が行くであーる。」

真っ先に名乗りを上げたドラメットを、みんな驚いて振り返った。こういう闘いに、自分から進んで参加したがるような性格ではないのだ。

「ドラメット……」

「お願いであーる。我が輩一人にやらせてほしいであーる。」
ドラメットの声には、懇願するような口調すら混じっていた。

「…………分かつた。」

キッドが気押された形になり、一歩退いた。王ドラが一言、ドラメットの耳元に囁く。

「ドラメットのことですから、大丈夫とは思いますが、…………くれぐれも、無茶をしないで下さいね。ドーラー、ヨモギも悲しみます。」

その言葉に、ドラメットは『大丈夫』とでも言つようになつて、笑みを返すと、ゆっくりとボーちゃんの前に進み出た。

「さあ、我が輩がお主の相手になるであーるよー。」

「ねえねえトオル、次はジェットコースターに乗ろうよ。」

「ええーっ！僕そういうの、あまり好きじゃないんです。」

「んもー、しょーがないなー…それにトオル、敬語なんか使わなくていいよ。僕のことも、ドーラリーーーって呼び捨てにしていいからさー。」

「そ、そつ…じゃ、ドーラリーーー。ジエットコースターよつ、あの観覧車に乗つてみない?」

「えー? ゆっくり過ぎてつまんないよお~。」

にぎやかにおしゃべりしながら歩いてくる一人を、ジエットコースターの高い骨組みの上に座つてじつと見つめている少女がいた。黒い服で身体を覆つたその少女は、顔に寂しげな笑みを浮かべ、やがてゆきりと立ち上がった。

そして一瞬のうちに、少女の姿は消え失せていった。

13・第一四天王（後書き）

ドラメット対ボーチャン…」の闘いの行方は？そして春氣に遊びドラリー＝ヨたちを見守る少女の正体は……。次回はドラメットが注目（？）のパワーアップ！絶対読んでね

14・ドラメッドvsボーチャン(前書き)

いやーも銀しんに続いて、久しぶりの更新です。ドラメッドの大活躍が見れるかも!?

トオルはもう疲れ切っていた。

「ねえねえ、次は何に乗るっか！」

ドラリーエヨは、どこからその活力が湧いてくるのやら、元気いっぱいであつた。既にジェットコースター三つを含め、十近くの遊具を乗り回して いるのにもかかわらずだ。

トオルが唯一ゆつたりできたのは観覧車だけだが、そのすぐ後にジエットコースターに引っ張つていかれたので、残念ながら意味なしになってしまった。

「ドラリーエヨ…もうジエットコースターとかコーヒーカップとか、そういうつきついのはやめにしない？」

「えー、何でえ？」

無邪気に聞き返すドラリーエヨ。その視線はもう面白そうなアトラクションを求めてさまよっている。

「だつて、もう僕…」

「あつ！」

突然ドラリーエヨが大声を上げたので、トオルは飛び上がった。

「ど、どうしたの？」

「大変だ…僕、忘れてた！」

「…何を。」

トオルはせしづめいへ一緒にいるドリマー、ドリマー＝四がひどく忘れた
ぼつだとこいつとそれをやせられたん思って知られていたので、用心深く訪ねた。

ドリマー＝四は皿を大きく見開いてトオルを見つめ、叫んだ。

「//ドリマを忘れてた……！」

「まつ？ 何？」

ドリマー＝四が答えるよつ早く、トオルの疑問の答えがドリマー＝四のシャツの中から現れた。

トオルは呆気に取られた。手の平に乗るくらいのサイズの、小さな
ネコ型ロボットがぞろぞろ出てきたのだ。一、二、三…十一体。全
員ドリマー＝四と同じ、黄緑色の身体をしてくる。

ミニサイズのネコ型ロボットたちは、ドリマー＝四に向かって怒った
様子で何か言い始めた。トオルにはドリマー＝四にはちゃんと分かるらしい。「あ
聞こえなかつたが、ドリマー＝四にはちゃんと分かるらしい。」「あ
あ、みんな」「めん」「めん。ほんとに」「めんね。」

決まり悪そうに頭をかき、ドリマー＝四はトオルの方を向いた。//
二ドラもまた、一斉にトオルを見上げた。

トオルは自分がぽかんと口を開けているのに気づき、慌てて閉じた。

「ああ、トオル。」

ドリマー＝四は足元に集まつて//ドリマたちを、やつと呪わす
よつな（指はない）のだが）仕草をした。

「僕の//ドラナツカーチームだよ…せり、みんなトオルに挨拶ー。」

「ドラメッシュー何で反撃しないんだー!?」

キッドが空飛ぶじゅうたんの上で、いらただしげに叫んだ。
ドラメッシュは何も答えず、かわりにじゅうたんを急降下させた。ち
ょうどわざわざじゅうたんが舞っていた所を、ボーチャンの放つた衝
撃波が通り過ぎた。

「四天王は皆、特別な力を持つてると聞きましたが、……あの子
の攻撃は、別に他の吸血鬼たちと変わりませんね。」

王ドラが、いつでも攻撃できるようぬんぢゃくをかまえながら首を
かしげた。

「まだ使ってないだけで、隠してるのは知れないだろ。油断する

な、エドリ。」

「へ、ひねりこですね、エル・マタドーラー私は油断なんかしてな……」

ドガン！

「うわー。」

田と鼻の先に衝撃波を発射され、エドリはまつ少しでじゅうたんから転げ落ちそうになつた。

「ほり見ろ、言つただろうが。」

マタドーラはにせつとしだが、悪意のある笑い方ではなかつた。こちらは愛用のヒラコマントをかまえている。

ドランコフはとこうと、じゅうたんの真ん中で縮こまつてゐる野原一家のそばでじゅうとしだした。彼が動くのは、しんのすけが好奇心からじゅうたんの端へ行こうとするのを、止める時だけだつた。ドランコフがなぜ反撃しようとしないのか、みんな不思議で仕方がなかつた。やつきからじゅうたんに乗つて、ボーちゃんの攻撃から逃げ回つてばかりだ。その表情にはなぜか、重苦しいものが浮かんでいた。

「ドランコフ、もつオレは逃げ回るのはめんどだー。やりせんもんぞー！」

たまつたキッドが、取り出した光線銃をじゅうめがけて飛んでくるボーちゃんに向けた。

ドランコフがはつと振り返つた。

「キ、キッド、いかんであーるー。」

だが、キッドはもう呟んでいた。

「行けえー！」

轟音と共に、ビームが発射された。

もとよりキッドは、ボーチャンを殺すつもりなどなかつた。手足を狙つて、動けなくするだけのつもりだつたのだ。

だからビームが当たつた瞬間にボーチャンの身体がぱらぱらになってしまったのを見た時には、愕然となつた。

「バカな…」

マタドーラや王アリラも、呆然としてそれを見つめた。

そこへドリメッドが、今まで出したこともないような大声をかけた。

「みんな、ボーッとしてはいがんであーるーそれはニセモノであーるー！」

「ー？」

みんながはつと身をこわばらせた、まさにその時、上から衝撃波が次々と降ってきた。

「どうこう」とだー

マタドーラが、ヒラリマントで衝撃波をかわしながら叫んだ。

答えのかわりに、どこからともなく数人の人影がするりと現れた。

ボーちゃんだった。

全くそつくり同じ姿をしたボーちゃんが五人、じゅうたんを囲むようにして現れたのだ。

王ドーラは反射的に、野原一家を振り返った。彼らもキッドたりと同じくらい、驚き、おののいた顔をしていた。

「一体ーーー？」

みさえが息を呑み、後ずさる。ドクドクでさえ、不安そうなうな

り声を漏らしてぶるぶるっと身体を震わせた。

ただ一人、ドラメッドだけが冷静な表情で、自分たちを取り囲んでいる五人の『ボーちゃん』を見つめていた。

「……仕方ない。」

ため息をつき、ドラメッドはふとじりから、小さなびんを取り出した。

そして中の液体を、ぐいぐいと飲み干した。

「あーあ、もういいのアトラクション、ほとんど回り切ったよー。」

「ドリーラー！」がちょっと不満そうな口調でそう言った。//ドリーラーがドリーラーと言しながら、その後を歩いていた。色々な乗り物に乗せてもらつた//ドリーラーたちは、すっかり機嫌を直し、興奮気味に何か話している。一方トオルはと言えば、服や髪に潜り込もうとする//ドリーラーたちをひつぺがすのに必死で、とても何かしゃべる餘りではなかつた。

「ねえトオル、あとまだ乗つてないの？ ある？」

「ドリーラー！」がのんびりとトオルを振り返つた。

「へ、そうだねえ…」

トオルはよつやく//ドリーラーを髪の毛から引き離して、息を切らしながら言つた。

「そんなこと、急に言われたって……あ、あれはまだじゃない？」

トオルの指をす方向を、ドラーーー^{ヨリ}ヒラは無邪気な表情で振り返った。しかし次の瞬間、顔があつと青くなつた。

そこには、お化け屋敷だった。

形勢は一挙に逆転していた。

飛んできた衝撃波が跳ね返され、五人のボーちゃんのうちの一人が
よろめく。マタドーラが歓声を上げた。

「すげえぞ、ドリメッシュ三世……

いや、四世!」

例の薬を飲んでパワーアップしたドリメッシュ三世 もとドリマ
ッシュ四世は、さつきまでとは一転、素晴らしい応戦ぶりを見せて
いた。四世はなぜかボーちゃんそつくりの姿をしていたが、もう誰

もそんなことは気にしなかった。

イライラしてきたのか、それとも自分の不利を感じたのか、五人のボーちゃんが一斉に衝撃波を放ってきた。しかし、それが大きな間違いだつた。

ドラメッド四世はすっと手を伸ばし、両手でくるじと円を描くような仕草をした。

その途端、びっくりするようなことが起きた。ドラメッドが手を触れてもいいのに、衝撃波がくるりと向きを変え、五人のボーちゃんそれぞれめがけて襲いかかつたのだ。

あまりの速さに、五人のボーちゃんは恐怖の表情を浮かべる間もなく衝撃波を身に受けた　さつきと同じように、どのボーちゃんの身体もぱらぱらになり、溶けて地面へと落ちていった。

ただ一人を除いては。

德拉メッドの正面にいたボーちゃんは、ばらばらにならず、溶けもしなかつた。空中で、苦しげに身をかがめている。今にもバランスを失つて落下しそうだ。

それを見た德拉メッド四世が、じゅうたんを急発進させた。あまりの速さに、シロのフワフワの毛が逆立つた。じゅうたんが止まつた時には、四世の手が一人残つたボーちゃんを捕まえていた。

「こいつが本物なのか……」

キッドがボーちゃんの顔をのぞき込んだ。ボーちゃんはあきらめたような表情で顔をそらし、目を閉じた。
しんのすけがドラ二コフの制止を振り切り、じゅうたんの端から下をのぞき込んだ。

地面には透明なねばねばしたものが、いっぱいにぶちまけられていた。じゅうたんから飛び降りた王ドラが、その物体に慎重に手を伸ばそうとした。

「おおっ！」

しんのすけが目をまん丸くした。

「それ、ボーちゃんの鼻水だゾ。」

「鼻水！？」

王ドーリーはさきよつとして手を引っ込めた。

「なるほど、自分の鼻水で分身を作る……それがここにこの能力か。」

マタドーラがボーちゃんを見る。

ドラメリッドはしばらくの間、ボーちゃんを見つめていた
て、パワーアップしてから初めて、口をきいた。
そし

「何でお主は、操られたふりをしているのであるか？」

14・ドラマチックボーチャン(後書き)

次回は、ドラマチックが言つた言葉の意味が明らかに……そしてド
ラマーリアと風間くんが、お化け屋敷で大変なことに巻き込まれる
!?

どうぞお楽しみに!

15・迫る危機（前書き）

ドラマチックの言葉の意味が明らかに……そして、あの彼女（誰だ）
がしんのすけたちの前に姿を現す！また久しぶりの更新になつてしま
いました。すみません……（ - - - ）

その場にいる誰もが、ドラメッドの言葉の意味を理解できずにぽかんとなつた。　　ただ一人、ボーちゃんだけが、青白い顔をさらりと青くした。

「操られた……ふりだつて？」

キッドが人間化したドラメッドの背中に問いかけたが、答えはなかつた。代わりにドラメッドはボーちゃんから手を離し、立ち上がりつじゅうたんの上を行つたり来たりし始めた。

「始めにお主を見た時から、他の子供たちと違つ感じはじはしていたであーる。」

ドラメッドは静かに話し始めた。

「どうしてか、その時は分からなかつたんであるが、戦つているうちに理由がはつきりしてきたのであーる…………お主の顔は、あの時のドラパンのものと同じだと。」

「ドラパン？」

しんのすけ、ひろし、みさえの三人は首をかしげたが、ドラえもんズのメンバーたちははつとなつた。

「ドラパン…………なるほど、そつか…………！」

呴いたキッドを、しんのすけが不満げににらんだ。

「何がなるほど、なの？ちゃんと言つてくれないと分かんないゾ。」

「ああ、それがな……」

キッドたちはドラパンと出会った時のことを、野原一家に話し聞かせた。ドラえもんズの面々をキンキンステッキで銅像に変えてしまい、親友テレカの力を奪おうとしていたフランスの大怪盗・ドラパンだったが、実は彼は人質をとられて無理やり働かされていたのだ。ドラリーニョとドラメッドの活躍によりドラパンはドラえもんズの味方につき、力を合わせて敵を倒したのだった。

「じゃあ何だ、ドラメッド。この子以外の子 も襲つてきた女の子とかは、みんな操られてるつていうのか？」

「それはそうでしょ。それでもなければ友達の田の前で、平然と私たちを殺そうとするはずありませんよ。」

マタドーラの問いに、王ドラが冷静に答える。「そうね…特にあいちゃんなんかはしんのすけにぞつこんだものね。」

「ち、違うぞ！ オラの相手はななこおねいさんだけだゾ！」

しんのすけが、珍しくかなり慌てた様子で叫んだ。みさえの『ぞつこん』という言葉を『結婚』と聞き間違えたらしい。

「でも、この子は違うと言つのですね？」

王ドラはやう問つと、顔をつむぎていいボーカルをじつと見つめた。

「我が輩はそう信じてゐるであーる。」

ドラメッドの声はあくまで静かだった。そこへマタドーラの声が割り込んだ。

「でもよ、はつきりそうだつていう証拠はないじゃねーか。」

「この子は我が輩たちを本気で破壊できるよつた攻撃をしてこなかつたであーる。」

その時初めて、ドラメッドの口元に笑みが浮かんだ。

「しかし、それで不十分と言つたのならば……我が輩に、ちょっとした考え方があるであーる。」

「考え？」

他の面々がそれ以上何も言えないだけに、ドラメッドはふとこゝからまた液体入りの小さなびんを取り出した。同じような形だが、色が違つ。そしてそれを、一息に飲み干した。

ボシュツ！

「あ…………」

王ドリードたちも野原一家もボーちゃんも、みんな狐につままれたような顔になつた。

ドラメッドが、元のネコ型ロボットの姿に戻つていた。

「これで我が輩はもうパワーアップできないであーる。ただのか弱きネコ型ロボットであるよ。今お主が衝撃波を放てば、簡単に倒せるであーる。」

ドラメッドはそう言つて、ボーちゃんの前に無防備な身体を察した。キッドはドラメッドがか弱いとはとても言えないと思つたが、何も言わなかつた。ボーちゃんがどんな反応を示すかどうかの方が気になつたからだ。ボーちゃんの顔は今や真っ白になり、自分の前に立つドラメッドをじつと見つめて、一体何をすればいいのか分からないようだつた。とめどなく震えながら、小さな手を握つたり開いたりしている。そして。

「ハ、殺され、ちゃう。」

ドラえもんズのメンバーは顔を見合せた。王ドラが近づき、ボーチャンの肩をつかんだ。

「やはり、誰か大切な人を人質にとられているのですか？殺されるとはどういうことですか？誰のことです？」

「ボーチャン、オラにも教えてほしいゾ。とにかく『ひとりちぢ』って何？」

しんのすけもやってきた。ボーチャンの顔を、心配そうに覗き込んでいる。この無表情な友達がこんなに心を痛めているところを、しんのすけは見たことがなかった。

ボーチャンはドラメツジを見、王ドラたちを見、しんのすけたちを見た。唇が震えていた。

しかしゃがて、その口がゆっくりと開いた。

グオッ…！

「……ん? 何だあ?」

妙な音が頭上で響いたのを耳にした、マタドーラは向気な顔を上げた。

その瞬間、異常な熱を持った風がマタドーラの前進をなでるようにして吹きすぎた。

「なつー…」

ヒラコマンドを飛ばされそうになり、慌てて持ち直していくつかり、風は通り過ぎてこつてしまつた。ボーカちゃんがこじりこじりと、おつすべ。

突如、ボーカちゃんの身体が燃え上がつた。

みさえが悲鳴を上げた。しんのすけも叫び声を発した。普段滅多に出すことのない、恐怖の叫びだった。ボーカちゃんに飛びつこうとしたが、王ドラに押しのけられた。王ドラも一時は凍りついたものの、さすがにすぐ我に返り、何か役立つ道具はないかと慌てて四次元袖を探つた。

その途端、炎はあつとこつ間に消えた。

煙も立てず、まるで

最初から火など上がらなかつたかのよつて、一瞬で消えてしまったのだ。

「…………てめえ。」

ちよつともの時、キッドは誰かが上空からひかりを見つめにこねる」といふつき、息を呑んだ。

「誰だー。」

威勢よく上へ怒鳴つたマタギーラが、しかしすぐ驚いたよつな表情になつて後ずさる。

しんのすけやボーカちゃんと同じ年ぐらこの女の子が、地上5メートルぐらいの空中に浮かんで、こちらをじっと見下ろしていた。全身真っ黒な服装で、服の黒と明るい茶色の髪の毛が見事なまでに反発し合つてゐる。明るい笑顔が似合つてうな、可愛い顔立ちだとマタギーは思った。しかし冷たい無表情さが、少女の可愛らしさをほとんび奪つていた。

みさえとひのしさ、少女の姿を認めるときを丸くした。

「ネネちやん……」

みさえの言葉に、キッドは振り返った。

「この子もお前らの知り合いなのか？」

「ああ、しんのすけの友達だ。」

ひろしが答えた。しかし、当のしんのすけはネネの出現に気づくどころではなかつた。王ドラと一緒にボーチャンの傍らに座り込み、真つ青な顔をしていた。炎が燃えていたのは一瞬のことだったとはいえ、ボーチャンに何らかの悪い影響を及ぼしたらしく、ボーチャンは白い顔で氣を失つていた。王ドラは医者志望としての本領を發揮し、自分専用の『お医者さんカバン』で既に治療にかかっていた。ネネはちらつと冷ややかな目でどちらを見やつただけで、すぐにキッドたちの方へ視線を戻した。

「お前か……あの鼻水を攻撃したのは。」

「ええ、そうよ。」

キッドの問いかに、ネネは顔と同じくらい無表情な声で答えた。その声を耳にして、しんのすけはよつやく顔を上げ、ネネの存在に気がついた。

しんのすけの顔に、純粹な驚きが浮かんだ。

「ネネ、ちゃん…？」

「あら」「んにちは、しんのすけくん。」

しんのすけが殴られたように身を引いた。

「ネネちゃん、いつもオラの「じんちゃん」と呼んでたのに。」

「

「やつだつた？まあやつでもいいわ、そんなこと。」

本当にどうでもよさそうな口調だつた。キッドは怒鳴りたくなる衝動を必死でこらえた。この子はドラメッドが言つたよつこ、操られているんだ。誰が操つているんだか知らないが、とにかく操られてるからあんなことが言えるんだ。それだけのことだ。

しかし、黙つてられない者もいた。

「ガウウーーガウーー！」

みんなびっくりして、うなり声の聞こえてきた方を向いた。普段何も言わないドラーーロフが、ネネに向かつて怒りをむき出しにして、マフラーの下から吠えていた。

ネネは一顧だにせず、一層冷えた田つきでドラーーロフをにらんだ。
「あら、何かしら？ あんたたちが何か知らないけど、あんたみたいに赤の他人のタヌキにくちばし突っ込まれるのってすごい迷惑なのよね。分かってるの？」

「ここに至つて、キッドももう我慢できなくなつた。

「ふざけんな！ 僕たちは永遠に輝く友情を約束した、ザ・ドラえもんズなんだよ！ なめてんじゃねえ！」

キッドは相手が言い返す間を『えない』よう、ぶちまけるように一気に言つてのけた。

「それにタヌキじやなくてネコ型ロボットだ！」
マタドーラはそう付け加えるのを忘れなかつた。

しかし、ネネはさりに冷ややかな笑みを浮かべただけだつた。魂か

ら暖かさが全て抜き取られたような、ぞつとする笑みだった。

「ずいぶんと大口叩くのね……そんなバカなことを言つてゐる間に
も、あんたの友達の一人が死にかかるつていうの!」

「な、何ですつて!?」

王ドラがさすがにぎょっとして顔を上げた。ネネの笑みがさうし冷
たくなつた。

「そうよ。今頃あたしが送り込んだ四天王の一人にいたぶられて、
わざわざ恐ろしい思いをしてるでしょうね……

風間くんも、一緒に。」

確かに、ドライバーは相当地恐ろしい思いをしていた。

一方で風間トオルは、恐ろしこじるかあきれ果てていた。

「トオルううう！」

「何？」

トオルはいい加減アホらしい、とつまらぬ持ちが見え見えの口調で言い返した。

「あそこに何かいる！あの石の後ろ！…」

「ああ、あの幽霊？ただ見てるだけで飛びかかってきやしないから、大丈夫だよ。」

それにもしても、ドラリーニョがお化け嫌いだということはトオルには意外だった。いや、そりやあお化けが大好きなんていう人はなかなかいないだろうが、純真素朴なドラリーニョだけに、何でもにこにこ笑つてやり過ごしていけるのかと思っていたからだ。

（…まあ、一つぐらじ弱いところがある方が、かわいげがあるしな。）

トオルはそう思つて、ちょっと笑つた。ドラリーニョのお化け嫌いは、少なくともトオルにとつては実際的に役に立つた。もつこれ以外は乗っちゃつたからと渋々入ることを承諾したドラリーニョとミニドラたちだつたが、さつきのように何か見つけるために大騒ぎしてくれるので、トオルはそれをなだめるのに忙しく、怖がる暇が全くなかつたのだ。しまいには、何だ、お化け屋敷なんか大して怖くないやと悟つてしまつたトオルであつた。

しかし、そのトオルも気づいていないことが一つあった。 お化け屋敷に入った時からずっと、一つの人影が音もなく後をつけてきていたことに。

その人影は小さかった。トオルと対して変わらない。なぜか足音を全く立てず、つかず離れずといった感じで、彼はトオルとドラリー一ヨについて歩いていた。

ドラリー一ヨが突然、ここに入つて初めての喜びの叫びを上げた。
ミニドラも一緒に、興奮してわいわい騒いだ。前方に光が見えたのだ……外への出口だ！

ドラリー一ヨはミニドラをみんなポケットに集めると、走り出した。トオルも何か言いながら、その後を追つた。

ずっと後を追つてきた人影が、ようやく音を漏らした。
くすりと笑う声だった。

人影はすうっと手を伸ばすと、指をまるでピストルごっこをする時のように、親指と人差し指を伸ばしてあとは折り曲げた。

すると 人差し指の先に、小さな光の塊が現れ、音もなく、キュルキュルと高速に回転し始めた。

「…そこまでだよ、黄緑のタヌキくん。」

静かな声でそう漏らすと、人影は手をさっと動かした。ちゅうび、銃を撃つた時のよう。

赤い光の弾丸が、ドラリー一弾めがけて一直線に飛んだ。

ドラリー一弾はちょっとよろけて壁にぶつかったが、気づいた様子はない。人影は、成功を確信して身震いした。

ドラリー一弾とトオルが消えたのは、まさにその瞬間だった。

人影は一瞬、凍りついたように立ち去った。しかしすぐに怒りの叫びを上げ、さっきまでドーラリーニョとトオルのいた所へ駆け寄った。そんなはずはない。何の気配も見せず跡形もなく消えるなんて、そんな……。

しかし、そこには冷たく堅い床があるばかりだった。

一人は消えてしまっていた。

15・迫る危機（後書き）

ドラリーー曰ヒトオルが消えたわけは、次回明らかになります！
……ところで、最近この小説への感想が全く来ません。正直悲しい
です（／＼・）読み終わったらどんなに短くても結構ですので、感
想をお寄せください。お願いします（――）あとメッセージ
を下さったキッド大好きさん、どうもありがとうございました！！

16 ドラゴンの大活躍（前書き）

今回はドリームがパワーアップを果たしますー。どうぞお楽しみに

16・ドラゴンの大活躍

「……………？」

トオルは呆然として、自分たちがいる所を見回していた。

僕たちはついわざとまで、お化け屋敷の中にいたはずじゃないか。
それなのに…………。

トオルとドラゴンは、一面の花畠の中に立っていたのだ。

「うわあ～、きれいだねえ。」

ドラゴンは嬉しそうに笑いながら、きょろきょろしている。どうやらわざとまでお化け屋敷にいたことを忘れているらしく。

（ええっと、僕たちは…………お化け屋敷の出口を見つけて…………それで、いきなり…………）

トオルは頭をフル回転させて、自分たちが置かれている状況に至つた説明を、何とかつけようとしていた。

その間に、ドラリー＝ヨは走り出してしまっていた。

「わーい、お花畠だあ！」

「あっ、ちょっと……ちょっと待って、ドラリー＝ヨ！」

トオルは慌ててドラリー＝ヨを追いかけた。こんな得体の知れない所で、一人きりになんかなりたくないっ！

それに対して、なんて強烈な花の香りだらう。

不意に足ががくんとなり、トオルはよろめいた。

「…………え？」

身体に、力が入らない。花の香りが鼻から全身に染み渡っていくような気がした。 それにつれて、視界に白い霧がかかり始めた。

「アーリー、ミー、ミー！」

トオルは、白い闇の中へと沈んでいった。

急に後ろから呼ばれた気がして、ドラリー＝ニアは走るのをやめた。何気なく振り返つてみて、田を見開いた。

「トオルッ！？」

トオルの身体が、ゆっくりと花の中につづもれていいくじらだつた。

「トオル！トオル！！」

駆け寄つて抱き起こすと、トオルのぐつたりとした重みが腕にかかり始めた。なんと、ぐつすり眠つている。

「あれえ、どうして……？」

ドラリー＝ニアは首をかしげたが、大して深く考えずにトオルの身体に腕を回すと、ひょいと抱え上げた。

「んもー、仕方ないなあ、そんじゃ、行こー行こーーー！」

誰に言つともなしにそう叫ぶと、ドラリー＝ニアはトオルを抱えたまま、再び猛烈ダッシュを開始した。

うなりを上げて、火の玉が一直線に飛んできた。

「よけるー。」

キッドが叫ぶまでもなく、王ドラたちは素早く散つて巨大な炎の玉を回避したが、火の玉が地面に激突した振動で空気がぶるぶる震え、火の粉がヒゲや服を焦がす匂いがした。

「くそ…………なんて奴だ…………」

マタドーラが歯噛みして、上空から自分たちに氷のようなまなざしを向けるネネを見上げた。

闘いは、明らかにネネの方が優勢だった。空から火の玉を自在に飛ばしたり、目を向けただけで火を点けたりするような奴が相手では、うまく闘いようがない。「こちらの攻撃は」とくわされ、相殺された。

「ガル…………」

ドラ二コフは、四次元マフラーから丸い容器に入れた唐辛子ジュークスを出そうとして、ふと思いとどまつた。狼化した自分の火炎放射も、相手に相殺されてしまうかも知れない。いや、きっとそれでしまうだろう。

ドラー・コフは、必死に闘い続ける仲間たちをじつと見つめた。それから、後ろで縮こまる野原一家に目をやつた。ボーチさんは地面に倒れまま、まだ意識を取り戻していない。

それで、心が決まった。

ドラー・コフは四次元マフラーから、透明な薬の入ったびんを一つ、取り出した。

王ジラは不意に、炎の熱の中にひんやりとした空気を感じた。

反射的にしゃらへ首をねじつた王ジラは、驚きの叫びをもらした。

「な、何なんですか、あなたは…？」

王ジラの声に振り向いたキッドたちも、一様にぽかんとした顔になつた。ネネもそうだったのだろう。攻撃が止まつてしまつた。

そこにいたのは、分厚い冬服をまとった少女だった。何よりも驚くべきことに、ネネとそっくりの顔立ちと髪をしている。みんなの視線を受けても、まるで反応する様子がなかつた。

呆然と見つめていたキッドは、少女が赤いロシア帽をかぶり、青いマフラーをしていることに気づいた。

「……………ドリードリカ?…………」

かすれた声でそう尋ねると、ロシア風の衣装に身を包んだ少女はかすかに口をほじろばせ、こくんとうなずいてみせた。

ドリードリカが、あの薬を飲んだのだ。そして、パワーアップしたのだ。

「 何なの、そいつは。」

上から声がした。ネネが目を細めて、変貌したドワーフをじらんでいる。

それを見たキッドは、慌てて警告の叫びを発した。

「ドワーフ、逃げる！ 火が……！」

ドワーフは、逃げなかつた。ほとんど動くことすらしなかつた。ただ、右手をすっと前に出しただけで。

キーン！

金属と金属がかち合つたかのよつた、甲高い音が響いた。

ネネが目を見開き、ドワーフを見つめた。いつの間にか、ドワーフの手に大きな爪が装着されていたのだ。透明で、ひやりとした冷氣をまとつた、氷の爪だ。

ドワーフが、氷の爪を頭上に振りかぶつた。たちまち爪がすごいスピードで伸びて、ネネに襲いかかつた。ネネが歯を食いしばり、

火の玉や熱気を飛ばして攻撃を相殺していく。しかし、爪は見る間に再生して、四方八方から器用にネネに襲いかかるのだった。

金属が激しくすつ合いつ時のよつた、耳障りな音がそちら中に響きわたりを押さえていた）、身を縮めた。今やドライコフはどうやって爪を動かしているのかも、ネネがどんなふうに反撃しているのかも、肉眼では全く分からぬ。もはや自分たちが闇に入る余地がないことを、その場にいる全員がまざまざと思い知らされていた。

「これじゃ、ダメだ……。

ドライコフは、やや顔をしかめた。

ドライコフはパワーアップしてからも、自分の意識をしっかりと保っていた。王ドライやマタドーラの時は、ずいぶんと違う。 そ

の理由を、ドクターハフはドラメッドにひそかに聞かされていた。

実は、我が輩の作った秘薬の「ひまわり」は、まだやや未完成だったのである。

ドラメッドは王族たちに聞こえないよう注意しながら、ばつが悪そうに打ち明けた。

それを飲んだ時は、強大な力を手に入れることができた」とはできるのであるが………本来の自分を、失ってしまうのである。たまたま王族とマタドーラー、それが当たってしまったところだけだ。

悪いが王族たちには、そのことは内緒にしておいてほしいである……。

そつまつとうなだれるドラメッドに、心優しいドクターハフは無言でうなずいてみせたのだった。

ギイィィイン！

ドラー・コフは、爪の先端が少し欠けているのを見た。ひびが入り始めていることにも気づいていた。

このままでは……いずれは、負けてしまう。

このままでは。

ドラー・コフとネネは、今や氷の爪と熱波で押し合っていた。
と、ドラー・コフが不意に、氷の爪を消した。

ネネは空中でバランスを失いかけ、大きくよろめいた。

その隙に大きく飛びすさつて、ドラー・コフは四次元マフラーの中から、唐辛子ジュースが入った丸い容器を取り出した。

唐辛子ジュースを一気に飲み干し、まん丸の容器をじっと見つめる。

全身に、力がわき上がってきた。

キッドはすぐ、ドラニコフの変化に気づいた。

髪の毛が逆立ち、茶色い毛に覆われた耳が立ち上がった。目が銀色に輝く。口の端から牙が覗き、爪はより鋭く、長くなつた。いつの間にかふさふさした尻尾が現れている。いつものドラニコフの穏やかな風貌が、消え去つていた。

ドラニコフが、かあと口を開いた。

ものすゞい炎が、ネネめがけて一直線に襲いかかった。ネネは慌てたように火の玉を飛ばしたが、炎の勢いに負け、思い切り吹つ飛ばされた。

そこへ容赦なく、ドランコフの氷の爪が襲いかかっていった。

「…………あれえ？ 僕何でここにいるんだつナ？」

「…………德拉リー、アサヒのとひの、自分でなぜ一面の花畠の中にあるのか忘れていた。

「トオルは寝ちゃつてゐるし…………」

わざわざからだいぶ揺らされてくるはずなのに、トオルは一向に目を覚ます気配がなかった。それどころか、ますます寝息が深くなっているようだ。

「困ったなあ～…………」

言葉とは裏腹に超脳天気な口調で呟きながら、果てない花畠の中を歩いていた德拉リー、アサヒは、ふとあるものを発見して、思わず立ち止まつた。

色とりどりの美しい花々の間に、黒いものが倒れている。全く動いていないが、形から判断すると、どうやら人間の、しかも子供のようだ。

ドリューはまだ無意識のうちに、そちらへ駆け寄った。

ドリューの直感は、当たっていた。花の間にしづく伏せに倒れていたのは、黒く長い服を身にまとい、フードをかぶった子供だった。背の高さから見ると、トオルと似て変わらない年らしい。このままでは顔が見えないので、ドリューは子供の身体を、ぐるっと仰向けてみた。

女の子だ。明るい表情が似合ひそうなくらいらしい顔立ちをしている。でも今は、トオルと同じようにぐっすり眠つており、しかもその顔は青白くやつれているように見えた。さすがのドランリーーも、この子をこのままにしておいたら危ないなということは理解できた。

そうだ、王ドリの所へ連れて行こう。王ドリならきっと、この子とトオルを起こしてくれる。この女の子のことも、何とかしてくれること

しかし、ここで高い障害が頭をもたげてきた。

「…………どうしてここから出たりここのかなあ？」

辺りは見渡す限り、花、花、花。漂つてくる甘い香りで、頭がぼうつとしてしまいそうながらいだ。終わりも出口も、どこにも見えない。

どうやって出ればいいんだろう？

ドラリーニョが彼なりに必死に頭を回転させ始めた時、それをじつと見守っている人影があった。

その人物は、どこか暗い一室の中に設置されたモニター画面を通して、さつきからずつとドライバー一ヨたちの様子を見ていたのだ。

まじめ」しているドリフターの姿を見つめながら、その誰かはむづつとため息をついた。

「やれやれ、あんな忘れっぽいおバカ口ボットとは思わなかつた……でもまあ、あの女の子を見つけてくれたみたいだし、これでやつと帰せるわね。」

そう言って、その人物はすっと右手を上げると、パチンと指を鳴らした。

画面の中のドーラー、ヨタたちの姿が、一瞬にしてかき消えた。
ちょうど、お化け屋敷の時と同じよつこ。

「…………あれれえ！？」

ドリューは田をまん丸くして立ち廻った。

一面に広がっていた花畠が一瞬にして消え、気がつくとお化け屋敷の出口の前に立っていたのだ。足元を見下ろしてみると、トオルと、さつき発見した少女が折り重なるようにして地面に身を投げ出している。どうやらまだ眠っているようだった。

ドリューたちは、花畠に来た時のように唐突に、遊園地の中へ戻ってきていたのだった。

「ええ～！？何で何でえ？」

ドラリー＝ヨは混乱して叫んだが、当然答える声はない。わけの分からなことが多くて、頭が痛くなりそうだった。

その時突然、ドラリー＝ヨの氣をそらすようなことが起った。

突然上空で轟音が響きわたつた。顔を上げてきょろきょろ見回しているうちに、ドラリー＝ヨは何か黒っぽいものが煙を上げながら、地面に落ちていぐのを見た。

考えるよりも先に、身体が動いた。トオルと女の子をさつと背負つようにして抱きかかると、ドラリー＝ヨは走り出した。黒いものが落ちていった方向へと、まっすぐに。それが地面に墜落したのか、微かな衝撃が伝わってきた。

地面に落ちた『それ』が起き上がるとするのと、ドラリー＝ヨが駆けつけるのとがほぼ同時だった。

「大丈夫？」

ドーラリー＝ミーに声をかけられた途端、そいつはやつと顔を上げてこちらを見た。黒い服を身にまとつており、明るい茶色の髪に青白い肌をした女の子だ。見事なまでに無表情だったが、唇からほとんど血の気が失せ、かなり荒い息をしていた。服からは焦げくさい匂いがしている。

少女はあからさまな敵意のこもつた目つきでドーラリー＝ミーをにらみつけていたが、ドーラリー＝ミーはそんなことには全く気づかずと言葉を続けた。

「何でお空から落ちてきたの？……あ。」

ドーラリー＝ミーはふと、少女の肩を押さえていることに目をとめた。

「怪我したの？」

少女の目の中の敵意が揺らいだ。ドーラリー＝ミーの態度が意外だったのかも知れないし、本心から心配そうな言葉が心に響いたからかも知れない。少女は目をそらし、いきなりやつと立ち上がった。

「…………どうしてちょうどいい。」

ドーラリー＝ミーはちゅうと首をかしげたが、素直に脇にどいた。

少女はドリュー・ワーズを通り過ぎていく時に、彼が背負っている一人の子供にちらりと目を走らせた。

その瞬間に少女の顔をよぎった驚愕の表情で、ドリュー・ワーズは気づかなかつた。

「何なんだろ、あの子……変なのが。」

少女が歩き去っていく後ろ姿を眺めながら、ドリューは呟いた。

それにあの子、何だか誰かとそっくりな顔してた気がするわ。誰だ
わ？

しかし結局、ドリューはそれ以上思考を巡らすことはなかつた。
ずっと向こうの方に、見慣れた赤や黄色やオレンジや紫や茶
色の、丸っこい姿が見えてきたからだ。

「みんなーー！」

ドリューは歓声を上げて、走り出した。

16・ドラゴンの大活躍（後書き）

やつとみんなと会つことができたドラゴン。しかし再会を喜ぶ間もなく、驚愕の新事実が露見し、さらに次なる敵が現れる！そして次にパワーアップするのは……？お楽しみに！

17 ポーちゃんの話（前書き）

意外な真実が明らかに……。そして今回の事件のボスも、ちりつ
とだけ登場！？

17・ボーちゃんの話

「みんなあ～つー。」

キッドは耳を疑つた。この声は……おさか……ー?

「ドーラー＝三一。」

黄緑色のネコ型ロボットが、満面の笑みを浮かべてこちらへ駆け寄つてくるところだった。

「あれえ、みんな、服が焦げてるよ?今まで何してたの?」「それはこっちのセリフですよ……あれ、そこに背負つてこるのは何ですか?」

「あっ、そうそうー。」

ドラリー＝ヨはトオルと、花畠で見つけた少女とをそつと地面に下ろした。一人とも相変わらず目を覚ます気配はない。マタドーラがやつて来て、一人をしげしげと眺めた。「なんだなんだあ?一人ともショスタしてるとのか?」「うーん、分かんない。確か、お花畠を通つてたら……」

ドラリー＝ヨは必死に記憶を呼び起こしながら、これまでのことを語つた。王ドラの顔が厳しくなる。

「ふむ……それはちょっと怪しいですね。」

「何が？」

「花畠がですよ。トオルくんはその花畠に来た途端に、眠り込んでしまったのでしょうか？それに花の香りが強かつたというのも気になります。もしかしたらその香りに、眠気を誘うような成分が含まれていたのでは……。」

「じゃあ、何でドラリー＝ヨは眠くならなかつたんだ？」

キッドが口を挟んだ。

「ドラリー＝ヨは口ボットですからね。もしかしたら生き物にしか効かないのかも知れませんし。とにかく、何とかこの二人を目覚めさせてみましょう。」

王ドーラは特製の『お医者さんカバン』を取り出し、中から出した液状の薬を、トオルに慎重に飲ませた。ただしトオルの顔をまともに見てしまわないように、細心の注意を払っていた。

「…それは、何の薬なんだ？」

思わずといった感じで、マタドーラが口を挟んだ。

「これはどんな深い睡眠状態や、催眠状態からも十分ぐらいで目覚めさせてくれる、私特製の薬です。」

「へえ、何でまたそんなもん作つたんだ？」

「マタドーラみたいな寝ぼすけに使えるんじゃないかと思いましてね。」

「ともなげに言い返されて、マタドーラは渋い顔をした。

「よし……これでトオルくんは大丈夫でしょう。さて、次はこの子に

。」

と、もう一人の少女を抱き起こさうとした王ドラだったが、次の瞬間はつと息を呑んで手を離した。「おい、何だ……！」

言いかけたキッドも、マタドーラもドリメッシュもドリーハツも、いつの間にかそばに来ていた野原一家まで、みんな驚愕して顔色を失つた。

王ドラが動かしたせいで、少女の身体がずれ、顔がよく見えるようになっていた。その顔はまさに、つこうつきまでドリーハツと激闘を繰り広げ、そして敗走した少女のものだったのである。

「…………みんなどうしたの？？」

唯一状況を読めてないドリーハツが、きょとんとしてみんなに問

いかけぬ。

「ドーフィーーー！」

ドーフィッシュが突然、今まで出した「J」とのないような低い声で言った。

「Jのお嬢ちゃんを、本当に花畠の中で見つけたのであるか？」

「え？……うそ、やうだよ。何でそんなこと聞くの？」

ドーフィーが困惑した表情を浮かべた。

「まさか……そんなはずありませんよ。」

「やうだよな……ありえねえよ。」

「ガウウ……」

「ほんとだよ！僕嘘なんかついてないもん！……ほんとだもん！……」

「まあまあ落ち着くであーる、ドーフィーーー！」

ドーフィッシュが慌ててドーフィーーー！をなだめた。

「お主のことを探つてこるわけではないであーる。少しの間、我輩たちの話を聞いてくれぬか？」

ドーフィーーー！は大きく田を見開いてドーフィッシュを見つめ、そしてみんなを見回したが……やがてつなづいた。

「……じゃあ、この子がみんなにひいこりとしたの？」

「…………」
德拉ニーは足元で横たわる少女 桜田ネネの顔をじっと見つめた。明るい日光の下で見ると一層、彼女がやつれているのがよく分かる。

「…………だからこそ、お前が花畠でこの子を見つけたってことがおかしいんだ。その時、ネネはオレたちと鬭つてたはずなんだからな。」

「でも…………！」言に返しかけて、しかし德拉ニーはふと口をつぐんだ。

何だらう。何かとっても大切なことを言に忘れてる気がする。しばらくネネの顔を見つめているうちに、德拉ニーはあることを思い出してあつと言んだ。

「…………」「…………」

「思に出したー思に出したよーー」
「はっ？」

德拉ニーは、ここに来る途中で、一人の少女に会つたことを話した。少女は空から落ちてきたらしく、怪我をしているようだった

とこ'。

「それでね、その子の顔が、この子に ネネちゃんに、そつくりだつたんだ！」

「ええーっー？」

あまりのことに、みんな開いた口がふさがらなくなつてしまつた。

「それじゃ…………それじゃ、ネネちゃんが一人いるってことになるじゃないの。」

みさえが到底信じられないといった口調で呟いた。
「どうしたらそんなことが起きるっていうんだ？」
マタドーラも混乱していた。

「それじゃ、確かめてみたらいいゾ。」

今までずっと黙っていたしんのすけが、いきなり口を挟んできた。
みんながそちらを振り返る。

「確かめる? どうせひつて確かめるつてんだよ。」

「簡単だゾ。ネネちゃんに聞いてみればいいんだゾ。」

ネネが目覚めるまで、それからしばらくかかった。王ドラが言つたのは、彼女は相当長い時間、しかも何も食物をとらずに眠り続けていたらしく、身体がかなり衰弱しているらしい。無理に目覚めさせたら、何か支障があるかも知ないので、薬を少しづつ飲ませ、その間に栄養剤を投与して、様子を見ながら起こすことにしたのだった。

トオルは薬を飲まされてから五分ぐらいで目を覚ました。起きてすぐは、自分が遊園地に戻っていることや隣にネネが寝ていることでもう何も質問せず、ただネネの様子を心配そうにじっと見つめていた。

それから十五分ほどして

ゆうやくネネが、目を覚ました。

ネネは自分を取り巻いている状況が、すぐには理解できぬようだつた。

それはそつだらう。見知らぬ場所で、丸っこい身体をした奇妙な者たちに取り囲まれ、見下ろされているのだから。ネネの寝ぼけた瞳に、戸惑いと、やや怯えた色が浮かんだ。

しかし、しんのすけたちを田にした途端、ネネの顔にほつとした表情が現れた。

「しんちゃん…」

起き上がりつて、手を差し伸べてきたネネを前に、しかし野原一家は思わず後ずさりした。ネネの動きがぴたりと止まる。

「…………どうしたの？」

ネネの声には、明らかに狼狽の色があった。

野原一家は顔を見合させた。ネネを避けるのは忍びないが、だからといって近づくのも怖い。そんな気持ちが、ありありと顔に浮かんでいる。

ネネは途方に暮れたように周囲に田をやり、そして、初めてトオルに気づいた。しかしあるん、王ドラのせいでの子化しているト

オルのことが分かるわけもない。ネネは口をぽかんと開けた。

「あ、あんた、誰？」「この人たちは、一体誰なの！？」動搖のためかどもりながら、ネネはつつかえつつかえトオルに尋ねた。トオルはキッドたちを見上げた。しかし、彼らもネネと同じくらい困っているらしく、おろおろしている。ドラリー二コでさえ、かけるべき言葉を思いつかないようだ。

「……ネネ、ちゃん……」

不意に背後で低い声がして、ほとんど全員が飛び上がった。

いつの間にか、ボーちゃんが意識を取り戻し、ひそひそやって来ていた。

「ボーちゃん……」

トオルが声をかけた。しかし、ボーちゃんにはまるで聞こえていないらしい。その小さな目は、じいっとネネの顔に当たられていた。

ネネもボーちゃんに向づいた。

「ボーちゃん?」

呼びかけられると、ボーちゃんはびくつとしたが、後ろに下がったことはしなかった。ただネネの視線を押し返すように見返し、そして

……。

トオルは度肝を抜かれた。ボーちゃんの目から、出し抜けに涙がこぼれ出したのである。

ボーちゃんは声を出せなかつた。しゃくり上げもしなかつた。ただ涙を流し、地面上にこぼしながら泣いていた。

トオルはしんのすけたちを見、ドリマーたちを見、そしてネネを見た。みんな同じぐらい驚愕し、困惑しているようだつた。特にしんのすけたちはしばりく言葉が出ないようだつた。

みんなボーちゃんが泣いているところなど、数えるほどしか見たことがなかつたのだ。

それなりに四元の瘤のボーカルをもつて、疾を嘆く歌しながり泣いている…………。

卷之三

ボーラちゃんの口から、微かな音が漏れた。顔をよく見ると、なんと少し笑つてゐる。

「……よかつた。」

それだけ言って、ボーチャンはとうとう本格的に泣き始めた。

「ん？ お前、どうしたんや？」

「…………まあいですよ。」

「は？」

「桜田ネネが、あいつらのうちの一人に見つかり、助け出されてしましました。」

「なんやとー？」

「しかも、私も顔を見られてしまったようです。」

「何ですかー？ あんた、よくそんなに落ち着いてうれるわね？」

「あせつても仕方がないでしょつゝもつ起きてしまつた」とです。

「何を……！」

「まあ静かにしこや。ここつの言ひ通りやで。……あの鼻水小僧も、奴らに捕まつてしまつたんやろ？」

「ええ。」

「ほなあいつらはもう、桜田ネネについての話を聞いてしもうとするかも知れんな。まあええわ。あの小僧はわしのことを知らんのやし、別にええ。」

「それでは、どうなれこますか？」

「最後の一人の四天王に、『あの場所』で待機するようこもうとけ。うまくあこづらき、あそこまで誘導してくからな。」

彼の話によると、ネネはこの事件に、始めから関わってなどいなか

一同は、ボーチャンの話の意外さに驚き、何も言えなくなってしまつていた。

つたのだといつ。誰か、ネネとそっくりな顔をした少女がいて、ずいぶん前からネネに入れ替わっていたのだ。

つまり、しんのすけたちが絶交を言い渡したのも、だんだん衰弱していくのも、マサオを異常に怯えさせたのも、みんなその替え玉のネネだったといつわけだ。

もつともボーカちゃんがこれらいのことを知ったのは、もう春日部中のほとんどの人々が墓の中に入ってしまってからだった。

ある日、沈んだ気分で春日部山の近くを散歩していると、誰かがふらふらと酔ったような足取りで、じゅらり近づいてくるのが見えた。
……それが、なんとネネだったのである。

ネネはうつむいた顔をして、半分眠ったような状態になつており、ろくにしゃべることすらできなかつた。あまりにも驚愕したので、ボーカちゃんは一瞬ネネが幽霊になつたのではないかと思つたそつだ。でもネネはちゃんと触ることができたし、息もしていたし、心臓も打つていた。ちゃんと生きているといつことを、ボーカちゃんは長い時間をかけて確認した。

ネネは、ちよつと今着ているような、黒いフードつきの服を身につけていた。意識の朦朧としているネネを、とにかく誰かの所へ連れて行かねばと、ボーカちゃんはネネの腕を引っ張り、急いで歩き出した。

だが、間に合わなかつた。

あつといつ間に田の前が真つ白になり、気がつくとボーチャンは、野原家の布団に寝かされていたのだった。

「そりそり……確かに春田部山からそり離れていない所にボーチャンが倒れてて、びっくりしたしんのすけが知らせに来たもんだから、家に連れて帰ったのよね。…………あ、そういうえば身体の衰弱が始まつたのも、その頃だった気がするわ。」

みさえの言葉にボーチャンはうなづき、そして話を続けた。

布団から起き上がりなくなり、毎日を眠つて過へるよつになつたある日……誰かに呼ばれたような気がして目覚めると、どこか暗くて、冷たい所にいた。

真つ暗闇で、本当に何にも見えなかつた。怖くて叫びそうになつた時、突然すぐそばで声がしたので、ボーちゃんはぎくつとして飛び上がつた。

その声は、今春田部の人々がほとんど吸血鬼となり、自分たちの配下に下つているのだといつよつなことを淡々と語つた。女の声だつたらしい。

その声は、ボーちゃんがネネの生きている姿を撃してしまつたので、彼だけ特別にここに連れてきたのだと告げた。そして、ネネそつくりの少女がネネと入れ替わつてゐることや、これから彼女に従つて動かなければならぬといふこと、また他の人々にそのことを決してもらしてはならないといつよなことを説明した。

「もし約束を破つたら……」

女の声は、静かにそづり言つた。

「本物のネネちゃんが、死ぬことになるわよ。」

そのかわり、ボーちゃんが首尾よく仕事をこなせば、ネネはすぐこの返してやることだった。……やむを得ず、ボーちゃんは吸血鬼として、正体の分からぬ敵に協力することになつてしまつたのだ

つた。

「そんなことが……」

「あのネネは、信じられないといつ顔つきでボーカちゃんを見つめている。春田部屋の近くでボーカちゃんと会つたことにせ、まるで覚えがなこらしこ。」

「でも…………誰かに捕まつてたのは、本当だと懇うわ。だいぶ前から、はつせつと田が覚めた記憶がないんだもの。…………やつ起き起こしてもひつまでは。」

「ふーん、なるほどな…………」

やつ言いながらも、表情がいまいち納得していないのはキッズだ。

「でもよ、この子は眠られてただけなんだろ？別に命の危険にさらされてたわけじゃないみたいじゃねえか。」

「それはどうですかね。」

王ジラが真剣な表情で言った。

「せつかも言いましたが、ネネさんの身体はひどく衰弱していました。恐らくあそじで眠らされている間、ずっと飲まず食わずだった

のでしょ。……そのまま放つておかれたら、危なかつたと思い
ますよ。」

「ネネとボーラちゃんが責ざめた。トオルも怖くなつた。僕らをこんな
目に令わせるなんて、敵は一体何をたくらんでいるんだろう？それ
に、あの冷たい目をしたネネちゃんのそつくりさんは、誰なんだろ
う？」

「なるほど、じゃあドリューの失踪は、無意味じゃなかつたつ
てことになるな。よくやつたぜ、ドリュー！」

「え？ え？ あはは。ありがとお～。」

何をほめられてくるのか戸惑いながらも、ドリューは赤くなつ
て照れた。

「でも、何でお化け屋敷から花畠にワープしたりしたんだろうな。
マタドーラが首をかしげた。そう、その謎がまだ解けていないので
ある。

「トオル、何か変なものを踏んだり、触つたりしなかつたか？」
「うーん…してない、と思つたけど。」

トオルは曖昧にそう言つて、ゆるゆると首を振つた。そのたびに長い
髪の毛が震え、ネネが目を丸くしてそれを眺めている。

「ふうん、やうか。まあ……ねい、ありや何だ？」

全員、つられぬむすじマタダーハの見上げる方向に顔を向けた。
そして上空を猛スピードで飛ぶ小さな光のかたまりを、呆気に
にとられて見つめた。

「なんだ、ありや？」

キッドがそう言つてゐる間に、光はある場所の上で旋回したかと思
ひ、わざと地上へ下りていつてしまつた。

「ヒト〇だゾ！」

しんのすけが興奮して叫んだ。

「まさか。」

トオルはしんのすけの説を否定した。未来から来たネコ型ロボット
がいるだけでもとんでもないことに、ヒト〇まで出現したらそ
れこそ大変だ。

「ねえ、追いかけてみよひよー。」

好奇心いつぱいのドラコーニョが叫び、誰も返事をしていないのに
もう走り出した。

「待つであーる、アーリーーー！」
「また迷子になつますよー。」

結局全員が、ドライバーの追いかけて走り出したのだつた。

「ふん、アホな奴らや。まんまと引っかかりよつた。」

「まあ安心せえ。あいつの能力相手では、奴らとて手も足も出えへんわ。」

不吉な笑い声が、その場に流れた。

17・ボーチャンの話（後書き）

光が落ちた先とは？そしてそこで、待ち受けるものとは……。次回はドラえもんズに、ピンチが訪れる予感！？ 感想待ってます

18・迷路（前書き）

今日はこれで、更新終わりです。……………（^_^;）ヤレヤレ 感想お願いします

(来た来た……)

奴らが近づいてくるのをモニター画面で見守りながら、四天王の最後に一人はほくそえんだ。

一度、あの黄緑色のバカラボットをしとめようとして失敗してしまつた。もうしくじるわけにはいかないが、何しろこんな場所だ。逃げたくても逃げられまい。

彼の目の前には、細くいりくんだ道が、何百と続いていた。

.....
.....
.....

王ドリードは思わず足を止めた。他のみんなも同様だった。

「…………迷路、だな。」

キッドが呟いた。

今、一同の前には高い塀がそびえており、アーチ状の入り口には分かりやすく、『めいろ』と書かれていた。

「…………

ドラメッドは少し顔をしかめた。迷路に関しては、あまりいい思い出がない。忘れもしないドラパンとの対決の時、迷路で水攻めにあ

つたことがあった。

しかし、一緒にひびこ田にあつたはずのドリマー・ムは、早く入りたくてうきうきしている様子だった。

「迷路だ迷路だあー！ねえ、早く入ろうよ！—

「こや……でも……」

王ドリは不安感をぬぐい去れない様子で、迷路を見上げた。何だから中に入つたら、とんでもないことが起こる気が……。

「でも王ドリ、ここでまーっと突つ立つてゐるのだって危険だと思つぜ～。だからしき、ここは安全な場所なんかねえんだからよ、中に入つてもいいんじゃないの？」

じつとしてこむことが苦手なキッドが、王ドリに向つた。

「ねえですねえ……」

王ドリは顔をしかめたが、確かにここじつとしてこむのは、が開けるわけではない。それに何もせずにじつとしてこむのは、王ドリも嫌だった。

王ドラは一つ、大きくため息をついた。

「…………仕方ありませんね。そんなに言つなら、中に入つてみまし
ょうか…………でも、何が起くるか分かりませんよ。」

「今までだつてそうだつただろ。さあ入るぞ!」

マタドーラの勇ましいかけ声と共に、一同は迷路へと続く入り口の中へ、足を踏み入れていった。

暗い、そして不気味。

迷路の中の雰囲気を表すには、その一つの言葉だけで充分だった。

天井があるので、光源と言えば壁に埋め込まれているか細いライトのみ。それも足元を照らし出すだけで精一杯な明かりだった。要するに前方が全く見えないので、何が現れるか分からない。迷路といつよりは、むしろお化け屋敷のようだ。

そんな不気味さに何かわからず、ドリューは元気いっぽいだった。お化けさえでこなければ平氣なのだ。みんなより少し遅れて、トマトと着いてくる。

「 何も出できませんね。」

王ドリューが、油断なく曲がり角の陰に手を配りながらしゃべった。

「つむ……却つて不気味であるな。」

ドラメジードリマセドと顔をしかめた。辺りは耳が痛いへりこに静まりかえつている。

「つたぐ、何でもいいからでてきてくんねえかな。」

マタドーラが、ヒラリマントと剣を振り回しながらあぐびした。それを聞きつけた王ドーラが、素早く振り返った。

「エル・マタドーラ。こんな所で寝られでは困りますよ。」

「分かってる、分かってるって。そんなことしねえよ。」

マタドーラは不機嫌に右手を振つてみせた。

「ああそりだー!!」アリモお散歩させてあげなきやーー。」

ドリコーー! が慌てたようになりび、着てこるシャツの中をじんじんやり始めた。

「手伝おつかっ!」

トオルがドリコーー! に歩み寄つてこぐ。

思いがけないことが起ったのは、その瞬間だった。

ガシャアアアン！

背後で大音響が鳴り響き、地面が大きく揺れて、ひろしはもうじょ
つとで転びそうになつた。後ろを振り返つて……愕然として、立
ち止くした。

がっしりとした鉄製の格子が、背後に立ちふさがっていた。

どうやら上から落ちてきたりじー。その時下に誰もいなかつたのは

幸いだつたものの、不幸なことにその格子が下りてきたのは、全員が通り過ぎてからではなかつた。

「風間くん！」

「ドーリー＝モー。」

しんのすけとキッドが叫んだ。格子の隙間から、きょとんとしたドーリー＝モーと途方に暮れたトオルの顔が垣間見える。

遅れていた一人は、格子の向こう側に取り残されてしまったのだつた。

慌てた王ドーラが、ぬんちやくを取り出して鉄格子を叩き始めたが、壊れるどころかひびすら入らない。マタドーラがありつたけの怪力を振り絞つても、まるでびくともしなかつた。

「なんて……丈夫な……やつだ。」

息を切らしてゼイゼイしながら、マタドーラが言つた。

「それなら、我が輩が巨大化すれば……」

「ダメですよ。マタドーラの怪力でも壊せなかつたんですよ?」

「……………そりであるな。」

進み出ぬつとしたドラメリックは、王ドーラに言われてしゅんと弓を下がつた。

しばらくの間、沈黙が続いた。

「…………僕たち、ここのまま行きます。」

驚いたことに、口火を切つたのはトオルだった。

「鉄格子が壊せないんだつたら、そつするしかないと想います。
ね、ドラリーー!」

「うんー。」

ドラリーー! は何も考えずに、でも頬いつぱいの笑顔で応じた。

「でも…………」

何か言いかけたネネを制して、キッドが前に進み出た。

「さよっと待て。その前に渡しちゃいたいものがある。」

そつぱつてキッドが差し出したものを、トオルは目を丸くして見つめた。他の面々も、びっくりした顔になつてそれを眺めた。

キッドの手に乗つてたのは、キラキラ光る一枚のカード　　『親友テレカ』だつた。

キッドはトオルに近づくと、ドラコニーに聞こえたよつゝ、やや声をひそめて言つた。

「これはオレたちドラえもんズの友情の証、親友テレカだ。……これをえば、たとえドラリー二三とはぐれちまつても、あいつと連絡が取り合える。オレたちとも連絡できる。ピンチになつたら、それを使ってオレたちを呼ぶんだ。」

そこまで言つて、キッドはわらにもう一言、付け加えた。

「それはオレたちの友達のものなんだ。　　お人好しだから、勝手に貸したからといって腹を立てたりはしないだろうが、くれぐれもなくしたりはしないでくれよ。」

「は、はあ……」

トオルが親友テレカを受け取ると、キッドはぐるっと振り返って、仲間たちに言った。

「よし……そんじや、ドライブ一回せトオルに任せ行くわ。」

「キッド……。」

「あん? 何だよ、王ドラフ。」

「いいんですか? あれ、ドラえもんの親友テレカでしょう。」

「だーいじょうぶさ。トオルならしつかりしてるから、ちゃんと大事に扱つてくれるさ。」

「はあ…………ですが…………」

「それにトオルをドーラリーーー!? と一入きりにしどく方が、もつと問題だとオレは思うわ。」

「それは………… そうでしょうね、多分。」

「だろ? も、心配しても始まらねえって。行けりゃぜ。」

トオルはしげしげと、手の中にある親友テレカを眺めていた。

その名の通り、親友テレカは普通のテレホンカードと同じく「」の大きさをしている。金色の淡い光を放つており、表面にはキッドたちの姿が描かれ、『DRAEMONS』と刻印されていた。

トオルはふと、鼻歌を歌いながら前を行くドライバーに叫んで止めた。

「ねえ、ドライバー！」

「ん？ なあに？」

「この、真ん中にいる人は誰？」

トオルの指は、キッドたちの真ん中にいる青いロボットに当たっていた。

「あ、それはドライエモンだよ！ 僕らドライエモンズのリーダーだ……。」「ふうん……」

トオルは多少の驚きをもつて、ドライエモンをもう一度見つめ直した。服装などに特徴が出てこる他のメンバーたちとは違い、ドライエモン

は何も身につけておらず、いかにも地味に見える。真ん中にいなければ、誰もドラえもんズのリーダーとは思わないだろう。

でも他のメンバーにはない特徴が、この青いネコ型ロボットにはあった。
いや、なかつたと言ひべきか。

「この人、何で耳がないの？」

「え？ あれ、んーと、何でだっけ？」

ドラリー一郎が思い出すまで、トオルはおとなしく口をつぐんで待っていた。

「あっ、やつだ思い出した！ 確かネズミにかじられたんだって言ってたよ……」

「ネズミに？」

「うん。それで家にお金がなかつたから、耳を取っちゃつたんだって。だからドラえもんは、ネズミがすつゝ苦手なんだよ。」

ネコ型ロボットなのに……と考えて、トオルは思わずおかしくなつた。

身体が青いのも、本当は黄色だったのに海辺で大泣きしてこらつちに塗装がはげてしまつたからだという。なかなかつらいく間に合つて、いるネコ型ロボットらしい。

「でも優しいし、いやといつ時はすぐ頼りになるんだよー！ 親友テレカを入れたのだって、ドラえもんのおかげなんだからーー！」

熱心に話していたので、角を曲がった途端に扉が現れたことに、ドーラリー＝ニアは全く気づかなかつた。トオルが注意する間もなく、ドーラリー＝ニアは見事扉に激突した。

「あいたつ！」

ドーラリー＝ニアは飛び退き、したたかにぶつけたおでこをさすりながら、扉を見つめた。どうしりと重そうな、鉄板張りの大きい扉である。キッドの空気砲やマタドーラの怪力をもってしても、ぶち破るのは難しいかも知れない。

しかし、そつと扉の取っ手を引つ張つてみて、トオルはびっくりした。なんと、鍵がかかっていないのだ。扉は抵抗なく、すうすうと動いた。

トオルは束の間、ドーラリー＝ニアと顔を見合せた。

「…………どうする？」

「入つてみようよ。」

間髪入れずにドラリー一郎が言った。トオルが予想した通りだつた。

「でも…………危なくない？」

「大丈夫大丈夫！トオルくんには僕がついてるからーー！」

だから心配なんだけど。

なんて言うわけにはもちろんいがず、トオルは黙つて取つ手を握る手に、力をこめた。

「お…………！」

突然、巨大に開けた空間に出たしんのすけは、畳をぱちぱちさせた。ネネや、野原一家も同様だった。

ずいぶん広い所だったが、ずいぶん殺風景でもあった。壁と天井は金属張りで、鏡のように部屋の中に入ったキッドたちの姿を映しており、床にはなんと、緑色の芝生が敷きつめられている。それ以外は何もない。退屈なほど単調な光景だ。

その時、後ろからじっと見つめている視線を、王リナは感じた。

反射的に振り返るより早く、みんなの背後でばたんと扉が閉まる音がした。続いて、がちやんと鍵がかかる音も。

「なっ、何だっ！？」

マタドーラが叫び、ヒラコマンドをせつと取り出した。ドリえもんズのメンバーたちが素早く動き、野原一家とネネを守るように取り囲む。その間にも、彼らの手は油断なく周囲に配られていた。

しかし 。

「ガアウウッ！」

泣くような吠え声と共に、ドリードリの身体が空を切って飛んだ。

「ドリードリ！」

ドリードリは壁に激突し、そのまま地面の上に転がって、ぐつたりと動かなくなつた。田の焦点が合わなくなつていて、気絶してしまつたらしく。

「へんつ、へんつーーどーだー?」

苛立ちと恐怖で怒鳴りながら、キッドはあけいちを見回した。こんな身を隠す所のない場所だといつのこと、ドライコフを攻撃した敵の姿が見えないので。

不意にマタドーラは、すぐ後ろでくすくす笑う声を聞いた。

はつと振り返ると同時に、生温かいオイルがぱつと顔にかかった。

「わあ～…………なんか、へんてこな所だね？」

本当にへんてこな場所だった。床も壁も天井も、みんな黒光りしている。黒い大理石か何かを使って作られた部屋のようだ。

部屋は案外広く、特に天井が高い。中心には台があり、扉の正面にかなり長い階段があつて、台のてっぺんに上れるようになつていて、そこに何か大きなものが置かれているのが、ちらりと見えた。

「わーい、何いじー？何いじー？」

興奮して走り回り始めたドリコーー^ムをちらりと見やり、しばした
めらつてから、トオルは階段の一級目に足をかけた。

上りきるのには、かなり時間がかかった。

半ば肩で息をしながら、みづやくてっぺんに上がったトオルは、そ
こに設置されているものを皿の皿たうにして、一瞬立ちすくんだ。
激しい恐怖に襲われた。

棺桶かんおけ
だつた。

この部屋と同じ、黒いつやつせつした石で作られている。誰かの名前
が彫られているのではないかと一瞬思ったが、その表面には、名前
どころか何の模様も描かれていなかった。どこもかしこもつる
で滑りかだ。

怖かったが、何だか惹きつけられるような気持ちで、トオルは数歩、
棺桶に近づいた。

棺桶のふたが少しばかり持ち上げられたかと思つて、その隙間から
しゅわっと白い手が伸びてきた。

あつと思ひ間もなく、トオルは白い手に強く腕をつかまれ、棺桶の中へと引寄せられてしまった。

「…………トオル？あれ、トオル？」

よつやく走のをやめたドリューは、トオルの姿が見えないことに気づいてあきらめようとした。

「…………」

意外なほど近くで声がした。

ドリューは振り返り、ほつと安心したよつた笑みを浮かべた。

「んもお～、トオルつたらびりへつせないでよね。」

「ドアリーーー！」や、急に走り回つたりしないでよ。話しかけるタイミングをつかめなかつたじやないか。」

「あはは、じゃあ行こつかー。」

ドアが閉まると同時に、部屋の中には暗闇が満ちてこつた。

18・迷路（後書き）

最後はちょっと怖くなるように仕上げてみました。キッドたちの闘いの行く末や、ドラリー二ヨたちの行き先を知りたい人は、ぜひ次回も読んで下さい。（*^-^*）

19・黒幕の正体は……？（前書き）

そろそろラストに向けて、いきなりですがエンジンがかかります！
ちなみに皆さん、デーラリー・ヨとマサオくんの声を同じ声優
さんが演じていることはない存じでしたか？ 感想お願いします

19・黒幕の正体は……？

「マタドーラ！大丈夫であるか！？」

ドラメッドが責ざめて、マタドーラに駆け寄った。

「大……丈夫だ。」

マタドーラは氣丈に言い放つたが、顔は青ざめている。頭の角が一本、根本から切り落とされ、そこからオイルが流れ出ていた。

「ど」「だ？一体ど」「から……」

キッドが冷や汗を流しながら、ショックガンをあいこむ方向けるが、敵の姿は影も形も見えない。

「何なんですか、これは！」

さすがの王ドーラも、うわずつた声を上げた。

「ははっ、びっくりしてやんの。」

突然呼びかけられて、キッドたちは思わずびくつとなつた。おそるおそる、振り返つた先にいたのは……。

「河村くん！」

ネネが甲高く叫んだ。ボーチャンも、しんのすけも大きく目を見開いた。ばら組の俊足白慢の園児で、やたらとちよつかいをかけてくるチーター河村が、にやにやしながらこちらを見ている。手に鋭いナイフのようなものを持っていた。

「どうだ？この俺の能力！自由に透明になれる俺様相手に、お前らに勝ち目なんかねーのさつ！」

「透明だと？」

マタドーラが顔をしかめながら呟いた。

「えーっ、いいなー。透明になつたら好きなだけ女湯を覗きに行けるもん。よかつたね、河村くん。」

「バ、バカ野郎！そんなことに使つかよー！この力は、俺がお前らを倒すためにもうつたんだ！」

河村の青白い顔に、わずかに赤みがさした。

「ど、すみど……お前が最後の四天王ってわけか。」

キッドが田を細めながら呟く。…………その時河村の顔に、わずかな動搖が走った。

「ん、ま、まあそんなどこかな…………それよりもまず、お前らを倒す方が先だ！」

河村の姿が、空気に溶けるように消え去つた。ネネが息を呑み、しんのすけは

「おーっ、カッコいいーーー！」

と、歓声を上げる。

「どうします？」

王ジドリガがなんぢゅくを手に、辺りをきょろきょろ見回しながら囁つ

た。

「なあに、案ざる」とはない。我が輩に任せんであーる。」

ドラメッシュが自信たっぷりな声で言つたので、みんなびっくりして振り返つた。ドクター山口を抱え上げていたマタドーラが叫ぶ。

「へえ、どうしたんだよ、ドラメッシュ。えらく自信ありげじゃねえか。」

「まあ見ていろであーるよ。」

ドラメッシュは手を交差させたと思つと、ぱっと大きく腕を広げて叫んだ。

「炎よ、この部屋を包み込むであーるー。」

たちまち、キッドたちをぐるりと取り囲むようにして、真っ赤な火が部屋中に燃え上がつた。熱気があぶられて、顔が熱い。

ちょっとびっくりした顔をした王ドラが、すぐにニヤリと笑み崩れた。

「なるほど……あぶり出しどこうわけですか。」

「透明になれるからって、身体を実際に消せるわけじゃねえもんな。

「

キッドとマターラも「ヤーヤー」とこゑ。あるいは「うわー」と、たまたま……。

「あかーつーあかあかあかーーー。」

火の中から、小さな黒い固まりが飛び出し、地面を転げ回った。間に
髪入れずにマターラが飛びかかり、パンチを食らわせると、飛び
出てきたものはあつてこう間にぶつたりとなつた。

ドリメッシュがわざと手を上げた途端、炎は嘘のようになってしまった。

「河村くん……大丈夫なの?」

ネネが「わー」わざとこいつた感じで尋ねると、ドリメッシュは安心をせる

よつな優しこと謂で言つた。

「心配する」とはないであーる。あれは幻の炎であーるよ。」

マタドーラは氣絶したチーター河村の身体を抱え上げ、得意そうな顔をしていた。

「最後の四天王のわりには、なんか呆氣なかつたな。」

「ふ、耳ほどにもない奴め。」

「それを血つなら口ほどにも、でしょ、ひが。」

しんのすけの頭を、みわえがこつんと呂いた。そばでネネがくすぐり笑つてゐる。

「まあこれでもか……」

言いかけて、王ジラの顔がいきなりこわばつた。目が一点に釘づけになつてゐる。みんなその視線を追つて振り返つた。

いつの間にか、頭をオーバリみたいに剃り上げた男の子が、壁に寄り添つよつとして立つてゐた。

「うわ！」

キッドが思わず飛び上がった。

「お前、どうから来た！？」

しかししんのすけたちは、全く別の部分に反応した。

「マサオくん……」

ネネが呆然とした表情で、呟いた。

マサオは無表情だった。何を考えているのか分からなことひつな顔をしていた。

「マサオくんまで……敵の仲間に？」

みさえが口元を押された時、また後ろで声がした。

「当然や。その坊主の友達を、四天王に選んだんやからな。」

はつと振り返ったひろしが、大きく田を見開いた。

「おっ、お前はつ！」

「ねえトオル、どうしたの？」

「…………え？ 何が？」

「やつらからずっと黙つてゐるんだもん。」

トオルとドライバー一人は、果てしない迷路の先をすんすん突き進んでいた。

ドライバーは相変わらずふるふるんだが、トオルは妙に無表情で、

無口になつてゐる。あの黒い部屋から出てきてから、ずっとこんな感じだつた。

「大丈夫?なんか顔が青いみたいだけど。」

「わう? 気のせいなんぢゃないの。」

答える声がどこかそつけなく聞こえるのは、氣のせいだらつか。

その時、今までしんと静まりかえつていた迷路の中に、小さな足音が聞こえてきた。

「ん?」

視線を下に落としたドリューは、向こうから小さな生き物が駆けてくるのを見た。

それは、一匹の犬だつた。

「わーっ、かわいいー! ねえ、君名前なんて言つの?」

「かわいい？……なんかその犬ちょっと変じゃない？」

確かに変だった。よだれを垂らしているし、毛を逆立ててうなっているし、それに何より、目が真っ赤に光っていた。

「あれえ、なんかこの犬、目え赤くない？」

「確かにどう見ても赤く光ってるよね。」

「寝不足？」

「違うと思つけど。」

犬が不吉なうなり声を上げた。それを見て、トオルはドラリー＝ヨの腕を強く引つ張つた。

「ドラリー＝ヨ、逃げた方がよそうだよ。」

「え？ 何で？」

「何でつて、普通に考えたらそつなるだろ。」

と、トオルが半ば強引にドラリー＝ヨを引きずつていき始めた時、ドラリー＝ヨがわあつというような叫び声を出した。

目を上げて、トオルは驚いた顔になつた。

数え切れないほどの、大小様々な犬たちが、険悪なうなり声を上げながら迫つてくる。 前からも、後ろからも。

一人はうなり声とよだれと牙と、赤い目で集団に取り囲まれてしまつた。

「…………どいつもこよ」

トオルが、感情を表に現さない低い声で、われやく呟いた。

「へーん…………」

さすがのドリーラーも、途方に暮れた様子だった。と、ぱつと表情を明るくして手を打った。

「やつだ忘れてたーあれがあつたんだー！」

「あれ？」

ドリーラーはふとじろをいじりやつて、小さな薬びんを取り出すと、一息にえいっと飲み干した。

まばゆい光が放たれた。トオルは目を細め、右手で顔に影を作つていたが、あまりのまぶしさに目をつぶされた犬たちは、きやんきやん吠えて混乱に陥つた。

やがて、光がおさまると………… タツキモでドリワーリー四の立つていた所に、一人の少年が立つていた。

オーギリのような坊主頭をした少年だ。佐藤マサオにそつくりな顔をしている。服装もマサオの普段着と同じようなものだつたが、首にはドラリー二ヨがつけていたのと同じ、小さなサッカーボールがついた首輪を巻いていた。

「……?…………わ、何これ何これえ?」

ドリワーリー四は自分の変貌した姿を見下ろし、興奮して叫び出した。
声はほとんど変わっていない。

「ドラリー＝ヨ、ここから早く何とかしてよ。何のために変身したんだい？」

トオルの冷ややかな声が割り込んだ。

「あつー！」めぐめぐ…」

変身したドラリー＝ヨは慌ててトオルを抱え上げると、その場で軽く助走するやいなや、弾丸のように飛び出した。

何じるドラリー＝ヨはチーターすら打ち負かすほど俊足である。そんな彼がパワーアップしたのだから、これはただごとではなかつた。魔法にかけられたかのように、ドラリー＝ヨとトオルの姿は通路の向こうへ消えていった。

目を赤く光らせた犬たちは、すっかり毒氣を抜かれたようになつて、二人が消え去つていった方向を見つめていた。

「お、お前はっ！」

ひろしは驚愕のあまり、そう言つたきり声が出なくなつてしまつた。
みさえが悲鳴を上げた。しんのすけも振り返り、凍りついたように動かなくなつた。

マサオがいるのとは反対側の壁に、黒い服をまとつた者がもたれか
かつてゐる。
人間ではない。人であるはずがなかつた。その
顔は、人のものというより、骸骨の顔に近く見える。しかし普通の
骸骨なら空っぽなはずの目の穴には、赤い光が燃えていた。服から
突き出している腕や脚は、明らかに白い骨がむき出しだつた。

そのそばには、同じような黒い服を着こなした、見事なスタイルの黒髪の美女がいた。普段ならバラの花を投げて誘惑するマタドーラだったが、今回はなぜかそういう気分になれず、代わりにヒラコマントと剣を握る手に、一層力をこめた。

美女の顔を魅入られたように見つめていた王ドーラは、ふと彼女の額に奇妙なものをみとめた。

始めは傷か何かかと思ったが、そうではなかつた。
印だ。それもなぜか、一本の小さな骨の形をしている。

奇妙な印だ　　そう思つてしんのすけたちの方へ目を移した王ドーラは、びっくりした。

野原一家は蒼白になつていた。しんのすけでさえ、その目にきつい光を浮かべながらじりじりと後ずさつている。足元ではシロが、不安そうにクンクン鳴いていた。

「おこ、どうしたんだ？」

キッドがせき込んだように尋ねた。彼だけではない。ネネもボーキャンも、びっくりしてわけが分からぬといふ表情でしんのすけを見つめている。彼がこんなに動搖しているところなど、見たことがないのだろう。

野原一家はみんなの方を見なかつた。ただひたすらに、引きつけられているかのように、骸骨のような風貌を持つ何者かに視線を注いでいた。

やがてひりしが、震える声でもうした。

「ボーン・キング.....！」

19・黒幕の正体は……？（後書き）

ボーン・キングのことは、クレしんの漫画を読んでらっしゃる方なら分かるはずです。分からぬ人も、次回以降に説明するのでご安心下さい。次回もお楽しみに！

20・突如現れた仇敵（前書き）

今回はこの事件の黒幕と、その目的が明らかに！？

感想お願いし

ます

20・突如現れた仇敵

一同はそれぞれに驚きの顔をして、驚きの声を発したが、何しろびつくりするような事柄がいくつもあるので、それらほんのほんのかけとなつた。

「しんむりやん！…じうじうちやつたの、顔が真っ白よー。」

そう叫んだのはネネだった。

「何なんだよ、こいつは？」

キッドが顔色を失いながらも、強氣で言い放つて骸骨みたいな何者かを見つめた。

「ボーン・キングですか？」

と、野原一家を見上げたのは王ドラだ。

「野原さん、どういうことなんですか？ボーン・キングとは一体誰です？」

あなたたちは、こいつのこと知つていのですか？」

ひろしとしんのすけは答えない。みやえはいやいやをするように首を振りながら、まるで叫び声を抑えようとするかのように、右手でぎゅっと口を押さえつけ、もう片方の腕でひまわりを一層強く抱きしめた。

「　　おい。」

今度はエル・マタドーラが声をかけた。目を細め、砂の中に混じつ

た金の粒を探すよつてな田つ地で、野原一家の瞳の中を順々に覗き込み、探つている。

「なあ、今言つたことをもう一回呴つてみろよ。ボーン・キングつてのは誰だ？お前らはこの骸骨野郎のこと知つてんのか？」

だがみんなの耳に、マタドーラの言葉は半分も届かなかつた。それを圧するような、厳しく尖つた声が割り込んできたからだ。

「こいつは。」

骸骨のような男の放つた声だつた。

「こいつは…………わいを、殺したんや。」

しばし、ネネもボーちゃんもドラえもんズの面々も、呆然として言うべき言葉を思いつかなかつた。

「な、な。」

第一声を発したのは、キッドだつた。

「な、何だ? 何デタラメな」と言つてんだ、「じつへ。」

骸骨男の顔が、少し笑つたように見えた。

「デタラメとかやうで。」

「何を言つてるんですか。」

次に言つたのは王ドラだ。

「大体殺されたんなら、今ここにそりしているわけな……」

ひろしの力ない声がしたのは、その時だつた。

「いや、みんな……それは本当のことなんだ……」

キッドたちが驚いて見つめる中、みさえが言葉を続けた。

「こいつはボーン・キングと書いて、吸骨鬼　ボーン・バンパイアっていう怪物の王なの。」

「ボーン・バンパイア？」

「吸血鬼の、血を吸う代わりに骨を吸うバージョンみたいな奴のことなんだ。」

ひろしが説明する。

「キングは昔、ボーン・ブレードっていう伝説の武器で倒されたんだけど、その子孫の手によつて復活してしまつたの……そして仲間を集めて、世界征服計画を進行させ始めた。」

あまりに巨大なスケールの話に、ネネとボーチャンは呆然と顔を見合わせるばかりだ。

「俺たちはたまたまそれに巻き込まれて、なぜか協力することになつちました。もうダメかつて思ったこともある。しんのすけを人質に取られたりとか、味方の女の人人が実はボーン・バンパイアの子孫だつたりとか。」

「でも最後にはちゃんと買つたんだゾー！オラが……」

言いかけて、しんのすけは顔を赤らめた。

「…………オラが頑張ったから、最後にはキングを倒せたんだゾ。」

明らかに何かを隠した口調だったが、そんなことを気にしている場合ではなかつた。

キングはますますにやにやと笑い、野原一家を見回した。

「…………そりや、確かにわいは、あの時首をはねられた。わいの身体はもう一度と復活でけへんように、どこかへ隠されどるんか、それとももう破壊されてしまつたんかも知れんな…………だからお前らも、わいがいきなり目の前に現れて驚いとるんやろ？。」

骸骨男 ボーン・キングは、コッコッコッコと変わつた笑い声を上げた。

「残念やけどな、わいはそう簡単には死なへんのや。元の身体は失

つてしまつたが、それでもいつしてもよみがえる」とができた。

「おおおおおお、ナタリーのおかげでな。」

野原一家ははつとして、キングに描かれた美女を見つめた。女は美しい顔に歪んだ笑みを浮かべて、こちらを見つめている。

ひろしは冷水をかけられたような気持ちで、思い出した。そういうば始末したボーン・バンパイアの中に、元ハリウッド女優のナタリー・「ツバーンの姿がなかつた…………でもそれがキングの復活と、何の関係が？

ひろしの心を読んだかのように、キングが言葉を続けた。

「ナタリーは、わいの愛人やつた。そしてお前らにわいがやられた時……ナタリーの腹には、わいとの間の子供があつたんや。」

野原一家がぱつと顔を上げた。彼らが雷に打たれたような顔をしているのを見て、ボーン・キングはますます小気味よさげに話し続けた。

「わざわざもやつたよつて、わいは首をはねられた元の身体はもう望みなしやと考えた。するとその時運良く、ナタリーがわいの子供をはらんじるのを知つた。そこでわいは、その子供の身体をもろづいて生まれ変わることにしたんぢ。」

もつ誰も口を挟まない。みんな呆然となつて、キングの話を聞いていた。

「ナタリーに産んでもらつてから、わいはあつといつ間に成長して、以前とそつ変わらへん力を取り戻した。それからやめべきことを考えたんやが……」

しんのすけたちを見て、キングはまたにっこり笑つた。

「世界征服はもちろんやが、わいの子孫のボーン・バンパイアたちはもうやられてもうつて残つてへん。でもちよつどその頃、ある……

……

言ひやして、キングは不意に言葉をこじした。

「…………あるチャンスのおかげで、わいとナタリーは重要な情報を得た……。」

キングはもつたいをつけるようにしてみんなを見回し、低く付け加えた。

「普通の人間の血に、わいの体液を大量に混ぜ込むと、吸血鬼にすることができるんや。」

その言葉に驚いて、王ドラは何か他のことを考える余地などほとんどなかつたが、キングがわずかの間言葉につまつたことがほんの少し気になつた。しかし、再び話し始めたキングの声に気を取られ、そのことはすぐに忘れてしまった。

「それを利用して世界征服を始める前に、わいはええことを思ついた。………そう、お前らへの復讐^{雪辱}や。」

キングの目がきらきら光り、野原一家をねめつけた。一家は身を寄せ合つたが、キングから手をそらしはしなかつた。

キッドがかされた声で、呟くよつて言つた。

「……そんならなぜ、しんのすけたちを真つ先に吸血鬼化しなかつたんだ？」

「そんで洗脳して、家来にしてまえってか？なるほど、それもええ復讐かも知れんが、それやとそいつら自身は大してつらい思いをせんと終わつてしまつやろ？それやつたらこにつらの友達をわいの手下にして痛めつけたつた方が、ようけ苦しめられるやんか。」

キッドたちは背筋が冷たくなる気がした。 キングの言葉が、はつきりと真実をついていたからだ。

「そこ」でわいは、その坊主の友達関係を調べ始めた。
そこにある桜田ネネつてガキが、利用できるつちゅうじ」と云づいた。

いきなり名を呼ばれたネネは、びくつとすくみ上がった。 そちらを見ようともせずに、キングは話しつづけた。

「わいはネネの性格とか、その他もろものことを色々調べた。

「そんでネネが最近、どうもこの坊主やその友達に陰で嫌われとるうじじつちゅうじ」とも知つた。」

ボーちゃんがびくつと身体を震わせ、ネネが青ざめる。しんのすけは

「嘘だ！」

と叫んだが、ボーン・キングはかまわずに話を続けた。

「……いいのは使えるとわいは思った……そこで桜田ネネを中心こゝ
あの計画を立てた。」

「」お嬢ちゃんにせつくりな少女に入れ替わらせて、一連の事件の首謀者と見せかけようとしたというわけであーるか？」

ドラマチックの言葉に、キングが初めて驚いた顔になつた。

「なんでそないな」と知つとるんや？」

11

ド・ラ・メ・ツ・ドは答えなかつた。代わりに王・ド・ラが口を開いた。

「どうもよく分からぬのですがね。どうしてまたネネさんを最初に利用しようと思つたのです？別に他の子供たちでもよかつたわけでしょ？」

「ああ、やのじとか。」

キングがなぜか、ことさらに得意そうな顔になつた。

「ええが、これがわいの計画の大事などじりやつたんや。 人間どもをわいの思い通りに洗脳するには、なんちゅうても心の弱みを握つたるのが一番や……ネネと絶交したお前らは、それ以来ネ

ネが弱つてつたのを見て後悔じとつたはずや、ひやつか？」

返事はなかつた。

「そつした時に、心の隙間ひまちゅうもんは生まれる。……それを
がつしりつからでしもたら、後はこいつの想つま。簡単に支配で
きるつけわけや。他の春日部の人間も、周りの奴らが死んでい
くのを見て心が弱つてつたはずやしの。ま、そここの鼻水の
ガキだけは、目を離した隙に逃げ出しそつたネネを見つけてしもう
たから、うまく洗脳できへんだんやが。」

「でも、嘘だつたんだろう？」

キッドが突然口を挟んだ。声が震えている。彼がこんなに怒つた声
を出すところを、しんのすけたちはもちろん、王ドリたちも聞いた
ことがなかつた。

「全部嘘だつたんだり? —セモノのネネに死んだふりをさせで、し
んのすけたちの心にわざわざ傷をつけで……お前は、こいつの
友情を引き裂いたんだ!」

「わうや。まあそのことだけでもわいの復讐は果たせられたと言つ
てもええかな。」

こともなげに言い放つたキングの声に、キッドはもつ何も言えず、
ぶるぶると腕を震わせた。指があつたら、強く手を握りしめていた

かも知れない。

「でももう、これで本当に終わりや。」

キングが手を上げた。突然足音が近づいてきたので振り返ると、マサオが虚ろな目をしたまま、歩み寄つてくるところだった。

「そいつにやつた力は少々厄介でなあ。さっきの足の速いガキはただの腕試しみたいなもんや。こいつが本当に最後の四天王やからな。何でお前らみたいなタヌキがここに来たんか知らんが、……どっちみち、ここで終わりにしたるで。」

キングがそう言つたかと思つと、マサオが一直線に飛びかかってきた。
しんのすけの首を狙つて。

マサオの両手がしんのすけの前にかかる前に、マタドーラが後ろからマサオに組みついた。

マタドーラはドラえもんズ中一番の力持ちだ。泣き虫で弱虫なマサオが、かなうはずもない。しかしまるでその攻撃を予期していたかのように、マサオは振り返りすらせずに無造作に左腕を振り、肘で

マタドーラの鼻を強打した。

マタドーラがうめいて飛びのくよりも速く、今度は王ドラが空中に舞い上がり、頭上から跳び蹴りを食らわした。それと同時に、ようやく目を覚ました狼化状態のドランコフが、吠えたけりながらマサオにつかみかかった。

しかしマサオは、これらの動きも全てかわした。それも実に小さな動きで。そうやって攻撃から逃げながら、両手を王ドラとドランコフに向け、マサオは赤色に光るエネルギー球を繰り出した。

二人はすんでのところでかわし、すぐそばの壁にエネルギー球がめり込み、爆発する音を聞いた。

キッドの放った光線も、全て呆気なく回避された。その様子を少し離れて見ていたドラメッドは顔をしかめた。

(いやつ、どうする………！)

今までの敵に比べても、やはり圧倒的に動きがいい。これはひとまず、奥の手『巨大化』を使うとするか……。

しかし、ドラメッドが巨大化の準備に入らうとした途端、そりが背を向けていたマサオが、驚くべき速さでエネルギー球を放った。

ドラメッドは攻撃をまともに受け、吹っ飛んで壁にぶつかり、さらに穴が開いて崩れた壁の向こうに見えなくなった。

「ドラメッド！」

ボーン・キングの高笑いが響きわたった。

「どや、大したものやろ？」「こいつには一番高い能力を『えといたんや。』それになんちゅうても、そいつは心が読めるからな。」

「な、なんて言いました、今…？」

王アーリアが思わず、つわづつた声で聞き返した。

「闘いの最中に、お前らの考えることが全部分かるんや。だからお前らがどんなことをしようとしてるか、全てお見通しちゅうわけや。」

「嘘だろ……」

キッドが呆然と呟いた。自分たちの攻撃を前もって察知する力に、高い攻撃能力 こんな最悪な組み合わせがあるだろ？

「ゴパアーン！」

突然、ドラメッドが吹っ飛ばされた崩れた壁の残骸が、こちら側へと飛んできた。

壁の細かいかけらが舞い上がり、王ドラは「ホホホせき込んだ。ボーン・キングも驚いた顔になる。

「な、なんやー!？」

キングの言葉にかぶるよひにして、聞き慣れた脳天氣な声が響いた。

「あれえ、みんなこんな所にいたんだあ～。」

20・突如現れた仇敵（後書き）

まんがタウンの雑誌で読んだボーン・キング編が、気になる終わり方をしていて、自分なりにこんな感じかなと想像して、この話に登場させました。次回もまた、激闘必見ですっ！（ ）

21・歩るために（前書き）

パワーアップしたドリューが行き着いた先は、なんと
！？ 感想待つてます

21・弔るために

大きな穴の開いた向こう側にいたのは、何か大きなものを一つ抱え上げている、小さな少年だった。

その姿はなんと、マサオとそっくりそのまま同じだった。

「な、何だお前…………」

言いかけて、キッドはふと言葉を止めた。

姿も服装も、今までキッドたちを襲撃してきたマサオと同じだが、一つだけ違うところがあった。…………首に、小さなサッカーボールの飾りがついた首輪を巻いている。

「…ドラマーですか？」

王ドラガがためらいがちに尋ねると、少年は壁をまたぎ越えて、部屋の中に入ってきた。その時初めて、彼が抱えているものが気絶したドラメッドとトオルだということが分かった。

少年は一人を地面に下ろすと、王ドラたちをじげじげと見つめた。

「みんな、こんなところで何やつてるの、壁が壊れてるの？」

予想外なことに、声はいつも王ドラリーの王ドラリーと全く変わりなかつた。そのことに驚かされ、キッシュは王ドラリーの疑問に答えてやるべくひではなかつた。

「そ、それはですね……」

王ドラが慌てて説明してやつとした時、不意に耳障りな声が割り込んできた。

「なんやねん、そいつは…………おい、マサオーはよそいつも始末せえ！」

ボーン・キングだった。せつかくの楽しみを邪魔されたという顔つきで、不快そうに王ドラリーへと見てくる。

マサオは言われた通りに王ドラリーへと向かい合つたが、どういつわけかすぐには飛びかかるとしなかつた。…………少し眉をひそめて、けげんそうな表情を浮かべている。自分にそつくりな奴が相手なので、さすがに不思議に思つてゐるんだろうなどマタドーリは思つた。

しかしそれもほんの一瞬のことと、マサオの手からドライバーに向かつて、赤いエネルギー球が飛んだ。

ドライバーはさつと安全な場所へ移動し、エネルギー球が飛んでいた後を目を丸くして見送っていたが、ふと自分の置かれた状況に思い至つたらしく、慌ててマサオの射程距離内からできるだけ離れようとした。

マサオがそれに追いすがるようにして飛びかかる。両手で首を押さえようとしたらしく、ドライバーは巧みにするりと逃れ、どちらともなく取り出したサッカーボールをマサオのお腹めがけて蹴りつけた。

マサオもまた、その攻撃を回避したが……王ドラはなんとなく違和感を感じた。何だかマサオの動きが、やつきまで自分たちと闘つていた時とは微妙に違うような……。

「なあ王ドラ、……」

「マタドーラがわざやこてきた。

「マサオの動き……なんかさつきよりも鈍くないか?」

「マタドーラもさつき思こますか?」

やはり何か違う。先ほど見せた、あらゆる攻撃に対する臨機応変での素早さが欠けているよつなのだ。

「どないしたんや……」

ボーン・キングも気づいたらしい。不機嫌そうに顔をしかめている。

「確かになんか変だよな…………一人だけが相手だからって手加減してるわけでもなさそうだしよ。大体心が読めるんだから…………あ。」

キッドが何かに気づいたような声を出したので、王ドーラは振り返った。

「どうしました?」

「いや…………今ちょっと思いついたんだがさ。」

「だから、何をですか?」

「ドーラー＝ヨガあんまり何も考えてねえから、心を読んでも効果がないんじゃないの?」

あ、とこいつのような声が、王ドーラの口からもマタドーラの口からも漏れた。

「や、そりゃあいつうるかもな…………」

「ちよつと前にあったことでもすぐ忘れちゃこますからね。そりこえば、ずっと前に同じことがあったよつな…………」

「シューートオー！」

突然ドラリー二ヨが叫んだかと思つと、鈍い衝撃音と共にサッカー
ボールがマサオの腹へ命中した。

「うぐっ…………！」

うめき声を上げて、マサオが悶絶する。ネネとボーチャんとしんの
すけは、その光景を青ざめた顔で見つめていた。

「大丈夫かな～？」

「お前がやつたんだる…………」

心配そうにマサオを見ているドラリー二ヨに、キッドが呆れた声を
かけたその時、

ボシュツ！

白い煙がもくもくと立ち上り、その中に、黄緑色のネコ型ロボット
に戻ったドラリー二ヨが田をぱちくつさせて立っていた。

「……戻っちゃいましたね。」

「トオル、ドラリー二ヨが薬を飲んだのってどれぐらい前だ？」

「んーと……せいぜい五分ぐらい前ですかね。」

「すいぶんと切れるのが早いであーるな……。」

「物忘れが激しいからじやね？」

ドラえもんズのメンバーたちがてんでに勝手な」とを言つて居ると、ドリ二コフが突然、ガウガウと吠え出した。

何事かドリ二コフを見たキッドたちは、目を丸くした。

ボーン・キングが怒りの形相を浮かべて、いつの間にか野原一家のすぐ近くに立つて居る。ナタリー・コツバーンはしんのすけの襟首を捕まえて、持ち上げていた。ボーチャんが震えながらも、後ろにいるネネを守るようにして立つて居る。

「しまった…………！」

キッドが慌てて駆け寄つましたが、キングの蹴りを食らひそうになつて後ずさつた。

「ひつ、あんなアホに最後の四天王がやられるとは思わへんかったわ……まあええ。」こいつらをわざ自身の手でやれるんやからのお。

ナタリー、そのタヌキどもを始末しどけつー！」

「はい、キング様。」

ナタリーが笑みを浮かべてしんのすけを離し、いかにも近寄つてくれ。身構えようとした王ジラとマタドーラを、キッドが不意に腕を伸ばして止めた。

「待て。この女は俺がやる。」

王ジラがびっくりした顔になつて、キッドを見た。

「そりゃまた、どうしてですか？」
「だつてお前らは全員パワーアップして闘つたつてのに、このままだと俺の出番がなくなるじゃねえか！」
「そんなことで…」

王ジラは呆れながらも、仕方ないなといつ表情で肩をすくめた。

「…まあいいでしょう。ただし、そんなこと言つとこで負けたりしたら承知しませんよ？」
「バーカ、誰が負けるかよ、こんなおばさんだ。」

「おばさんですか？ー？」

ナタリーの顔から笑みが消え、代わりに激しい怒りの表情が現れた。

多くの女性がそうであるように、彼女もまた『おばさん』と云ふ言葉には敏感らしい。

「行け！お前らはしんのすけたちを守るんだーー！」

早くも薬の入ったびんを取り出しながら、キッドが叫んだ。

暗い部屋の中で、小さな人影が不安そうに身体を揺らしつつ、モニター画面に映し出される光景眺めていた。

みんなは大丈夫だらうか。あの骸骨みたいな恐ろしげな奴と、野原一家の関係を知った時は正直信じられなかつた。まったくあの家族

は、今までどれだけの面倒事に巻き込まれてきているのだろう?

……それに、あの人はうまくやつてくれるだろうか。

人影はふとモニター画面から目を離し、自分の手の中に視線を落とした。

その手の中で、何かが虹色に輝いている。光はどんどん強くなってきていて、今や目を細めないと直視できない。

さっきからずっと光りっぱなしだ……これもあの人と関係あるのだろうか?

ぼんやりと、モニター画面に目を戻した人影は、次の瞬間、びくつと身を震わせた。

……さっきまで女人の人と闘っていたドラ・ザ・キッドがいなくなり、代わりに一人の少年が光線銃みたいなものを撃ちまくっている。ただしその少年は、キッドがかぶっていたのと同じカウボーイハットを頭に乗せていた。

その少年の顔は、しんのすけにそっくりだった。

「…つたぐ、何でオレがしきのすかと同じ姿にならなきゃならねえんだよー。」

キッドは自分でもなぜか分からぬが無性に腹が立つて、光線銃の銃身でナタリーの足を殴りつけた。さやあと足でナタリーが飛びのぐ。

「しょうがないでしょ。自分で飲んだんだから。」

Hドリフの返事は受けない。

「それとも何ですか、ネネさんの姿の方がよかつたとしても…」

「いや、やつこつ意味で言つたんじや…」

ちなみに言つておくと、一人はこの会話を、激戦を繰り広げながら交わしていた。

キッドは一人、ナタリーに立ち向かい、あのドラえもんズのメンバーはボーン・キングに打ちかかって野原一家やネネたちを救い出そうと頑張っていた。

ナタリーはキッドに、

「あつ という間に片づけてやるからね、このタヌキ！」

などと強気な言葉を吐いたが、肝心の力 자체はそれほどものでもなく、むしろキッドに押されつつあった。パワーアップしたキッドの、もともと百発百中である狙撃の腕はさらに上がり、キッドはお得意の空氣砲ではないとはいへ、光線銃の自在に操つてナタリーに巧みに撃ち込んだ。

(ちつ……こんな時、空氣砲だったら一発で氣絶させられるんだがな。)

強気で元気なキッドだったが、彼は誰かを殺すなんて考えるのも嫌だつた。光線銃を使わず、今まで空氣砲を愛用してきたのもそのためだ。

光線銃では、本気で当たら死んでしまう可能性がある。いくら敵でも、命まで奪う気にはなれない。

「おつりやあつとー。」

キッドは絶好のチャンスをつかんだ。……ナタリーの足元に光線が当たり、大きくよろめかせることに成功したのだ。

間髪入れずにキッドは飛びかかり、銃身でナタリーの頭を打った。倒れ込んだナタリーの首筋を、もう一回呑く。

それでナタリーは、もつ完全に動かなくなつた。

「ナタリー……！」

ボーン・キングが目を見開いた。まさかこれほど早く敗れるとは、思つてもみなかつたのだ。

彼は五体ものネコ型ロボット相手に、指に仕込まれたボーン・フィンガー・ピストルで応戦していた。骨でできた弾にかすられ、身体

のあちこちに傷ができるいたが、それでも王ドラたちはひるまぬで頑張っていた。

自分たちの手に、みんなの命がかかっているのだ……負けるわけにはいかない！

「おー、お前らー手伝はずーーー。」

キッドがしんのすけと同じ声で叫び、キングめがけてさつと光線銃を撃つた。

キングはぐるっと身を返すと、ワインガー・ピストルを一発撃つた。キッドもまた、軽い身のこなしでよける。そして銃を持つ手を見ることすらせずに、光線を続けさまで放った。

ボーン・キングは予想外の事態に困惑し、腹を立てていた。

ナタリーがあんなにすぐやられたのは予想外だつた……。それにこいつらの、一致団結した闘い方。それを見ていると、何だかむかむかしてくる。

野原一家への復讐のために春日部を襲つたといつのに……こんな奴らが来るとは……。

ボシュツ！

「あ、キッドも元に戻つたね！」

「ちえ、力が増えたみたいですが、一氣持ちよかつたのによ。」

「あれ、さつきは嫌がつてませんでした？」

「うるせえ！」

軽口を叩きあいながらも、このタヌキたちはじわじわと、しかし確実に、自分を追いつめようとしてくる。

(…「こつは一つ、ここいらの意氣を吹き飛ばすよ」ことをせな
あかんな……)

でも、何がいいだろ？

野原一家とネネとボーチャンはひとたまりとなつて、部屋の隅でじつとしている。…………しかしながらトオルは一人だけ離れて、目を細めて闘いの様子を見守っている。

それを見た瞬間、キングの頭に名案が浮かんだ。

キングは足元にかぶりついているドライバーを攻撃しようとして……突如、右手の指の向きを変えた。

まつすぐ、トオルの胸へと向けて。

ボーン・フィンガー・ピストルの鳴る、乾いた音が響きわたつた。

21・弔るために（後書き）

ドラえもんズが善戦する中、突如響いた無常な銃声…… 次回は驚愕の展開が待つ！？ ぜひ期待！

22 ボーン・キングの驚愕（前書き）

風間くんが…………撃たれた！？次の展開はこの後すぐつーちゅうと
短めです。感想待ってます

22 ボーン・キングの驚愕

響きわたる銃声。一拍おいて、じわっと倒れる音。

ただ、それだけだ。さっきまでは一転、静まりかえった部屋の中で、ドラえもんズもしんのすけたちも呆然となつて、倒れているトルを見下ろしていた。

トルは目を閉じていた。胸に小さな穴が開いているのが見えた。そこから赤い色がにじんてきて、服を徐々に染めていくのも分かった。

それでもみんなは、目の前の光景を理解できずにいた。

突然、ボーン・キングが笑い出した。

「どや？ わいにかかれば、お前らが必死に守ろうとしたもんもあつねう間に壊したれるんや。思い知つたか。」

「…………」

誰も答えない。みんな、トホルの姿から皿を離さうともしない。

(ビーやら独り通り、全體意氣消沈して鬱ひびくとなつたみ
たこやな……)

キングは一ヤリとほくせんと、ボーン・フィンガー・ピストルを
キッドの頭に向けた。

「まあ安心せえや。すぐお前らもこのカキと同じ所に連れてつたる

…………」

ビカツ！

「つおつーな、なんやー?..」

キングはたじろがれ、思わず後ずさりした。

キッドたち、ドラえもんズの身体から、まばゆいばかりの虹色の光が放たれ出したのだ。

キッドの帽子から。王ドラの袖から。マタドーラとドラメッシュとドラリーーのポケットから。ドランゴフのマフラーから……。

光に導かれるようにして、キッドたちは一斉に、光を放っているもの 親友テレカを取り出した。

親友テレカはこれまでにも見せたことのないような、強い輝き方をしていました。でも直視できない、きつい光ではない。まるで春の太陽のように柔らかな輝きだった。

「一枚足りないのに……」

王ドラが咳き、そつとテレカを、いつものように頭上へかかげる。他のメンバーたちも同じようにした。

親友テレカの放つ虹色の光がますます強烈になり、一つに寄り集まつて、次第に巨大な光の玉となり膨らんでいく。

みんなのトルルを思つ気持ちが、親友テレカの光になつたんだ
そうドリローー！^三は思つた。

虹色の玉はどんどん、どんどん大きくなり、やがてゆるやかに回転しながら、光の渦へと変化し始めた。

もう膨れ上がりなままでに、その光の渦が大きくなつた時、不意に渦の回転が止まつた。そしてぎゅうっと内側に向かつて、すぼまつたかと思つと……。

パーンーと、ものすごい音と共に、光の渦が弾け飛んだ。

無数に弾けた光の粒子が、キングめがけて一直線に降り注いでいく。
キングの悲鳴が聞こえた。

しんのすけたちはほとんど凍りついたようになつて、その光景をじつと見守つていたが、しんのすけの目からまだ涙が流れていた。

キッドたちは、すさまじい痛みを全身に感じていた。

自分たちの氣力を糧にしながら、親友テレカから虹色の光があふれ出していく。悲鳴をあげ、テレカを離してしまいそうになるのをこらえながら、キッドは親友テレカをつかむ手に、さらに力をこめた。

キングがよろめいている。弱ってきてる。あと一押しで、倒せるところまで来ている。

だが、もうダメだった。 氣力が、限界を告げている。

キッドは痛みにこわばる全身の力を、ゆっくりと抜いていった。

周囲を見回すと、Hドリたちも床に座り込んで、夢から覚めた
よつな顔をしてる。…………それぞれの足下には、一枚の親友テレ

我に返った時、キッズは床に膝をついていた。

力が転がっていた。

キングもまた、膝をついていた。黒い服はぼろぼろになり、銃弾でも傷つかない頑丈な骨の身体のあちこちが、無惨にかけてしまっている。

「キング様……！」

田を見ましたナタリーが、こわい手を伸ばしてキングを立たせた。キングはよろめきながらも立ち上ると、怒りと困惑の入り交じった顔で、ドライニヨたちと親友テレカをじっと見つめた。

「な、なんなんや、お前らは！？意氣消沈しどたやないか！それにわいを傷つけられるのは、ボーン・ブレードだけのはずやのに……」

「…………キング。あんた、相変わらず成長してないね。そんなことしたら逆効果だつて、まだ分からないの？」

(…………?)

突如、今まで聞いたことのない新しい声が割り込んできて、敵味方関係なくみんな田をぱぱぱぱぱせた。だ、誰だ？

さつと、地面をなでるような音がした。　　何気なくそちらを見やつた王ジラは、さやつと言んでそばにいたドラメッドに抱きついた。

倒れていたトオルが、半身を起していた。右手で口から出る血を

ぬぐつてこる。

「お、お、お。」

さすがのボーン・キングも言つべき葉をとつて見つけられず、壊れたラジオみたいな声を出した。

「お、お前、何で生きとるんやー。わいのファインガー・ピストルの弾は、完璧にお前の心臓を貫いたはずやでー。」

トオルはキングを見たが、質問には答えなかつた。……かわりに髪と顔に手をかけ、ぐいと引っ張つた。

キッドたちと、しんのすけたちの目が点になつた。

まるで木の皮か何かのように、トオルの顔がべろりとはがれた。髪の毛も呆気なく取れ、下から見事なまでに真っ白な、滑らかで長い髪が現れた。肌も同じくらい白く、瞳は鮮やかな赤だ。唇とまぶた

が、なぜか鮮やかな青色に染まっている。

わつあまでトオルが立っていた所に、白髪に赤い目の中少女性が座つていた。

「…………お、おこ。」

わつとのじとでキッシュが声を出したが、少女はそれがまるで聞こえないかのように反応せず、じちらを見ようとしなかつた。ただ一心に、キングの顔を見つめている。 キングはなぜかぶるぶるとためらなく震え、立つのせえままならない状態だった。

やがてその口から、途切れ途切れに声がもれた。

「…………ね……おかん……」

束の間、みんなキングの言葉の意味が分からずじまかと叱られてしまった。

「…………え?」

「えええええええ！」？

22 ボーン・キングの驚愕（後書き）

なんと現れた美少女は、キングの…………母親つ？ええーつ、どうい
うこと……というわけで、次回もお見逃しなく！（ - - ^ * ）

23 ボーン・クイーン(前書き)

ついでに、この辺から私の妄想ネタが満開します。ご注意下さい(^ ^ ;)

23 ボーン・クイーン

「久しぶりね、キング。」

誰もが何も言えずじる中、美少女は静かに言った。

「ボーン・クイーンのあたしの田の畠がないと」「で、なーんかこそ
こそやつてんなあとが思つてたら、こんなことやつてくれちゃつて
るなんてね。」

「クイーン?」

しんのすけが、ぼんやりと淡い声を出した。彼がこんなしゃべり方
をすることを、キッドは初めて耳にした。

「女王様なの?」

「うさ。」

少女はよひよひしんのすけに田を向かへ、立つ立つした。

「よく分かつてんじゃない。感心感心。」

何だかお氣楽そうな女王様である。

「そもそもボーン・バンパイアってのはそう有害な種族じゃないのよ。人間の骨を吸うことは吸うけど、正確にいえばカルシウム分を少しあただくだけだから、骨抜きになつたりはしないの。」

淡々とした少女の ボーン・クイーンの話を、野原一家はぽかんと口を開けて聞いている。

「でもあたしの一人っ子の、こいつだけは…………いつも人間の骨を、それこそ骨抜きになるまで吸いまくっていた。もちろん、あたしの知らないところでね。ほら、だからこいつはこんな、骸骨みたいな外見になってしまっているのよ。本来あたしたちは、そう人間と変わった姿をしてるわけじゃないのにね。…………この、赤い瞳以外は。

「

クイーンは自分の目を指して、くすくすっと笑つた。

「あたしの夫が死んで、あいつが次期のボーン・キングになつた時には、あたしもあいつの動きが怪しいと思い始めていた。そこで信頼できる部下を使って、見張ついたら………」

不意に、クイーンの赤い瞳に光が瞬いた。　　深い怒りと、悲しみをたたえた光だった。

「あらうことか、こいつは配下を引き連れて、人間たちを家畜化しようとしていた。……あたしたちは人間がないと、生きていかれない。つまり人間が死んだら、骨を吸えずにはあたしたちも死ぬということ……そのことはしつかり教えてあったのに、あいつがそれでも人間たちを征服しようとしていると知つて、あたしは愕然としたわ。」

突然、キングが口を挟んできた。

「お、おかんは昔っから、人間びいきなんやー人間どもを家畜化すれば、好きなだけ骨が吸える……」

小さな母親にさつとにらまれて、ボーン・キングはまた言葉を失った。クイーンは静かな、しかし怒りのこもった口調で、話を続けた。

「ええそうよ。あたしは人間という種族に興味を持っている。短い命とすぐに衰えてしまう身体を持った、弱い種族であるのは確かだけど、彼らには私たちにないものがある。……短いからこそ、強く輝く命や思い。それは前々から、あたしがあこがれていたものでもあつた……」

クイーンは、ここだけちょっとため息をつべと、自分の細い右腕をちよん、とつづいてみせた。

「…………ボーン・ブレードは、あたしの右腕の骨から、あたし自身の手で作ったものよ。」

「な、なんやとー？」

キングが口をむいた。それにはかまわずに、クイーンは続ける。

「それを人間の若者に渡したのも、あたし。あんたが首をはねられたのを知ったあたしは、これで危険は去ったと思って眠りにつくことにした……女のボーン・バンパイヤの寿命は、とても長いからね。でも危険は、まだ去ってなかつた。こいつは人間との間に子孫を残していた。そうしてあたしが眠っている間に、こいつが復活して……あとは、あんたたちの知ってる通りよ。」

ボーン・クイーンは、呆然と座り込んでいる野原一家にうなずいて

みせた。

その時ドリュー・マガ、口調も内容もおよそ場違いなことを尋ねた。

「ねえねえ、本物のトオルはどうに行つかけたの？』

「あ……いけない、忘れてた。」

クイーンはしまったといつよつに口に手を当て、その体勢のまま、王ドリを見た。女の子が大の苦手の王ドリは、思わずびくっと後ずさる。

「な、何です？」

「あんた、悪いけど親友テレカでいつかに来るようになつて連絡してくんない？」

「は？」

「トオルくんに渡したんでしょ、親友テレカ。」

そうだった。王ドリは慌てて足元の親友テレカを拾い上げた。

あまりに慌てていたので、王ドリはボーン・クイーンがなぜか親友テレカのことを知っているらしいことを、不思議に思わなかつた。

トオルは 本物のトオルは、連絡がついてから數十分もたたな
いうちに、ドーラリー二ヨが開けた壁の穴から入ってきた。

「風間くーん！」

「トオルーッ！」

しんのすけとドーラリー二ヨが、ほとんど同時に声を上げてトオルの元へと駆け寄った。しかしトオルは、一人に手を握られながらそちらを見ようとはせず、ただじっとボーン・クイーンに視線を注い

でいた。

ボーン・クイーンが、微笑んだ。

「キング、あなたはよつぽどあたしが怖かつたのね。眠っているあたしを棺桶に入れて、わざわざここまで運んできてくれるなんて。目の届く場所に置きたかったんだじょう?でも残念ながら、それが裏目に出了ちやつたのよ。

あんたがあたしを棺桶に入れた時、あたしはもうほとんど目覚めかかっていた。完全に目が覚めた時にはびっくりしたわよ。見たこともない場所で、しかも棺桶の中に寝かされてるんだもの。まあでも、あたしはすぐに真相を突き止めて、これはしばらくじつとしてた方が安全だと思った。あたしにバレたと分かつたら、あんたはやけになつて人間たちを殺すかも知れないからね。でもこつそりモニター画面を棺桶の中に入れて、様子はずつと見てたのよ。

でもじつとして何もしないのは、嫌だった……だからあんたたちを読んだのよ。」

キッドが弾かれたように顔を上げた。他のメンバーたちも、啞然としてボーン・クイーンの可愛らしい顔を見つめている。

じぱりくして、よつやくドーラメッシュがうわづつた声を出した。

「お、お主が…………読んだ、と?しかし、あれは…………あれは、確

か……

「 親友テレカが暴走したんでしょ。」

クイーンはにつこりして、白い髪に触れた。もうドリラえもんズのメンバーたちは頭がしごれたようになつて、どうやつて反応したらいいものか見当もつかない。

それに置みかけるかのように、ボーン・クイーンは凜と言ひ放つた。

「親友テレカを作ったのは、あたしなのよ。」

23 ボーン・クイーン（後書き）

次回はなんと、 親友テレカ誕生の秘密に迫る……………？
ちうん私のねつ造ですので、 悪しからず m(—_—)m

も

24・親友テレカの秘密（前書き）

親友テレカの秘密が、とうとう明らかに！？？ねつ造自重ですっ（汗）。

24・親友テレカの秘密

親友テレカ。

それは、ドラえもんズのダイヤモンドより堅い友情の証だった。

ドラえもんたちは数々の試練を乗り越え、難関をくぐり抜け……
そして、親友テレカを手に入れたのだ。

親友テレカは強大な力を持つ伝説の道具で、しかも真の友情を持つ者たちでないと所有することができない。ネコ型ロボットたちが四次元ポケットから出す便利道具とは、いわば別格の存在だった。

そういえば、一体この道具がどうやって作られたのか、考えてみたことは一度もなかつた。

「…………今、何て言つた？」

キッドがやつとのことで、かすれた声を出した。自分の手の中にいる親友テレカの温かさを、ほんやりと感じながら。

「だから、親友テレカはあたしが作つたんだってば。」

あいつわざわざつぶつと、ボーン・クイーンは一つ小さなあくびをした。

「えーと…………あれは、やつと千年ぐらい前のことだつたかな。」

「ちよ、ちよっとストップ!」

キッドは慌てて割り込んだ。

「え?」

「お前…………一体年いくつなんだ?」

「やあね、女性に年齢を聞くなんて失礼よ。あたしは…………あれ、何歳だったかしら。」

とにかく、自分でも忘れてしまつぽんじて間生きてこないとこいつ」とらじこ。

「…ま、いいか。あたしがまだ生まれてからそう経つてない頃のこ
とだつたんだけど、あたしはある七人組の人間の男女に会つた。彼
らは本当に仲がよくて……まあケンカとかもよくしてたけど。」

そう言いながら、ボーン・クイーンはちらりとエドワードとマタドーラの方を見た。

「でも、お互いのことを本当に信頼し合つているのがよく分かった
わ。その時あたしたちボーン・バンパイヤ一族の中では、相当ピリ
ピリした状態になつていたの。誰がボーン・バンパイヤたちの首領
になるのか、兄弟たちの間でもめてね……あたし、兄弟姉妹が
全部で10人もいたのよ。もちろんあたしもその争いに巻き込まれ
て、もういい加減嫌になつてきたところだつたから、あの七人と過
ごす時間はとっても楽しかつた。」でも。

不意に、クイーンの目に深い悲しみが浮かんだ。

「あたしのすぐ下の妹が、それに目をつけた。妹はその七人
を捕まえて……あたしの弱点を……聞き出さうとした……」

当然何も知らない七人は、クイーンの妹に激しく責めつけられ、ク
イーンがそれを知つて駆けつけた時には既に息が絶えていた。
お互いをかばうようにして、死んでいたといふ。

クイーンの瞳の暗さが増した。

「……あたしは妹を殺した。」

誰も……しんのすけでさえも、身動きしなかつた。

「あたしのせいに七人が死んだってことが、あたしには分かっていた。……だから、あたしは七人の骨を使って、彼らの友情をそこに残すこととした。」

キッドたちがけげんそうな表情を浮かべたのを見て、クイーンは薄く笑った。

「あたしたちボーン・バンパイアは、自分の骨に自分の思いを宿らせる技を持っている。人間でやつたことはなかつたけど、このままほつておくのはどうしても嫌だつたから……あたしは七人の胸の骨を使って、一枚ずつカードを作つていつた。」

王ドーラが、呟くようにして言った。

「それが…… 親友テレカ？」

「そりゃ。七人の友情はよっぽど強かつたらしくて、いざ完成してみるとあたしの想像よりもずっと強力なものができあがつた。また何

かに利用されちゃかなわないから、あたしは妹の住んでいた屋敷の最深部に、それを隠した。妹は家の中に色々なトラップを仕掛けっていて、よほど信頼し合っている者たちが協力しない限り、誰も侵入できないみたいだつたから。」

キッドたちは顔を見合せた。クイーンは不意に、おかしそうに笑い出した。

「でも正直びっくりしたわ。誰かが親友テレカを手に入れたのは知っていたけど、こざり呼んでみたらあんたたちみたいなタヌキロボットだなんて……」

「ネコ型ロボットだ。」

キッドがムツとして言い返した。

「でも、あんたたちの友情は本物なのね……もう一人いたみたいだけど、あたしが少し力を貸してやつただけでこんな力を發揮できただなんて……」

クイーンが、どこかしみじみとした口調で言つて、トオルに目を向けた。

「あんたに変装してここに来てみた甲斐があつたつてもんだわ。」

トオルは曖昧な笑みを浮かべると、はつと顔を上げてキッドに駆け

寄り、ずっと手の中に握りしめていた親友テレカをそつと差し出した。キッドは思わず笑顔になり、しっかりと両手でそれを受け取った。

「まあ渡したのが全くの無駄ってことにならなくて、よかつたぜ。」

「それにしても、親友テレカの背後にこんな重い過去があるとは知りませんでしたね。」

これは王ドラの発言だ。

「まつたくだぜ。ていうか、これ骨でできんのか……」

改めて親友テレカをしげしげと見つめるマタドーラ。ドラメッドも同じようなまなざしを、親友テレカに注いでいる。しかしドラリーー曰くドラ二コフは、そんな話はどうでもいいのかそれともただ単に忘れてしまったのか、親友テレカをしまってサッカーボールのリフティングを始めたり、何もせずにぼーっとしたりしていた。

不意にクイーンが立ち上がったので、みんなびくつとしてそちらを向いた。

「セヒト。」

さつきまでは打つて変わつてきびしきした口調で、ボーン・クイーンは話し始めた。

「キングのことはもうないこととして、こいつがやつちやつたことの後始末をしなくちゃね。」

「やうですね……」

言いながら、王ドラは暗い気持ちでいた。これだけの人間を吸血鬼化し、ボーちゃんやネネの心に傷をつけた……それらのことを、どうやつたら後始末できるところのだらう?

王ドラのその思いには、ちゃんと顔に出てしまつたらしい。 クイーンが王ドラを見て、クスッと笑つた。王ドラは顔が赤くなるのを感じた。

「…………そんなに心配しなくても大丈夫よ。」

クイーンは静かにそう言った。

「いつも時に対処する方法が、ちゃんとあるから。」

その瞬間、キングの顔が明らかにわざった。

トオルと野原一家は、ドラマチックのじゅうたんに乗って、静かに春田部の空を滑空していた。

下から、歌声が響いてくる。何と言ひてこらのか分からぬ、ビニ
か不思議な旋律を持つ歌。聞いてみると、胸の中を温かく力強い風
が駆けめぐつしていくよしな気がする。

ボーン・クイーンの歌声だった。

ネネとボーチャンは、じゅうたんの上で折り重なるよつてて眠っ
ている。 春日部の人々も、今頃同じよつてて眠りこつてている
ことだね。"

ネネの闇じられた目から涙がこぼれているのをぼんやりと見つめな
がら、トオルはクイーンの言葉を思い返していた。

「あたしはこれから一族に代々伝わる、人間に無理やり注入されたボーン・バンパイヤの体液の力を鎮め、消し去る歌を歌う。」

クイーンは静かにそう言った。 ボーン・キングはナタリーを置いて、どこかへ逃げてしまっていた。

追おうとしたキッドたちをクイーンは止め、

「ほつとけばいいわ。」

とだけ言つて、まるで意に介していないようだった。

「あたしが歌い始めたら、吸血鬼化した春田部の人々は眠り始めるはず。でも一応、あんたたちは何か道具でも使って隠れてなさい。それから。」

クイーンはキッドたちとトオルと野原一家に近づき、少し離れた所で疲れたように座り込んでいるネネとボーチャンには聞こえないよう、小さく呟きやいた。

「――」の歌には、キングのせいで生まれた苦しみを消す力もある。つまり、あいつに操られていた時の記憶も消えるってわけだけど……」

「――」でやや口もつ、クイーンは軽くため息をついた。

「……当然、あの鼻水くんの記憶も消しておくれべきだと思つ。あの子は操られたふりをしてあんたたちに攻撃したことで、相当自分を責めているはずだから。それに、ネネも。」

ネネの名前が突然出てきたので、みんな顔を上げてクイーンを見つめた。クイーンは心なしか、痛みをこらえていようつた顔をしている。

「…あの子はキングの計画の初めから、あいつに利用されていた。あの花畠は、生き物に対し眠気を誘うもの。あそこに閉じ込められている間、ネネの身体は確実に衰弱していく。だからあたしはこの黄緑色のロボットくんをそこに送り込んで、助けることにしたわけだけど……」

ドフリーランとトオルは驚いて顔を見合せた。

「……でもあんな話を聞かされて、さぞ心を痛めているだらうな。」

マタドーラが付け加えるようにして言つと、クイーンは大きくうなずいた。

「わ、それなのよ。」

「だからあたしは、ネネの記憶も消してやつた方がいいと思つてる。」

「

何か言おうとしたしんのすけを、キッドは手を上げて遮るような仕草をした。そして優しく田でネネをちらりと見やつて、低く呟いた。

「オレも、それが一番いいと思ひぜ。何も心の中に、つらい思い出を残してやることなんかねえ。……ただ、しんのすけ、そしてトオル。」

一人の顔に強い視線を投げかけながら、キッドはゆっくりと、囁んで呟めるように言った。

「約束してくれ。あの子と絶交するよつのことは、もうしないって。確かに腹にすえかねることもあるだろ。だんな奴にだって、いい所と悪い所があるからな。……オレらだつてそうさ。ケンカをすることもよくある。」

王ジニアとジニアメッシュが、うなずきながら聞いてくる。

「でもな、そういう所を全部ひつぐるめて受け入れられるのが、本当の友達ってもんじやねえか？」

お前たちは今回のこと、危うく友情を引き裂かれたところだつた。でもネネやボー、マサオの記憶を消してもらえば、またやり直せるだろ？

秘密を抱えるのはいい気分じゃねえかも知れないが、これからこの

とを抑えれば、やつするのが一番こと思つがな……」

これで、春日部を襲つた災厄が終わる。

ネネやボーチャン、マサオも、元通りになるだらう。またカスカベ防衛隊を結成して、みんなで遊ぶ毎日が来るだらう。

「あい……！」

みさえが、不意に声を上げた。

「塔が……」

春日部の中心にそびえていた巨大な金属塔が、てっぺんから消え去つていく。…………崩れていくのではなく、まるで風に吹き飛ばされた砂のよくな、細かい粒子となつて空中へ拡散していく。

その光景を、みんなと一緒に声もなく見つめ、ボーン・クイーンの歌声を聞いてこらつちこらつち、ふとトオルの目から涙があふれてきた。

後から後から流れてきて、止まらない。気がついた王ドラが慌て始めた。

「わーい、じうしたんですか、トオルくん。急に泣いたりして……」

「わーいながら、王ドラは今しかもマタドーラのヒラコマントでトオルの涙をふき取らうとした。

「何で泣くの？」

ドライバーもおろおろしている。黙つて見ていたドライバフが、自分のマフラーが汚れるのもかまわずに、トオルの顔をふいてくれた。

…………優しいロボットたちなのだ、本当に。

歌声が、春日部の夜の闇を静かに揺らしていく。

24・親友テレカの秘密（後書き）

恐らく次回で、この小説は完結ですが、少し曖昧な部分があるかと思われます。その理由は、なんと次回の後書きで明らかに！？……最後までどうぞ、お付き合い願います。「ごめんなさいっ！」

25・終わり（前書き）

これにて完結…………ですが、まあ最後まで読んで下さー。重要なお知らせもありますので（^ - ^）

夜の闇に包まれた春日部山の中を、走る人影が一つあった。

ボーン・キングは痛む身体を引きずり、ボロ同然の衣をまとつて、激しく息を切らしながら駆けていた。

「くそ…………予想外なことばっかりや。なんでおかんまで、出でいなあかんねん…………」

それらさえなければ、自分の復讐は簡単に果たさせていたはずなのに！

足がもつれ、キングは地面に倒れ込んでしまった。口の中に砂が入つてくる。

「ぐつ……」

顔を上げたキングは、田の前に覆いかぶさるよつこじて立っている小さな影に気づき、一瞬ぎょっと田を見開いた。

「…………なんや、お前か。」

思わず安堵のため息がこぼれる。そんなキングの姿を見下ろしながら、少女の無表情な声が、その場に響いた。

「すこぶる手ひどくやられたようですね、ボーン・キング。」

「ふん、じごべりこ何ともないわ。…………そや、ちゅうじだえ。安全に隠れられるようなとこに連れてってくれや。少なくともおかんがいなくなるまでは、わいは隠れとつた方がええからな。」

影は何も答えなかつた。代わりに、音もなくすつゝと、キングのすぐそばへ歩み寄つた。

キングは身を堅くした。何をする気だ？

しかし影は、別段何もせずにキングのそばを通り過ぎた。

「 役立たず。」

次の瞬間、キングの全身から炎が上がった。

キングは束の間、ぽかんとして自分を見つめた。……そして、絶叫し、転げ回り、何とかして身体を呑み込む炎から逃れようとした。しかし、火の勢いは強かつた。みるみるうちに、キングの骨が黒く変色していく。

「ぐああっ！…………何で、何でやつ！？わいが何をしたって…………」

「キングさん。…………あなたは、約束を破りましたね。」

感情を一絲も交えずに、声が静かに言った。

「や、約束？そんなもん……」

「風間トオルに、直接こは手を出せなことこの約束です。」

一瞬、その場に沈黙が満ちた。

「で、でも…………風間トオルは死んだらんやう！？わいが撃つたん
は、おかんやつたんやー！」

「あなたはそれを分かつていたわけじゃなかつたんでしょ」
「…」

声は冷ややかに囁いた。

「わづ少し使えるかと思つていたのですがね…………残念ですよ、ボ

ーン・キング。」

キングはせりに何か言おうとしたが、焼けた骨が一拳にがらつと崩れ、灰に変わり、キングの身体は崩された積み木の城みたいに、一気にペッちゃんこになった。

影はそちらに田を向けようともせず、しばらくじっとただずんでいたが、ふとこちらから何かを取り出して操作し、小声でしゃべり出した。

「私は……」
「私です。」
「はい、ボーン・キングはダメでしたが……さつき始末しました。……あのロボットたちは、使えるんじゃないかなと……」
「……」

タイムマシンで家に到着した途端、みさえは泣き出した。ひろしがみさえの肩を抱くよつこしながら、キッドたちに何度も礼を言つている。

春日部はもう、すっかり元通りになつていた。ネネたちも、吸血鬼化された人々も記憶を消され、みんなキッドたちの手によつて家に帰されている。明日の朝になれば何事もなく目覚め、いつも通りの日常が始まる」とだらり。

ボーン・クイーンは歌を歌い終わると、忽然と姿を消していた。

もう時刻は真夜中になつていたが、しんのすけとトオルはこれまでにく目がさえていた。王ドラが即行で調合した薬品のおかげで、トオルはもう男の子に戻っている。

静かな夜を取り戻した春日部を窓辺に見つめているつむじ、命からがら逃げ出したあの日がドラえもんズのメンバーたちに助けてもらつた時のことが胸に迫つてきた。

「ひま、おうちこやつと帰つて」れたゾ。」

しんのすけが駄くと、しんのすけの腕の中でひまわりが首をよじり、
こからを見上げた。その目に明るい色があるのを見て、しんのすけ
は心が温まるのを感じた。

「みんな。」

不意に呼ばれて、キッドたちは振り返った。

トオルが何だかもじもじしながら、じりりを見つめて立つてゐる。

「みんな……」

トオルは口もつた。

自分が何を言いたいのか、不意に分からなくなってしまったのだ。
胸にあふれている思いがあまりにもたくさんありすぎて、何と言つ
たらいいのか分からない。

ようやく口から出たのは、とても単純な言葉だった。

「…………」

「…………」

いつてしまつと、急にふつと楽になつた。

キッドたちは顔を見合せたが、何に対するお礼なのか問おうとはしなかつた。

「これから、色んなことがあるんだらうな。」

キッドがトオルとしんのすけを交互に見つめながら、言った。

「でも、お前らならきっと、俺たちに負けないくらいの親友ビッグになれるぜ……仲良くするんだぞ。」

二人の顔に笑みが浮かぶのを見て同じようにこりしながら、キッドたちはゆっくりと身体の向きを変え、タイムマシンが置いてあるタイムホールへと向かい始めた。が、突然、ドラリー＝ヨガがぐるりときびすを返した。

「ジラニー＝ヨガ、どうしただあーるか？」

慌てて止めようとするジラメッシュの手を、ジラニー＝ヨガはやんわりと振り払った。

「みんな、ちょっとだけ待つて。」

そう言ってから、ドラリー＝ヨガはトオルに近づいた。右手を後ろに回して、何かを隠してくるような格好をしている。

「はい、これあげる。」

ドラリーー|曰はオルの鼻先に、背中に回していた右手をぐつと突き出した。 けげんそうな顔をしていたトオルの目が、大きく見開かれる。

そこにあつたのは、ドラリーー|曰が首にまといて居るものとやつくりな、小さいサッカーボール付きの首輪だつた。

「これ……」

息を呑んだトオルに、ドラリーー|曰は無邪氣なにこにこ顔で言った。

「これあげるから、トオル、僕のこと忘れちゃダメだよー。僕もトオルのこと、忘れないようにするからーー。」

「ドラリーー|曰…………みんながドラリーー|曰みたいに物忘れが激しいわけじゃないんですよ。」

呆れかえった王ジラの声。ドラリーー|曰はえへへと照れ笑いを浮か

べ、それでもちやんとトオルに首輪を押しつけて、みんなの元に戻つた。

「ぱいぱーい、お便器で～。」

「たいや～い。」

しんのすけとひまわりが、タイムホールへ消えていくキッドたちの背中に声をかけた。

最後にドーリー^{二郎}がタイムホールによじ登つた時、トオルは思わず叫んだ。

「ドーリー^{二郎}。」

ドーリー^{二郎}はぐるりと振り向いて、トオルと視線を合わせた。トオルは何と言つべきか、また迷つているような顔をしていたが、やがて、大声で言つた。

「ドーリー^{二郎}さん、よろしく。」

ドラリー＝ヨの顔に、真夏の太陽のような明るい笑みが浮かんだ。

その笑顔のまま、ドラリー＝ヨはタイムホールの中、仲間が待つ所へと、入つていった。

おわり

25・終わり（後書き）

いきなりですが、完結いたしました。読者の皆様、評価・感想を下さった皆様、本当にありがとうございました（――）こんな雑で未熟な小説に付き合っていただき、マジで感涙です（Ｔ×Ｔ）……さて、またまたいきなりですが……この話、かなり謎めいた終わり方をしているかと思います。なぜなら、この物語には、続編があるからです（。。。）――ツ！？……内容などは、またそのうち分かる……と思つます、よ（ニヤッ）。お楽しみではつ（< - >）～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3734d/>

クレ shin & ドラえもんズ～ホラー & ファンタジー劇場～恐怖のカスカベ吸血鬼

2010年10月9日13時34分発行